

小さな森に花は咲く

空丘ルミイ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

主人公、森睦疾透（もりちかはやと）は中学生のころから東京に一つ上の姉の水夏（すいか）と一緒に引越してきた。親が仕事で海外に行くことになったため1か月ごとに仕送りも入ったりしている。東京に引越して来たらアパートの近くにある普通の中学校に通い、水夏は疾透とは違う学校に通っていた。それから時は過ぎて疾透は中学3年生になり、水夏は高校2年生になっていた。水夏は羽丘学園へ通い、疾透は姉の水夏が高校に入った年から共学になったという花咲川学園に合格し新しい学園生活への楽しさを胸に抱いていた・・・

【主人公設定】

名前：森睦疾透（もりちかはやと）

学年：高校1年（2章からは高校2年）

学校：花咲川学園

誕生日：2月14日

身長：160cm（2章では162cm）

体重：59kg（2章でも変わらず59kg）

好きなもの：甘いもの（ただしビターチョコは苦手）、パン類（特にチョコチップパン）

嫌いなもの：苦いもの、酸っぱいもの

趣味：絵を描くこと

一人称：俺

髪の色：明るめの黄緑

髪型：前髪はショートカットだが後ろ髪を気にならない程度まで伸ばしてる（2章か

らは後ろ髪をバツサリとカットしてシヨートカットに)

瞳の色：赤

言動：仲良くなれそうな人とは少し碎けた話し方（先輩には敬語）

備考：何事にも積極的

目次

高校1年生編

| | |
|----------------|-----|
| 0話：新しい友達 | 1 |
| 1話：再開と再会 | 18 |
| 2話：その小さな背中を押して | 35 |
| 3話：高い壁を乗り越えて | 52 |
| 4話：彩りと試練 | 70 |
| 5話：気が付けば | 88 |
| 6話：まだ知らない音を求めて | 105 |
| 7話：手助けという名の集合 | 122 |
| 8話：巻き込まれて泊まって | 138 |

9話：忘れられない1日 | 157

10話：Xmas Party

174

11話：みんなで過ごす新しい日々

始まり

12話：未来への旅立ち | 207

高校2年生編

13話：みんなでまた輝こう | 223

14話：新しい道しるべ | 239

15話：色んな意味で苦悩 | 258

16話：選択と試み | 282

17話：艱難辛苦 | 302

18話：心情と予定 | 320

19話：迫られる決断 | 336

20話：思いつきは突然に | 355

21話：Various color

S | 375

22話：今はこの時を楽しんで

396

23話：出した答え | 420

24話：未来への誓い | 442

最終話：小さな森に花は咲く | 463

番外編：日常での甘い香りはイベント

要素満載 | 487

高校1年生編

0話：新しい友達

4月23日

今日は花咲川学園の入学式だ。制服も花咲川のものになり、新しい学園生活が始まる。姉さんが通ってるの羽丘学園も今日が入学式らしいから生徒会に入っている姉さんは朝から羽丘に向かったから花咲川までは俺一人で行くことになっている。

【午前7時30分：疾透の自室】

疾透「制服よし、かばんよし、髪型よし・・・大丈夫だな。さて、昨日一度ここから花咲川学園までかかる時間も計算してるし今日の日程も確認済みだ。そろそろ行くか」

【花咲川へ向かう道中】

疾透「うーん、今日は空が曇ってるな・・・天気予報では雨だなんてこと何も言っていなかったのに大丈夫なのか？」

??「天気予報では雨って言っていなかったけど大丈夫なのかな・・・？傘なんて持ってきてないしここからコンビニまで寄って傘を買ったとしても入学式まで間に合いそうにもないし・・・どうしよう・・・」

疾透「うん？」

??「あれ？」

まったく気が付かなかった。ずっと前を向いて歩いていたらせいかいつの間にか隣にいた女の子のことが目に止まりすらしなかったのだから。

疾透「えつと・・・どうかした？ずっとスマホを見て唸ってたみたいだけど」

??「ええっ!?そんな顔してた？めっちゃ恥ずかしい・・・」

疾透「うん」

??「い、今のは忘れて!!キミこそどうしたの？それにその制服・・・」

疾透「あ、俺は森睦疾透（もりちかはやと）って言うんだ。今日から花咲川学園に通うことになったんだよ」

??「森睦くんだね、私は牛込（うしごめ）りみっていうんだ。森睦くんと同じ花咲川学園に今日から通うんだ」

疾透「牛込さん、だね。俺のことは気軽に『疾透』って呼んでくれて構わないよ」

りみ「そう？じゃあ私のことも気軽に『りみ』って呼んでいいよ。よろしくね疾透くん」

疾透「こちらこそ、よろしくりみ。それよりも時間大丈夫？」

りみ「そ、そうだよ！そろそろ学校に入っておかなきゃ…！行こう、疾透くん！」

そうして俺たちは花咲川学園まで走っていった

【花咲川学園校舎前】

疾透「ぎ、ギリギリセーフ・・・」

りみ「ううー、疲れたー…運動得意じゃないからもうちよつと体力つけた方がいいか

も・・・」

?? 「本当にギリギリですね。この先大丈夫ですか？他の皆さんはすでに教室に入っているので後は二人だけですよ」

疾透 「そのネクタイの色・・・先輩ですか？すみません！」

りみ 「本当にすみません！どこの教室が空いてますか？」

?? 「1ーAが2つ空席があるのでそこへ向かってください。早くしないと先生に怒られますよ」

疾透 「本当にすみません！りみ、早く入ろう！」

りみ 「は、疾透くん!? 待って・・・！」

〔1ーA〕

疾透「つ、着いた・・・先輩に空いてる教室を聞いて正解だったね・・・」
りみ「う、うん・・・もう走れないよ・・・」

先生「入学式初日に遅刻寸前とは…この先大丈夫なのでしょう。時間も押してるので早く席についてください」

疾透「えーつと空いてる席は・・・あそこの2つだけか」

りみ「そうみたいだね・・・早く座ろう？」

それから体育館に移動し入学式が始まった。学園長の挨拶や生徒会長のあいさつ、入生代表の挨拶が終わり入学式は終わった。それから俺たちは体育館で待機し、これから1年お世話になるクラスメイトや先生のところに集まって教室に移動した。

【1-1-A】

入学式が終わった後のクラス分けで俺は1-1-Aで一年間勉強することになった。体

育館ではクラス分けをただけなので自己紹介をその日に済ませてしまおうと先生が言ったので教室に入ってから自己紹介することになった。

疾透「森睦疾透です。中学生のころからこっちに姉と一緒に引越して来てから近くの中学校に通い、ここを受験して今年入学しました。趣味は絵を書くことです。みなさん、よろしくお願いします」

とまあ簡単に自己紹介を済ませて席に戻る。それから20分ほどで他のクラスメイトの自己紹介が終わり、30分ほどクラスメイトと話す時間を先生が作ってくれたのでクラスメイトと話すことにした。

りみ「疾透くん、改めてよろしくね。」

疾透「こちらこそ。改めてよろしく、りみ」

とまあ、偶然にもりみと同じクラスに割り当てられた。りみも俺も少し驚いていたけど通学路で話していたような感じで普通に挨拶した。

??「やつほー！私は戸山香澄（とやまかすみ）だよ！よろしくねりみりん、もりりん！」

りみ「りみりんってもしかして私のこと・・・？よろしくね、香澄ちゃん」

疾透「もりりんって俺のことか・・・？よろしく、香澄」

香澄「うん、これから一年よろしくねー！」

疾透「結構騒がしいけど、元氣あふれる人だな・・・中学の時もこんな感じの人がいたから振り回されないうようにしないと・・・」

??「私は花園（はなぞの）たえって言うんだ。よろしくねりみ、疾透くん」

りみ「うん、よろしくねたえちゃん」

疾透「ああ、こちらこそよろしく。たえ」

たえ「うん、よろしくねー」

疾透「（なんか落ち着いたっていうよりはマイペースな感じだな・・・振り回されることはないだろうけどちょっと気を付けよう・・・）」

??「私は若宮（わかみや）イヴといいます！今年一年、皆さんと同じクラスで嬉しいです！リミさん、ハヤトさん、よろしくお願いします！」

りみ「よろしくね、イヴちゃん。」

疾透「よろしくな、イヴ」

イヴ「はい！一緒にブシドーを極めましょう！」

疾透「綺麗な白髪で可愛い人だな。外国人と日本人のハーフなのか？元氣が会って仲良くなれそうだ」

??「はぐみは北沢（きたざわ）はぐみっていうんだよ！よろしくねはーくんとりーみん！」

りみ「リーめんって私のこと？よろしくねはぐみちゃん」

疾透「はーくんって俺のことか？よろしくなはぐみ」

はぐみ「うん！」

疾透「(香澄に似て元気がいいな。どこかのクラブ活動とかで運動とかしてそうだから今度体力づくりに付き合っしてほしいな・・・)」

??「私は山吹沙綾(やまぶきさあや)っていうんだ。よろしくねりみ、疾透くん。」

りみ「よろしくね、沙綾ちゃん」

疾透「よろしく、沙綾」

沙綾「ふふっ、仲良くしようね」

疾透「(すぐく面倒見が良さそうで仲良くなれそうだな。・・・あれ？今『山吹』って名乗った？ちよつと気になるし聞いてみるか)なあ沙綾、沙綾の苗字って『山吹』って言うってたよね？」

沙綾「うん、そうだけどそれがどうかしたの？」

疾透「いや、気のせいかもしれないけど商店街にある『やまぶきベーカリー』つてもしかして」

沙綾「ああうん、そこ私の家だよ。実家がパン屋だから大抵の昼ご飯がパンだからね・・・」

疾透「やつぱりそうだったんだ、あそのパンをいつも買っていくんだけどおいしくてつい買いすぎちやうんだよね」

沙綾「あれ、疾透くんだったんだ？毎日うちのチョコチップパン買っていつてるの」
疾透「そうだね、甘いものとパンが好きだから一緒になつてるチョコチップパンをいつも買つてるんだけど」

沙綾「いつも買つてくれてありがとね。また今度おいでよ」

疾透「最近姉さんが弁当を作つてくれるからパンを買う機会は減るかもしれないけど偶に買いに来るよ」

香澄「それよりもりりん！さつきりみりと『改めてよろしく』って言つてたけど何かあったの!？」

疾透「別に、通学路を歩いてたら偶々近くをりみが歩いてたから一緒に学園まで来ただけだよ。」

たえ「どんな事話してたの？」

りみ「ちよつと空の色が悪かったから天気のことについてとかだったかな。傘を買う時間もなさそうだったからそのまま一緒に走つてきちゃった」

沙綾「へえー、そんなことあったんだ。だから教室に入つてきたとき息切らしてたんだね」

疾透「運動部に入ってたわけじゃなかったから体力はあまりないからね。」

香澄「じゃあ何の部活に入ってたの？」

疾透「吹奏楽部だよ。といっても部員はそこまで多かつたわけじゃないし俺もキーボードくらいしか弾けなかつたし」

たえ「へー、キーボード弾けるんだ。私は一応ギターは弾けるんだけど」

沙綾「私も一応ドラムやってるよ。」

りみ「私はお姉ちゃんがギターをやつてて、この間買ってもらつたばかりだけどべー
スはできるかな・・・」

香澄「私は楽器を持ってないからみんなが羨ましいー！私も早く楽器やりたいー！」

疾透「そういつてもそうそう見つかからないんじゃないか？」

沙綾「あ、先生来たよ」

それから担任の先生がやってきて学級委員長を決めたりしてその日は下校することになった。学級委員長はなぜか俺がすることになった。他の人曰く『花咲川唯一の男子生徒だし頼りになりそう！』とか聞こえたので仕方なく引き受けた。

【花咲川学園校舎前】

疾透 「(なんか今日一日でどつと疲れたような気がするな．．．いきなり学級委員長になるし．．．ん？あそこにいるのって)．．．有咲？」

有咲 「あ？誰だ．．．って疾透かよ。担任かと思つたじゃん。私に何の用だ？」

疾透 「いや、用つてほどじゃないんだけど入学式前に同じ教室にいただろ？なんか仲良くなれそうだし挨拶しておこうと思つて。俺たちは別のクラスだけどこれから先学校で会うかもだし」

有咲 「律儀だな疾透。ところで何の部活に入るか決めたのか？」

疾透 「いや、まだ決めてないな。でもここで話すのもあれだし帰りながら話さないか？」

有咲 「別にいいけど．．．」

香澄 「もりりん、一緒に帰ろー！って隣の人誰？」

疾透 「市ヶ谷有咲(いちがやありき)っていつて入学式前に同じ教室にいてちよつと話してた人だよ」

香澄「へー、よろしくね有咲！」

有咲「いきなり馴れ馴れしすぎだろ！……まあいいや、どうせこの後暇だろ？ちよつとうちに寄っていかないか？」

疾透「有咲の家には？いいのか？」

有咲「別に他の人に見せちやいけないものなんてないしな。探し物とかあるならうちは質屋だし色んなものあるぞ」

香澄「質屋!?行きたい行きたい！」

疾透「俺も何かあったら持って帰りたいから着いていくかな」
有咲「オツケー、じゃあはぐれるなよー」

【流星堂】

有咲「着いたぞ」

疾透「ここが有咲の家……いや、家というよりは倉だろ」

香澄「渋い！」

有咲「渋くて悪いかよ！いいから入るぞ！」

有咲「なんか持っていききたいものあったか？」

疾透「お、このキーボード絶版のやつじゃん。もう日本じゃ販売されていないレアものだな。香澄は何かいいもの・・・」

香澄「もりりん！ここにギターがあったよ！」

疾透「たしかこれって：『ランダムスター』っていうギターじゃなかったか？これも外国でしか売られてないやつだろ」

有咲「うちの婆ちゃんが仕入れたんだよ。珍しいギターの形だったからって」

香澄「有咲！このギターちょうだい！」

有咲「別に譲ってやってもいいけど、香澄ギターできるのか？」

香澄「全然？」

有咲「できねーのかよ！」

香澄「これから頑張る！」

疾透「香澄は言い出したら止まらない感じだしここは譲ってやるしかないな有咲」

有咲「しょうがねーな・・・ほら、これがランダムスターの代金でこれがキーボードの代金な」

こうして俺と香澄はギターとキーボードを譲ってもらった。律儀にケースもタダで譲ってもらった

【流星堂外】

香澄「それじゃあまた明日だねもりりん、有咲！」

有咲「うっかり落としてギター壊すんじゃないぞー」

疾透「ありがとな有咲、いい掘り出し物が見つかったよ」

有咲「背中が痒くなるからお前らはさっさと帰れー！」
そう有咲に怒鳴られて俺たちは流星堂で別れた

【流星堂からの帰り道】

疾透「いつぶりだろうな、こうしてキーボードに触れるのは。たしか・・・去年の6月以降触ってなかったな・・・あれ？りみ？」

りみ「あれ、疾透くん？確か早く学校から出たはずだよ？どうしてこんなところにいるの？」

疾透「ちよつと有咲のところで掘り出し物を漁ってな。これから帰るところだ」
りみ「有咲ちゃんのところ？何か譲ってもらったの？」

疾透「ちよつと外国製の高いキーボードだな。久しぶりに家で弾きたくなつたから譲ってもらった」

りみ「そうなんだ。今度聞いてみたいなあ…」

疾透「別にそんな特段上手いわけじゃないけどな。つと、俺はここからこっち方向だな」

りみ「私はこつちだから今日はここまでだね。また明日学校でだね」

疾透「ああ、またなりみ」

そうして俺たちは分かれ道でそれぞれの帰路についた・・・

【午後8時：森睦家リビング】

水夏「そういうえば疾透、学校はどうだった？今日そっちも入学式だったんでしょ？」

疾透「花咲川は結構個性的な人が多かったけどすぐ仲良くなれたよ。入学式に行く途中にりみっていう女の子とであってすぐ仲良くなつたし」

水夏「ふーん、思ったより普通に学校生活送れそうじゃん。ちよつと心配してたけど」

【オリキヤラ紹介：森睦水夏（もりちかすいか）。疾透の2つ上の姉で羽丘学園に通って

いる。料理や裁縫がうまく、お弁当や小物などをよく作ってもらっている。羽丘では家庭科部に入っており後輩たちからも評判がいい」

疾透「姉さんの方はどうだったの？」

水夏「新入生の中には私たちがこっちに來てからよく遊んだ子がいたよ」

疾透「そっか、今度挨拶しに行った方がいいかもな」

水夏「そうしてくれた方があの子たちも安心するだろうから今度の休みに私の方から連絡を入れてあげるから挨拶に行つてあげて」

疾透「わかっている。それじゃあ姉さん、俺はもう寝るから」

水夏「ところで疾透。明日からは私も途中まで一緒に通えるけどどうするの？」

疾透「普通に一人で通うよ。お休み、姉さん」

水夏「お休み、疾透」

1話：再開と再会

5月1日

花咲川での入学式から1週間が経ったある日の休日、俺は朝6時に珍しく早く起きていた。特に何もやることがないので自分の部屋で先日有咲から譲ってもらったキーボードを弄っていた。長い間倉に入れられていたにもかかわらず、有咲がメンテナンステナントしてたのか音色は安定していた。長い間キーボードを触っていなかったのでブランクは多少あるがそれでも昔演奏していた曲は半分くらい弾けていた。そんな時・・・

【午前10時：森睦家リビング】

水夏「ねえ疾透、今日暇？」

疾透「別に何もやることないけど」

水夏「それなら今日、この間言っていた羽丘の新生たちに挨拶して来たら？ 今日も羽沢珈琲店にいるってさつき連絡貰ったんだけど」

疾透「それなら行ってくるか。1年ぶりだけか・・・元気にしてるかな」

水夏「それなら早くご飯食べて行つてらっしゃい。私は受験勉強で忙しいけど連絡くらはいは回してあげるから」

疾透「姉さん、厄介払いしてないか？」

水夏「そんなことないわよ。ほら早く行つてらっしゃい」

疾透「はいはい、それじゃあ行つてきますよ」と

【午前10時30分：羽沢珈琲店】

（カランカラン）

イヴ「らっしやっせー！何を握りやしようか！」

疾透「・・・イヴ？こんなところで何やってるんだ？」

イヴ「ハヤトさん！私はここでバイトをしているんです！」

疾透「一つ質問いいか？」

イヴ「はい、何でしょうか？」

疾透「ここって珈琲店だよな？」

イヴ「そうですよ？」

疾透「それなのにお客さんへの第一声が『らっしやっせー！何を握りやしようか！』なのか疑問でしかないんだが・・・そこまで日本が好きなのか？」

イヴ「はい！私は日本が大好きです！ところで何か頼みますか？」

疾透「悪いけど今日は客としてじゃなくて人に会いに来たんだ。とりあえずつぐみを呼んでくれないか？」

イヴ「わかりました！ツグミさん！」

つぐみ「イヴちゃん？あ、疾透くん！」

疾透「1年ぶりだなつぐみ。みんなはもう来てるのか？」

つぐみ「うん、みんな私の部屋で待ってるよ。」

疾透「さすが姉さん、人使いが荒い」

【つぐみの部屋】

つぐみ「みんな、おまたせ！」

疾透「1年ぶりだな。蘭、モカ、ひまり、巴。」

蘭「うん、久しぶり疾透。元気にしてた？」

モカ「はやくんおひさー。」

ひまり「久しぶりー！羽丘の高等部に入らなかったって聞いた時は寂しかったよー
！」

巴「久しぶりだな疾透！少しだけ髪を伸ばしたか？」

疾透「ああ、少しイメチェンって感じで気にならない程度に伸ばしてみたんだ。制服も変わるし心機一転してみようかなって」

蘭「いいじゃん、そういうの。」

疾透「蘭だって1年前に遊んでた時は今みたいに赤メツシユ入れてなかったよな？」

蘭「まあ・・・ね。色々あつたからさ」

ひまり「そうそう聞いて疾透！私たち、バンド組んだの！」

疾透「バンド？それまたなんで」

モカ「えつとー、去年に蘭だけ別々のクラスになっちゃって蘭が不登校気味になっちゃってー」

つぐみ「それで『みんなと一緒にいたい！』って言ったら『バンドやろう！』って感じになって、そのままみんなでバンド組んだんだ。」

蘭「あの時はごめん、みんなに迷惑かけたし・・・」

巴「いいって蘭！こうしてまたみんなが集まれるんだしな！」

疾透「ふーん、バンドなあ・・・」

蘭「そういえば疾透、ずいぶんと大きい荷物だけど何持ってるの？」

疾透「ああこれ？キーボードだよ。クラスメイトじゃないけど、ちよつと知り合つた人の家に入って譲ってもらつたんだよ。」

ひまり「キーボード!? 見たいみたい!」

疾透「あんまり乱暴にするなよ、結構レア物だからな」

つぐみ「えつと・・・あつ、これ外国製の高いキーボードだよ! いいなあ…」

疾透「まあ、去年一度引退したんだけど久しぶりにキーボードを弄りたくなくなってな。漁ってみたらかれが見つかつたから譲ってもらつたんだよ。まだブランクはあるけど

一応まだいけるな」

蘭「ならば、一回疾透の演奏聞いてみたいんだけど」

疾透「ソロでつてことか? なら楽譜とかあるか? うっかり机の上に置き忘れてきてしまったんだ」

つぐみ「ならばいいこれ。私たちが作った曲のキーボードのパートなんだけど」

疾透「いいのか? 蘭たちが作った曲を弾いても」

蘭「聞きたいのはあたし達の方なんだし大丈夫だよ」

疾透「そうか? じゃあ遠慮なく・・・」

—————♪

【数分後】

疾透「ふう：…こんなものかな。見慣れない譜面だしブランクがあるからちよつとミスったけど」

つぐみ「それでも十分うまいよ！とてもブランクがあるなんて思えないよ！」

モカ「おー。つぐみはやくんの演奏をひまつてるー」

疾透「ひまつてるって何だ」

巴「多分、『褒めてる』ってことなんじゃないか？」

疾透「それならそう言ってくればいいのに。モカの作った言葉（別名モカ語録）はわかりづらいからな。」

蘭「あたし達はわかるんだけど疾透は知らないからね。モカ、疾透がいるときはできるだけ疾透に分かるように言っておいて」

モカ「善処します」

疾透「さて、久しぶりに色々話したな・・・これからどうするか」

ひまり「疾透はバンド組んだりしないの？」

疾透「俺がバンドを組む？今は考えてないな・・・というか誘うとしても花咲川のメンバーがいいだろうけど、俺以外に男子生徒がいらないからバンドのサポーターになってもいいだろうな」

つぐみ「そっか・・・なら、私たちのバンドのサポーターにならない？」

疾透「蘭たちのバンドのサポーターに？嬉しい話だけど今は辞退させてもらおうよ」

ひまり「なんで!？」

疾透「まだ花咲川に入ってまもないし、まだ他のバンドの人だっているかもしれないしな。その辺をじっくり見てから考えたいんだ」

蘭「それもそうか。なんかごめん」

疾透「謝ることなんかないよ。俺だつて蘭たちに久しぶりに会ってバンドをやつてるって知ることができたし。さて、と。俺はそろそろ行こうかな」

モカ「えー？もう行っちゃうのー？」

疾透「ちよつとクラスメイトの家に行くんだよ。といつてもまだ家の場所を知らないから待ち合わせすることになつてるけど」

巴「それじゃあまたな！久しぶりに話せて楽しかったぜ！」

疾透「またな、みんな。」

こうして俺はつぐみの家を後にした

【午後3時：コンビニ前】

りみ「あ、疾透くん！」

疾透「ごめんりみ。ちよっと1年ぶりに会った人たちと話してたら遅くなっちゃって」

りみ「ううん、大丈夫だよ。それよりも私の家でよかったの？」

疾透「今うちでは姉さんが試験勉強に集中してるからやめておいた方がいいかなって。姉さんは羽丘であそこは進学校だから早めに勉強する人が多いって聞いたし」

りみ「そうなんだ？今うちにはお姉ちゃんがいるんだけど大丈夫？」

疾透「別に大丈夫だよ」

りみ「それじゃあ行こう？」

【牛込家玄関】

りみ「ただいま、お姉ちゃん」

ゆり「おかえりーりみ。その人が入学式に会ったっていう？」

疾透「初めまして、俺は森睦疾透つていいいます。入学式の時はりみと偶々であつて学校まで一緒に行きました。あと、りみとは同じクラスです」

ゆり「よろしくね、疾透くん。私は牛込ゆり、花咲川学園の3年生だよ」

疾透「え、先輩だったんですか!?それも2つ上でうちの姉さんと同じ年ですか……」

っしか違わないって思ってたよ」

ゆり「よく言われるよ……入学式の時はりみのことありがとうね。」

りみ「お姉ちゃんもバンドに入ってるんだ。『Glitter*Green』ってバンドでギターボーカルなんだよ。」

疾透「へえ、ゆり先輩もギターボーカルなんですわね。さつき会ってきた友達の一人がバンドのギターボーカルやってるって言ってましたし」

ゆり「疾透くんはバンドに入ってたんじゃないの？」

疾透「いえ、バンドはやってないですね。ただキーボードは弾けますよ。ただブランクはありませんけど」

ゆり「なるほどね」

疾透「ただまあ部活で弾いたので久しぶりに弾きたくなっただけですよ」

りみ「もしかして、今持ってきてるそれってキーボード？」

疾透「そうだな。部屋に置いてても姉さんに弄られるだろうから持ち歩くことにしたんだ」

ゆり「部屋に楽譜あるけど何か弾いてみる？」

疾透「え、いいんですか？」

ゆり「一度疾透くんの音を聞いてみたいんだよね。Glitter*Greenにも

キーボードの子はいるんだけど偶には違う人の音を聞きたいかなって」

疾透「それならぜひ弾いてみたいですね」

ゆり「それならはい、これ。」

疾透「ありがとうございます。ちよつと待ってください、少し楽譜を見ますから……
ふむふむ、結構難しそうですね……ちよつと一度通してみますね」

疾透通し演奏中……

疾透「やつぱり結構難しいですね……譜面から色んな感じが読み取れますし……次
は本番やってみます」

疾透本番演奏中……

りみ「す、すごいよ！初めて見る譜面なのにここまで演奏できるなんて……！」

ゆり「すごいわね、疾透くん。いつか私たちにどうしたらここまでうまくなるのかア

ドバイスが欲しくなっちゃうわ」

疾透「俺はただ部活でピアノを弾いていただけですよ。ただ放課後も音楽室にこもりましてピアノを弾くこともありましたし、人一倍練習していたことも上手くなった理由ですかね」

ゆり「何事も努力と練習かあ・・・そうだよね」

りみ「お姉ちゃん、この後ベースの練習に付き合ってもらってもいいかな？ まだまだ私は半人前だから上手くなりたいたいから・・・」

疾透「姉妹で今から練習なら俺は帰るか」

ゆり「あ、疾透くんはいて大丈夫だよ。今度は私たちの音を聞いてほしいかな。」

疾透「んー、それならもう少しいることにします。他の楽器の音がどんなのか知りたいですし」

それから俺はりみとゆり先輩が奏でるベースとギターの音を聞いた。聞いてるうちに少しずつ眠気が来たみたいで、いつの間にか座っていたソファで寝ていたらしい・・・

疾透「ん．．．あれ？」

りみ「あ、やっと起きた。私たちが演奏してる間に寝ちやつてたんだよ？」

疾透「あー．．．悪い、音がよかったからそのまま寝てた．．．子供の時からずっと治つてない癬みたいなのだからな．．．」

りみ「気持ちわかるけど、できることなら寝ずに聞いてほしかったかな．．．」

疾透「本当にごめん。ところで今の状況を簡潔に4文字で頼む」

りみ「膝枕だよ」

疾透「．．．ごめん、なんて？」

りみ「ひ、膝枕だよ．．．ソファで気持ちよく寝ていたんだけど、頭が下向いてたから首が痛くなるかもって思つて．．．」

疾透「．．．どおりで途中からソファの綿のような触り心地から温かい感触だったわけか．．．今何時だ？」

りみ「よ、夜の7時だよ・・・」

疾透「7時!? すぐ家に帰らないと…それじゃあまた学校で!」

りみ「う、うん。また学校でね!」

そうして俺は足早にりみの家を出て家まで全速力で帰った

疾透 out

りみ & amp; ゆり side

ゆり「りみ、夜ご飯できたよ・・・って疾透くん、もう帰っちゃった?」

りみ「うん、早く帰らないと明日学校だからって…」

ゆり「残念、疾透くんともっとお話ししたかったんだけどなあ・・・疾透くんが食べ
ていくかもって3人分作っちゃった」

りみ「それ、明日の弁当のおかずじゃダメかな？たぶん私たちが食べきれないだろうし……」

ゆり「そうしようか。ところでりみ、疾透くんのことどう思う？」

りみ「どうって……友達だよ？私のこと助けてくれるし、よく話しかけてくれるから」

ゆり「なるほどね。」

りみ「お姉ちゃん？」

ゆり「ううん、何でもないよ。早く済ませちゃおつか」

りみ「(お姉ちゃん……何が言いたいんだろう?)」

りみ& amp ; ゆり out

疾透「ただいま、姉さん」

水夏「おかえり疾透。帰りが遅かったみたいだけど」

疾透「蘭たちと話した後、クラスメイトのところに遊びに行つてたんだ。久しぶりにキーボード演奏したりしたよ。そのクラスメイトはベースを演奏できるんだけど、気が付いたら寝ててさつき家を急いで出て走つてきたんだよ」

水夏「疾透にも楽器演奏仲間が増えたんだ。私はあまり楽器は演奏しないしちよつとうらやましいかも」

疾透「姉さんには家庭科部に仲いい人いるじゃん」

水夏「私の場合は知ってる人ばかりだから羨ましくなるの！なんか先を越された気分・・・」

疾透「姉さんの愚痴はもう聞きなれたから俺はもう寝るよ。お休み」

水夏「話はまだおわttt・・・もう行つちやつたか。さーと私も寝ろうつと」

2話：その小さな背中を押しして

6月7日

蘭たちAfterglowのメンバーと1年ぶりに会って一か月経った。あれから俺やりみは楽器の練習に励み、偶にりみの家にお邪魔して音も合わせたりした。その時はゆり先輩に立ち会ってもらって音がどれだけあつてるかも聞いてもらつてたりした。ただ音を奏でるだけで楽譜などはないため合わせることしかできなかつたのは言うまでもない……

そして今日は休日だが登校日となっている。休日ということもあり授業は午前中だけとなっている

【午前9時：花咲川学園1-A教室】

疾透「とりあえず1時限目が終わったか。休日だけあつて授業の内容も割と緩かったし」

りみ「そうだね、学校が終わったら昼からベースを練習しないと・・・疾透くんも一緒にどう？」

疾透「あー、悪い。今日はちょっと図書室によつて本借りろうかなって思ってるんだ。」

香澄「なにになに!?りみりんともりりん、一緒に演奏してたの!?ずるい!私も混ぜて!」
疾透「香澄、今のやり取り聞いてなかったのか?俺は今日図書室に寄るからりみとは一緒に帰らないぞ」

たえ「じゃあ私はりみについていこつかな」

疾透「どうして今の流れでそうなるんだ」

りみ「私は別に大丈夫だよ?」

疾透「それならいいんだが・・・迷惑かけるなよ?」

香澄「大丈夫！ちよつと音を合わせるだけだから！」

イヴ「みなさん、そろそろ2時限目が始まりませよ！」

はぐみ「早く席について先生まとー！」

こうして2時限目が始まり、適当にノートを取ったりしてその日の授業は終わつた……

疾透「それじゃありみ、俺は図書室に行くからここまでだな」

りみ「うん、またね疾透くん。時間があつたら一緒に音合わせようね」

疾透「そのことなんだが、あと1人援軍を呼んでるから校門で待つてくれ。」

りみ「1人？うん、わかったよ。香澄ちゃんとたえちちゃん、沙綾ちゃんたちと校門前で待てばいいんだよね？」

疾透「そうなるな」

香澄「それじゃあもりりん、また学校でね！」

疾透「気をつけて帰れよ」

こうして俺たちは一度学校で別れた……

疾透「さて：図書室に行くか。この時間ならあまり人はいなさそうだし気楽に探せるだろ」

【花咲川学園図書室】

疾透「えつと・・・お目当ての本はどこにあるか・・・とよしつにくるのははじめだからどこに何があるのか知らないんだよな・・・」

??「あの・・・何かお探ですか・・・?」

声か聞こえたので聞こえた方に振り向いてみたら黒髪先輩が椅子に座っていた

疾透「えつと、ちよつと本を借りたくて来たんですけど図書室には始めてくるのでどこにあるのかわからないんです」

??「本を・・・ですか・・・?あ、私は白金燐子（しろかねりんこ）っていいます・・・」

疾透「俺は森睦疾透っていいいます。それで燐子先輩、譜面の作り方の本ってどこにありますか?」

燐子「譜面……ですか？何の楽器……なんですか？」

疾透「キーボードですね。この間友達からキーボードを譲ってもらったので、折角ですし何か譜面を作ってみたくて」

燐子「でも今私は忙しいので……少し待っていただけませんか？」

疾透「すみません、忙しい中……」

燐子「いえ……大丈夫です……」

燐子先輩は携帯を取り出し、連絡を取った。しばらく経つと……

??「どうしましたか白金さん？私を呼ぶなんて珍しいですね」

燐子「えつと……疾透くんが譜面の作り方の本を探してるって言うって……私は今作業をして忙しいので呼びました……」

??「わかりました。その疾透くんというのはどちらに？」

疾透「隣にいます……あれ？」

??「あら、あなたは……」

燐子「お二人とも……お知り合いですか？」

疾透「はい、入学式の時に少しだけですけど」

??「あの時以来顔を合わせたことがありませんでしたね。私は氷川紗夜（ひかわさよ）です。風紀委員をやっています」

疾透「俺は森睦疾透っていいます。今日はよろしくお願いします紗夜先輩」

紗夜「ところで、キーボードの譜面の作り方の本でしたね。では私に着いてきてください」

疾透「ありがとうございます紗夜先輩」

【図書室本棚前】

紗夜「こちらが譜面の作り方の本です。ちようど一冊だけ借りられていなかったのよかったですね。それにしても疾透くん、あなたはキーボードが弾けるんですか？」

疾透「昔の名残ですよ。今はブランドもなくなって普通に弾けますし」

紗夜「それなら、このあと少しだけ付き合っていただけませんか？」

疾透「別にいいですけど、どこかに行くんですか？」

紗夜「ええ、私たちは今バンドメンバーを募集しているんです。あとドラムとキーボードだけなんですけど……未だに集まらないままなんです。」

疾透「だから、キーボードが弾ける俺の音を聞いてメンバーに誘いたい、と？」

紗夜「その通りです。もちろんあなたがよければ、ですが」

疾透「さつきも言いましたけど別に何もすることがないですからそれくらい付き合いますよ」

紗夜「すみません。それでは行きましようか」

【図書室：入り口】

燐子「疾透くんと氷川さん・・・もうお帰りですか？」

疾透「はい、紗夜先輩に少し付き合っただけとほしくところがあるって言われたのでこれから行くところです。燐子先輩もどうですか？」

燐子「いいんですか・・・？」

紗夜「ええ、疾透くんの演奏するキーボードを聴くだけです」

燐子「それなら・・・私もついていきます・・・」

疾透「というわけなので紗夜先輩、案内をお願いします」

紗夜「わかりました。ではついてきてください」
そう言つて紗夜先輩と燐子先輩と俺は花咲川を後にした・・・

【ライブハウス兼カフェ『Ruby&Sapphire』】

【オリジナル設定：『Ruby&Sapphire』通称ルビサファ。春や秋が基本的なライブハウスとしての営業期間で学生から大人まで幅広く利用している。俺もたまにキーボードの練習の際に利用してる】

紗夜「湊さん、今井さん、連れてきました。」

友希那「ありがとう、紗夜。」

リサ「紗夜、ありがとうね☆とところで二人の名前って？」

疾透「森睦疾透です。花咲川に今年入学して入学式の際に紗夜先輩に少しだけですが

お世話になりました」

燐子「白金燐子：…です。氷川さんとは同じ学年で学校では図書委員をします…」

友希那「私は湊友希那（みなとゆきな）、羽丘学園の2年生よ。」

リサ「もう友希那、もう少しリラックスできないの？ごめんね、疾透さんと燐子。アタシは今井（いまい）リサ。まだバンドメンバーはそろってないけど一応ベース担当なんだー」

紗夜「少し言い忘れていました、私はギター担当です。」

友希那「ところで、二人はドラムとキーボード、どっちを演奏できるのかしら？」

疾透「俺はキーボードですね、この間キーボードを譲ってもらって今は練習中の身とிட்டたところですが」

燐子「私は…家にピアノがあるのでキーボードなら…」

リサ「へえー、二人ともキーボードなんだ。ちよつと珍しいかも」

疾透「それで、俺たち一人一人の演奏を聴いてバンドに誘う、という感じですね？紗夜先輩から聞いた話だと」

友希那「なら早いわ。もうスタジオ予約は取ってあるから入りましょう」

〔Ruby & Sapphire スタジオ〕

友希那「さて、二人ともキーボードはあるのかしら？」

燐子「私は家でピアノを弾くだけなので・・・キーボードはありません・・・」

疾透「俺は一応持ってきてますので燐子先輩はこれで演奏して大丈夫ですよ。」

リサ「どれどれ？あ、これって外国製じゃん！しかも当時一番人気だったモデルの！」

紗夜「そうなんですか？私はよく知らないのですが」

疾透「これは有咲のところの蔵で見つけて譲ってもらったんですよ。ところで燐子先

輩、順番はどうしましょうか？」

燐子「疾透くんからで・・・いいですよ」

疾透「それじゃあ先にやりますね。譜面とがあります？」

友希那「いえ、まだ私たちはバンドを組んでるわけじゃないから曲はないのよ。だか

ら二人が演奏できそうな譜面を演奏してもらおう形になるわね。」

燐子「私たちが演奏できそうなもの……ですか？疾透くん、何かできそうなのはありますか？」

疾透「うーん……あ、これなんてどうですか？」

燐子「これならなんとか行けそう……です……」

紗夜「曲は決まりましたか？」

疾透「はい、それでは俺から行きますね」

—————♪

友希那「いい音といいリズムね」

リサ「だねー、アタシも聞き惚れちゃったよ」

紗夜「ええ、何度も練習してきた賜物ですね。次は白金さんですが……」

疾透「？どうかしましたか燐子先輩」

燐子「こんなにいい音聞くと……自信なくなっちゃいます……」

疾透「大丈夫ですよ燐子先輩、自分の音を信じてください。俺もこれまでに何度も演奏してきましたけど、他の人の演奏を聴くたびに自分の音が『小さい音だな』って思ったことはありません。俺が経験してきたことに比べたら俺が今奏でた音なんてちつぽけなものですよ」

燐子「でも……」

疾透 「いいから、自分を信じてここにいる人たちに音を届けてあげてください。3人とも、燐子先輩の音を待ってるんです」

燐子 「わかり……ました……」

—————♪

友希那 「これが燐子の奏でる音……」

リサ 「へえ……いいじゃん」

紗夜 「ええ、まさか白金さんがこんな音楽を奏でることができたなんて」

疾透 「いい演奏でした、燐子先輩。」

燐子 「疾透くんの……おかげです。私は自分に自信がなかったので……疾透くん側あ

たしの背中を押してくれたから……」

疾透 「これなら心配いらなさそうですね。それじゃ……」

友希那 「疾透？何処に行こうというのかしら。まだどっちを誘うか決めきれないのよ？」

疾透 「それはわかっています。」

紗夜 「ならなんでここを出て行こうとしているのですか？」

疾透 「燐子先輩にふさわしい居場所が見つかった、そんな気がするんです。俺はここに
いる人達に音を届けただけにすぎませんから。それに比べて燐子先輩の奏でた音は

俺とは違ってライブハウスに来ているみんなに音を届けたんです。その証拠にほら、部屋の外を見てください」

そう言つて俺が部屋の外を指さすと……そこにはライブハウスに練習しに来ていた人達が燐子先輩の奏でていた音を聞いていたようで、たくさんの人が集まっていた

疾透「燐子先輩、このお客さんたちを見てもそんな顔ができますか？」

そう、俺が言うまでは燐子先輩の顔は少しうつむいていた。多分、自分の音じゃバンドメンバーにふさわしくない……そう思っているような表情だった。

疾透「大丈夫です、燐子先輩なら。」

燐子「疾透くん……」

疾透「俺なら大丈夫です。友希那さん、リサさん、紗夜先輩。俺の演奏を聴いてくれてありがとうございます」

友希那「あなたとならもつといい音が奏でられると思つていたのに……残念ね。」

疾透「すみません、俺の独断で決めてしまつて。」

リサ「いいつて、疾透くんが気にすることじゃないよ。」

紗夜「そうですね。私も湊さんに誘われたときはぎこちない感じだったので」

疾透「本当にすみません。それと、今日借りた本ですが読み終わつたので返しますね。」

俺はこれで失礼します」

そうやって俺は燐子先輩に今日図書室で借りた本を返してスタジオを後にした
疾透out

友希那、リサ、紗夜、燐子side

友希那「・・・彼の音はいいものだったわ。それなのに自分から辞退するなんて・・・」

リサ「だね・・・アタシももつと聞きたかったんだけど」

紗夜「それよりも、私たちは言うことがありませんか？」

友希那「ええ、そうね紗夜。燐子」

燐子「友希那さん・・・？」

友希那「ようこそ、私たちのバンドへ」

友希那、リサ、紗夜、燐子out

疾透side

【Ruby& Sapphireから疾透の家への帰り道】

疾透「……情けないな、俺。自分でもわかっているはずなのに。」

りみ「……疾透くん？」

疾透「っ!?!りみ……か。どうしたんだ」

りみ「さつき、香澄ちゃんたちが帰って私は夕食の買い出しの帰りなんだ。それより

も……『なんで泣いてるの?』」

そう、さつき燐子先輩が奏でた音に感動して俺は泣いていたんだ。こんな顔を燐子先輩たちに見せたくないという情けない理由でライブハウスを出てきていたんだから

疾透「・・・ちよつとな。悪いけど急いでるから今度また話そうな」
りみ「え？疾透くん？・・・行つちやつた。渡したいものと伝えたいことがあったの
に・・・」

【午後8時：森睦家】

水夏「あれ、疾透もう帰ってきてたんだ。・・・つてどうしたの？」

疾透「何でもない。お休み姉さん」

水夏「待つて・・・つてもう行つちやつたか。疾透に言うことあったんだけど」

で・・・
そうして俺は早めに布団に入って寝た。自分が情けなく思ったことを心に刻み込ん

3話：高い壁を乗り越えて

あの時疾透くんが泣いたような表情をしてから2週間が経ちました。実はあの日、私たちは有咲ちゃんの蔵で練習をしてバンド、『Poppin' Party』を組みました。バンドの名前は有咲ちゃんが付けてくれて、みんな嬉しそうでした。でも、あれから疾透くんは学校に来なくなってしまうていました。．．．それどころか、休日でも疾透くんと会うことはありませんでした。私にはなにかあったのかはわかりません。他の同じ学年の友達に聞いてもみんな首を横に振りました。あんなに元氣そうな疾透くんが学校に来なくなつたなんてよほどの理由があったのかもしれません。．．．今日にでも疾透くんの家を訪ねてみようと思いますけど、いざ行くとなると勇気がなくて前に踏み

出せません・・・

6月26日

【午後12時：花咲川学園1-A】

りみ「はあ・・・」

たえ「りみ、大丈夫？疾透くんが来なくなつてからずーっと上の空だけど」

りみ「お、おたえちゃん？私は大丈夫だよ？」

はぐみ「困つたことがあつたらはぐみたちに相談してよ！はぐみたちはクラスメイトでしょ？」

りみ「じ、実は・・・」

りみ説明中・・・

はぐみ「なるほどー、はーくんは何があつたのかわからないけど力になつてあげたいんだー？」

りみ「うん・・・今日は行こう、つて思つてもいざ行動するとなると勇気が出なくつて・・・」

イヴ「たしかにハヤトさんは学校に来なくなるまでずっとキーボードを放課後に練習
していて楽しそうでしたね。ハヤトさん、一体何があつたんでしょうか・・・」

(ガラガラ・・・)

燐子「すみません・・・牛込さん、いませんか？」

りみ「燐子先輩？どうかしたんですか？」

燐子「少しお話が・・・したくて・・・大丈夫ですか？」

りみ「私は大丈夫ですけど・・・」

香澄「いいよりみりん！私たちのことは気にしないで！」

りみ「ごめんね、香澄ちゃん・・・」

燐子「ここで話すのもあれなので・・・屋上に行きませんか・・・？」

【花咲川学園屋上】

りみ「それで、お話って何ですか？」

燐子「えつと……疾透くん、最近学校に来ていないんですよね……？」

りみ「はい……2週間も前から来ていないんです。私には何があったのかわからなくて……」

燐子「それは多分……私のせいだと思います……」

りみ「燐子先輩の？ どういうことですか？」

燐子「実は今日から2週間前、私はRoseliaのメンバーに入りました。その過程で、疾透くんは私の背中を押してくれました。その日は疾透くんと氷川さんと私の3人でライブハウスに行きました……そこで、キーボードと扱う私と疾透くんがRoseliaにはいれるかどうかのテストをして……疾透くんが先に演奏して、私が後に演奏することになったんです。でも私は疾透くんの演奏がうまくて『私なんかじゃみんなの足を引つ張つちやうかも』って思ったんです。でもそんな時疾透くんは『自分を信じてここにいる人たちに音を届けてあげてください』って言うてくれて……私は演奏しました。演奏が終わってから私はRoseliaに入りました……でも」

りみ「でも……なんですか？」

燐子「疾透くん……自分からRoseliaに入ることを断ったんです……それ

で、私の演奏が終わった後ライブハウスを出て・・・それからのことはよくわからないんです・・・」

りみ「そんなことが・・・でも燐子先輩は悪くないですよ！それに私、あの後疾透くんと会ったんです。でも何も言ってくれなくて・・・私には何もできなかったんです・・・私はただ疾透くんの背中を私の視界から見えなくなるまで見ていただけだったの
で・・・」

燐子「こんなことを牛込さんに頼むのは違うかと思えますけど・・・疾透くんのこと、支えてあげてくれませんか・・・？」

りみ「が、頑張ります！」

燐子「長々とすみません・・・お話に付き合ってくれてありがとうございます・・・」
そう言つて私と燐子は屋上を後にしました・・・

【放課後：1ーA】

りみ「（これからどうしよう…今日は疾透くんの家に行つた方がいいよね…?）」

有咲「おーいりみ？何やってるんだ？練習に行くぞー」

りみ「ご、ごめんね有咲ちゃん。今日は私練習をお休みするよ…」

有咲「りみにしては珍しいな？深くは聞かねーけど明日は顔出せよー?」

りみ「ごめんね有咲ちゃん…それじゃあ私はここで…」

有咲「おう、気をつけて帰れよー」

【花咲川学園校門前】

りみ「き、今日は疾透くんの家に行つてみよう…家の場所も知ってるし多分いるはず…うん、行こう！」

こうして私は疾透くんの家に向かって歩いて行きました…

【森睦家前】

りみ「(ここ)まで来たのはいいけど、一人で入るのは緊張するよ……!この間は疾透くんが一緒にいてくれたからだけど……」

水夏「あれ、りみちゃん?どうしたのこんなところで」

りみ「す、水夏さん!?実は……」

りみ説明中……

水夏「はあ……疾透がごめんね。私にも口を利かないから困ってたんだよ……」

りみ「それであの……疾透くんにお会いできませんか?」

水夏「(この子なら多分疾透の心の鍵を開けてくれそうだし……やれるだけのことはやってみよう) やつてもらっちゃう形になるけど、今はそれしかないか……」 うん、とりあえず中に入ろうか。」

りみ「すみません、お邪魔します・・・」

【森睦家：リビング】

水夏「花咲川からここまで長かったでしょ？喉乾いてるだろうからお茶でもどう？」

りみ「すみません、いただいてもいいですか？」

水夏「別に気にしないでいいよ。私の世話焼きな性格だからさ」

りみ「それで水夏さん、疾透くんはどういう状況なんですか・・・？」

水夏「疾透、ずっと部屋に籠ってるのよ。ロクにご飯も食べないですつと一人で部屋に籠ってるし・・・『鍵を開けて』って何回も頼んでるけど開けてくれないのよ」

りみ「そうですか・・・」

水夏「ごめんね、こつちの事情をペラペラとしゃべっちゃつて。疾透のことお願いできてる？」

りみ「私じゃ力になれないかもしれないかもしれませんが・・・が、頑張ります！」

水夏「こつちこそごめんね、疾透が迷惑をかけてるのに。こつちにはちよつと取りに来るものがあつたから来ただけで、すぐに行かなきゃならないから後のことはお願い」

りみ「わ、わかりました！」

そう言つて水夏さんは自分の家を後にしました

りみ「は、疾透くん・・・？りみだよ、部屋の鍵、開けてくれないかな・・・？このままじゃ話すことすらできなくて私悲しいよ・・・お願い、鍵を開けて・・・」

疾透「（りみ・・・どうしてきたんだ。それに俺のことは誰にも話してないはず・・・いや、知る人はいたな。燐子先輩、あの時のこと話したんですね・・・）どうして」

りみ「疾透くん・・・？」

扉越しに疾透くんの声が聞こえた。2週間ぶりに聞いたクラスメイトの声

疾透「どうしてここに来たんだ、りみ。」

りみ「どうしてって・・・疾透くんのことが心配で来たんだよ！燐子先輩に聞いたんだ、疾透くんがどうしてこうなってしまったのか・・・それを聞いたらいてもたつてもいられなくなつたんだよ！」

疾透「・・・俺は大丈夫だ、帰ってくれ」

りみ「嫌だよ！疾透くんは入学式の時に一人で学校に行っていた私に話しかけてくれた優しい人だもん！」

疾透「・・・どうしてそこまで俺に関わろうとするんだ。俺はただりみにきつかけを与えただけに過ぎない存在だ。」

りみ「疾透くん、どうしてそこまで自分を深く追い込むの？燐子先輩の奏でた音に嫉妬したから？」

疾透「・・・鍵を開ける、部屋に入ってくるなり好きにしてくれ」

そう言つて疾透くんは部屋の鍵を開けてくれた。私はすぐ疾透くんの部屋に入つた・・・

【疾透の部屋】

疾透「・・・どこまで話したか」

りみ「燐子先輩の奏でた音に嫉妬したんじゃないかって・・・」

疾透「嫉妬・・・か、今の俺にとつてはその2文字がふさわしいだろうな。そうだな、これは嫉妬なんだろうな・・・ずっと誰かの背中を押していた。けど、みんな俺を追い

越して次のステージに進んでいた。それが心残りだった。だから隣子先輩の音を聞いた時俺はライブハウスを飛び出して逃げたんだ。情けないよな・・・」

りみ「情けなくなんかないよ！みんな、疾透くんが背中を押してくれたから新しい一歩を踏み出せたんだよ！私だってそう、疾透くんが背中を押してくれたからみんなと話せるようになったし・・・」

疾透「・・・そうか、こんな俺でも・・・助けになれ・・・て・・・」

りみ「疾透くん!?!・・・寝ちゃったんだ。水夏さんの話だとともに寝てなかったみたいだったし、その疲れが出ちゃったのかな。・・・お姉ちゃんに連絡入れないと」

《GYNE》

【プチ設定：GYNE（ガイン）。この小説内における携帯での連絡手段。現実でいうLINE。】

ゆり「どうしたのりみ？わざわざGYNEで連絡入れるなんて珍しいね」

りみ「ごめんね、お姉ちゃん。今日は疾透くんの家に泊まろうかなって・・・疾透くん、立ち直ったみたいだけど体調がよくないみたいだから今日だけでも隣にいてあげようかなって・・・」

ゆり「りみがいいなら大丈夫だよ。疾透くんの側にいてあげて」

りみ「ありがとう、お姉ちゃん。また明日」

《GYNE終了》

疾透「(う・・・確か俺はずっと部屋に籠ってて・・・それで今日りみが来て・・・話をしたらそのまま気を失ってたんだったな・・・)」

りみ「あ、おはよう疾透くん。」

疾透「……りみか。今何時だ？」

りみ「もう夜の9時だよ。あの後、疾透くんが寝ちゃってから結構時間が経ったんだ」
疾透「……そうか。そんなに寝てたのか。ところでりみ」

りみ「何かな？」

疾透「何でパジャマ姿なんだ？」

りみ「えっと、今日は疾透くんの家に泊まることにしたんだ。お姉ちゃんにも連絡は入れているし、水夏さんもいいって。」

疾透「姉さんとゆり先輩……結構仲いいんだな」

りみ「友達の家に泊まるのは初めてだけど、あまり緊張はしないかな。」

疾透「そうなのか？りみって結構緊張するタイプだっと思ってたのに」

りみ「そ、それは……疾透くんの家で止まるんだから緊張なんてどこかに行っちゃったからなんて言えない……」

疾透「？どうしたんだりみ」

りみ「な、なんでもあらへんよ！それじゃあ私はもう寝るね！」

疾透「りみ？……もう行ったのか。行動するとなると早いな……俺でも布団に入つて5分は寝つけないのに……お休み、りみ。」

そう言つて俺は布団に入った。ちなみにりみは姉さんの部屋で寝ることになったら

しい。

疾透「（それにしてもりみ、ずいぶんと活動的になったな・・・入学式の時におどおどしてた雰囲気はどこかに行つたみたいだったし、俺の家に泊まりに来るまでになつてたなんてな・・・なんなんだろうな、この感じ。今までに感じたことがない・・・いや、今は考えても仕方ないな。早く寝て明日に備えよう。みんなにも謝らないといけないしな・・・ただこのままじゃ寝れないから麦茶を飲んでから寝るか・・・）」

【水夏の部屋】

水夏「りみちゃん、疾透はどうだった？」

りみ「はい、少しは持ち直したみたいです。私でも誰かの助けになれたのは・・・良かったです」

水夏「ありがとね、りみちゃん。疾透のことを救ってくれて。疾透、誰かの助けになつた後はいつもああやって部屋に籠るのよ。多分今回もまた同じことだっと思ってたけどまさかあそこまで傷が深くなるなんて…りみちゃんと疾透って似た者同士なのかもね。」

りみ「私と疾透くんが、ですか？そんなことは・・・」

水夏「疾透だって昔は人見知りしたり人に教えるなんてことはしなかったんだよ。でも本を読むことと絵を描くことは大好きで、『自分もあんな風になりたい』って気持ちがいっつしか疾透を変えたみたい。今のりみちゃんを見てると昔の疾透を思い出すのよ」

りみ「疾透くん、そんなことがあったんですね．．．わかります。私も誰かのために何かをやりたいて思っても行動はできなかったの．．．すぐに行動できる疾透くんが羨ましいです．．．」

水夏「りみちゃん、あんな弟だけどこれからのことをよろしくね。多分これから何度も躓くことがあるかもしれないけど．．．りみちゃんなら疾透のこと、支えてくれるって思うから。」

りみ「わ、私ですか!?できるのかな．．．が、がんばります!」

水夏「ごめんね、疾透のことを任せる形になっちゃうけど．．．あとこれはゆりにも止められてただけどりみちゃんには言った方がいいかも．．．」

りみ「お姉ちゃんに止められていた．．．?どういうことですか?」

水夏「実は．．．私とゆり、正確には私と *Glitter*Green* のメンバー全員が海外の大学を受験しようかなって話してて：まだ疾透には話してないんだけど」

りみ「えっ：?」

水夏「だから、もし海外の大学に受かったら私やゆりたちは日本にはいないかもしれない。それでも．．．疾透が心を開いてくれたりみちゃんだから伝えておこうかなって」

りみ「そう．．．ですか。すみません、もう寝ますね。明日も学校なので．．．」

水夏「ごめんね、なんか湿っぽくなっちゃって」

疾透「（今・・・姉さんはなんて言っただ？海外の大学を受験する？なんでそんな大
事なことを隠してたんだよ・・・）」

結局俺はあまり寝付けないまま次の日の朝を迎えた・・・その日から学校にちゃんと通い、燐子先輩や紗夜先輩、クラスメイトや有咲たちに心配をかけたことを謝った。

4話：彩りと試練

7月25日

俺が立ち直ってから1か月が経った。俺が立ち直ってみんなに謝ったときは怒られたり叩かれたりと思っていたが、そんなことはなく温かい言葉で帰りを待ってくれていた。香澄なんかは大げさに涙を流したりもしていた。そして気が付けば夏休みに入っていた。こつちに来てから休みらしい休みはなかったが花咲川でたくさんの友達が出てきたからこれから3年は楽しい夏休みになる・・・だろう。で、俺は今どうしてるのかというと…

【花咲川学園校門前】

疾透 「で、話したいことって何だいヴ？」

イヴ 「じつは、言い忘れてたことがあったんです！私、アイドルになりました！」

「・・・はい？今この人はなんとおっしゃいましたでしょうか？アイドルになりました？俺が学校に来てなかった2週間の間に何があったんだ？」

イヴ 「正確にはアイドルバンドというのですが、私はキーボード担当です！」

疾透 「わかった、わかったから。で、それで本題は何だ？」

イヴ 「はい！実はハヤトさんのことを皆さんにお話したら『学校で滅多に話さないからぜひ会いたい』とのことなので今日はご一緒にお茶でもどうかとお誘いしてる次第です！」

疾透 「なるほどな、そういうことならお邪魔することにするよ。でもいいのか？」

イヴ 「何がでしょうか？」

疾透 「いや、アイドルバンドっていったら女の子ばかりのバンドだろ？そんなところに男の俺一人が混じるんだけど」

イヴ 「大丈夫です！」

疾透 「何が大丈夫なのかよくわからないが・・・とりあえず案内を頼む。場所までは

知らないからな」

イヴ「わかりました！ではご案内します！」

イヴはそう言ってみんなが待つてるといいうカフェに案内してくれた。

【カフェ：『Ruby & Sapphire』】

疾透「ここは・・・この間来たところだな。といつてもよくキーボードの練習の際に使わせてもらってるんだが」

イヴ「そうなんですか？あ、皆さんがいましたよハヤトさん！」

疾透「別にそんな急がなくても俺は逃げないから大丈夫だぞ」

イヴ「皆さん！ハヤトさんを連れてきました！」

??「ありがどうイヴちゃん。今日はみんなオフだから今日を逃したらいつこうしてみ

んなで集まれるのかわからないから本当に助かったわ」

疾透「あれ・・・？もしかして白鷺千聖（しらすぎちさと）さんじゃ？」

千聖「あら、私のことを知ってるのね。」

疾透「千聖さん知らない人なんてそうそういませんよ。俺はこつちに来てからドラマとかを見始めたんですがたまに千聖さんが出てるドラマもありましたけどそれからずっと千聖さんが出てるドラマが好きになっていったので」

千聖「ふふっ、そう言ってもらえてうれしいわ」

疾透「忘れていました。俺の名前は森睦疾透つていいいます。よろしくお願いします千聖さん」

千聖「あらためて、私は白鷺千聖よ。花咲川学園の2年生ね。」

疾透「つてことは・・・俺の先輩つてことですか。他の階に行くつていっても図書室ばかりだったので知りませんでした・・・」

千聖「学校ではごく普通の生徒だから番組やドラマだけじゃわからないことだつてあるのよ。それだけでも知っておいた方がいいわ」

疾透「なるほど、勉強になります。」

??「じゃあ次はあたし！あたしは氷川日菜（ひかわひな）だよ！よろしくねちかくん！そして羽丘学園の2年生だよ！」

疾透「ちかくんって・・・別に呼び方は問題ないですけど。どうしてそんな呼び方に？」

日菜「だってるんって来たから！」

疾透「るんっ・・・ですか。俺にはその『るんっ』がどんなのか知らないですけど・・・それよりも日菜さんって蘭たちの先輩なんですね。」

日菜「あれ、蘭ちゃんたちを知ってるの？」

疾透「学校は違いましたけど、姉さんの紹介でよく遊んだんです。ただ中学3年生の時は受験シーズンだったので遊ぶ機会を減らしたからこの間会って来たんですよ」

日菜「いいなー！あたしもいつかつぐちゃんたちと遊びたい！」

疾透「日菜さんも羽丘だから遊べるときは遊べるじゃないですか・・・」

日菜「それもそうだね！」

疾透「あと、氷川って名字ってことはもしかして紗夜先輩の・・・」

日菜「あれ？おねーちゃんにも会ってたの？」

疾透「ついこの間花咲川の図書室でお世話になったんですよ。でも紗夜先輩が結構厳しめの人なんですけど勉強にも少しだけ付き合ってもらってます」

日菜「あのおねーちゃんが他の人の勉強に付き合うようになったんだ？るんって来た！」

疾透「まあ、色々ありましたから。深くは聞かないでくれると助かります」

日菜「それじゃあこれからおねーちゃん共々よろしくね！」

疾透「はい、よろしくお願いします」

??「それじゃあ次はジブンですね。ジブンは大和麻弥（やまとまや）です。右から読んで左から読んでも同じなので覚えやすいといえれば覚えやすいですね」

疾透「なるほど・・・よろしくお願いします麻弥さん。」

麻弥「はい！よろしくお願いします疾透くん！ところで、イヴさんから聞きましてけどキーボードをやってるらしいですね。もしかして隣に置いてるケースがそれですか？」

疾透「そうですけど・・・見ます？」

麻弥「見たいです！」

疾透「それじゃあ・・・これなんですけど」

麻弥「おお！これはこっちでは売られなくなつた海外製の超激レアキーボードじゃないですか！海外でもこれを作つたのはいいんですが生産するにあつた素材が不足し始めて生産することが途中で止まってしまつたとか・・・でも日本にいくつかが売られて購入したかったけど数があまりにも少なかつたため予約制になつたとか。でもそれだけの価値箱にキーボードにはあつてですね、キーボードの音だけでなくDJのス

クラツチ音も奏でられるとか！これ一つで多くの音を奏でられる事から『Multicultural』って名前が付けられたんですよ！気になるお値段はなんと・・・！！」

千聖「麻弥ちゃん、疾透くんが少しばかり引いてるからその辺にしておいた方がいいんじゃないかしら？」

麻弥「はっ！す、すみません！ジブンは機材のことになると饒舌になっちゃって・・・」

疾透「別に大丈夫ですよ、俺だつて好きなことについては長々と語っちゃうことがあるので」

麻弥「あはは・・・なんか似た者同士ですね、ジブンたちつて」

疾透「そうなのかもしれませんね。これからよろしくお願ひします麻弥さん。」

麻弥「はい！改めてよろしくお願ひします疾透くん！」

??「最後は私だね。私は丸山彩（まるやまあや）だよ、花咲川学園の2年生だね」

疾透「千聖さんだけじゃなくて彩さんも先輩だったんですか、てつきり同じ年かと思つてました」

彩「えっ!?それつてどういう意味!?!」

千聖「普段の言動と性格が疾透くんに似てる、ということじゃないかしら。」

疾透「まあそういうことですね。」

彩「なんか納得いかない・・・」

疾透「そういえば彩さんって普段どんなことしてらるんですか？」

彩「私？私はエゴサーチとか自撮りとかかな。見てみる？」

疾透「見せていただけなのなら……」

彩「それじゃあ……これだよ！」

疾透「えつと、これはここにいるみんな撮った写真ですね。これは花屋さんでたくさんの花を並べてもらって撮ったもの……これはバイト先で友達と撮った写真……これは……」

彩「どう……かな？」

疾透「とても彩さんの個性が出たいい写真ばかりですね。俺は写真を撮ることは好きなんですが取られるのはどうも苦手で……昔から記念写真にも写ることを嫌ってたのでこういう趣味を持つてる人が羨ましいですね」

彩「疾透くんはどんな写真を撮るの？」

疾透「俺がよく撮るのは日常風景が多めですね。子犬を散歩させてる子供からゲームをしているみんなの日常を取ったりと様々です。ただ最近はキーボードの演奏が楽しいので写真を撮ることは少なくなりましたけど、偶に絵を描くことは変わらないのでキーボードを演奏しない日は絵を描いています」

彩「絵を描いてるの!?見せて見せて！」

疾透「まあ動物とか人じゃないものを描いてますけどね。写真では人の日常風景を、絵では日常でよく使われているものや動物とかがメインです」

彩「いいなあ……」

疾透『俺に絵を教えてもらいたい』って言いたそうな顔をしていますけど説明が苦手なんで残念ですけど絵のことなら他の人に聞いてください」

彩「うう……」

千聖「これで全員の自己紹介は終わりかしら？」

疾透「そういえば、ここに来るまでにイヴからアイドルバンドがどうのこうのって聞いたんですけど、みんなは何を演奏するんですか？」

彩「私はボーカルだから演奏はしないかな」

千聖「私はベースね」

日菜「あたしはギター！」

麻弥「ジブンはドラムですね」

イヴ「私はキーボードです！」

疾透「なるほど、みんなのイメージに合ったような感じがしますね。」

彩「本当!?嬉しい！」

千聖「せっかくの機会だし、疾透くんのキーボードの音も聞いてみたいわね。」

疾透「俺の、ですか？そんなにもうまくないですよ」

千聖「みんな最初はそういうけど、そういう人ほど演奏はうまいのよ？」

疾透「……（何かうまく丸め込まれたような気がするな）いいですよ、演奏しましょう」

日菜「いいの!? やったー!」

疾透「ただここじゃ人が多いのでスタジオに入りましょうか。そこでなら静かに聞かせられるでしょうし」

イヴ「それじゃあ行きましょう!」

〔Ruby&Sapphire：スタジオ内〕

疾透「えつと……何を演奏してほしいとか希望はありますか？できれば楽譜とかあったほうがいいんですけど」

イヴ「ではハヤトさん、こちらをお納めください！」

疾透「用意がいい……ってなんで持ってきてるんだ」

イヴ「ハヤトさんならキーボードを持ってくるだろうと思って持ってきました！」

疾透「(なんとというエスパーブシドー少女……海外おそるべし) それじゃあ少し借りますね。えつと……」

疾透楽譜確認中……

疾透「なるほど、アイドルバンドというだけあって華やかで元気があふれそうな譜面ですね。」

日菜「この短時間でこの譜面からそこまで感じ取ったの？すごい！」

疾透「それじゃあ演奏しますね」

疾透演奏中……

千聖「驚いたわ・・・まさかこんなにもまい人がいるなんて。疾透くん、あなたはコンクールに出たことは？」

疾透「いえ、出てませんね。あまり目立つようなことは好きじゃありませんし、絵も趣味で書いてるだけで展示にも出したことはありません。」

千聖「そう、あなたならコンクールでも金賞は取れると思うのだけれど」

疾透「スキヤンダルになることは間違いないと思うので面倒事はとことん避けたいんですよ」

千聖「残念ね、疾透くんが奏でる音をもっと聞きたいのだけど」

疾透「別に聞きたいなら今度奏でてほしいのがあるなら録音してファイルに変換して送りますよ」

彩「いいの!？」

疾透「別にそこまで困ることじゃないですし。それに聞いて喜んでくれるのなら俺も嬉しいですよ」

日菜「それじゃあさつそく頼んでいい？えつとねー、これとこれとー」

麻弥「日菜さん、そんなに多く頼むと疾透くんも困りますよ」

疾透「別に頼む分には問題ないですよ。できた音から送る感じにしますし。まあ多すぎるのは作る側も苦勞するので最初のうちは5曲ほどでお願いします。慣れたらそのうち増やす方向で」

イヴ「ありがとうございます！そろそろスタジオから出る時間なのでそろそろ出ましょう！」

疾透「そうだな。そろそろ出るか」

こうして俺たちはスタジオを出て連絡先を交換して解散した

【午後5時：Ruby & Sapphireからの帰り道】

疾透「うーん．．．まだ時間があるな。夏休みに入ったしもうちよつとゆつくりしたいんだが．．．沙綾の所に寄っていくか。この時間なら仕事もないかもだし」

【やまぶきベーカリー】

(カランカラン)

沙綾「いらつしやい．．．あ、疾透くん。」

疾透「よ、沙綾。悪いけど今日は客じやなくて遊びに来たんだ」

沙綾「ちようどこつちも仕事が終わって今日は閉店だからね。何して遊ぶ？」

疾透「せっかくだし音を合わせてみないか？キーボードを持ってきてるんだけど」

沙綾「あー、ごめん。今ドラムは有咲のところ置いてるから音は合わせられないんだよね．．．」

疾透「それは残念だ」

沙綾「どうする？」

疾透「音を合わせるつもりで来たんだけど、合わせられないんじゃないかな……」

沙綾「それじゃ何か話す？」

疾透「それくらいしかないか……」

沙綾「それじゃあ……」

俺たちはPoppin', Partyの放課後や俺が今日会った人たちのこと。Poppin', Partyの夏休みの予定など……色んなことを話した。

疾透「そろそろいい時間だな、今日はもう帰るよ。ああ、残ってるパンをこれとこれとこれとこれを買って帰るよ」

沙綾「全部で760円だね」

疾透「ちょうど」

沙綾「ありがとね。またのご来店をお待ちしてるよ！」

疾透「また今度な、沙綾」

俺はやまぶきベーカリーを後にした・・・

【午後7時：やまぶきベーカリーからの帰り道】

疾透 「ん？スマホに連絡・・・？相手は・・・りみ？」

《GYNE》

疾透 「りみ、どうかしたか？」

りみ 「この間、水夏さんから聞いたんだ。お姉ちゃんたち、海外の大学を受けるって
…そのことをお姉ちゃんに聞いたらお姉ちゃんと喧嘩しちゃって・・・」

疾透 「・・・その話なら俺も聞いた。盗み聞きしたことは悪かったって思ってる。俺
もあの後姉さんと話したよ。姉さんは『今まで隠しててごめん。疾透に心配をかけたく

なかつた』って言った。俺も何度か迷惑をかけてきたし、許したよ。それで・・・喧嘩しただけじゃないんだろ？それでもしなきや俺にこうして送ってないだろうからな」

りみ「・・・うん。今日、疾透くんの家に泊めてもらえないかな・・・？」

疾透「・・・今日だけじゃなくてもいいぞ。落ち着くまでうちにいい。ただ、必ずゆり先輩と仲直りをするのだ。」

りみ「うん、うん・・・ごめんね・・・今疾透くんの家に荷物を持ってきてるから・・・」

疾透「ゆつくり来ていい。今日は姉さんが友達の家には止まってるから家には俺一人だけだ」

りみ「それじゃあ、着いたら連絡入れるね・・・」

【数分後】

りみ「お、おじやまするね・・・」

疾透「前来た時より片付いて何もなければいけないけど落ち着くまでゆつくりして
いってくれ」

りみ「うん、ごめんね疾透くん・・・」

疾透「謝るなって。俺だって昔はよく姉さんと喧嘩したからな。何もりみが悪いわけ
じゃない、かといつてゆり先輩も悪くない。誰にでも隠したいことの一つや二つはある
し、心配をかけたくない気持ちもわかる。だからりみの家に戻ったときにはちゃんと仲
直りするんだ」

りみ「うん、うん・・・！」

そう言つてりみは俺の胸の中で大粒の涙を流し、大きな声で泣いた。俺はりみの頭を
撫でて慰めた。多分初めての姉妹喧嘩だったんだろう・・・どうすればいいのかは伝え
た。後はりみがどうするのか：それはりみ次第だ。俺もできる限りのことはするが・・・

5話：気が付けば

7月26日

りみがゆり先輩と喧嘩した日の夜が明けた。あの後は泣き疲れたのか、ソファで寝てしまった。ソファで寝かせるのは気が引けたので姉さんの部屋までおんぶしてそのまま寝かせた。りみを寝かせた後は完全に寝付くまで側にいてあげた。それから俺も自分の部屋に行つてそのまま寝た。

【午前7時】

疾透「ん・・・もう朝か、もう一眠りしようと思ったけど寝てもしようがないし起きて朝ご飯の準備でもしておくか」

【午前8時】

りみ「疾透くん、おはよう」

疾透「りみ、おはよう。簡単な朝食しかできてないけど」

りみ「ううん、作ってくれただけでも嬉しいよ。昨日はごめんね・・・」

疾透「だから謝るなって。今日はとりあえずゆり先輩と何か話したらどうだ？」

りみ「う、うんそうしてみるよ・・・でも朝ご飯を食べてからでもいいかな？」

疾透「そうした方がいいかもな。それじゃ俺も朝ご飯にするか」

りみ「い、いただきます」

りみ&疾透食事中…

りみ「ごちそうさま、おいしかったよ」

疾透「ありがとな。簡単なものしか作れなかったけど。」

りみ「ううん、いつもお姉ちゃんが作ってくれてたから新鮮な朝ごはんだったし：」
疾透「・・・そうか。ほらりみ、とりあえずゆり先輩と電話して今後どうしたいか話さない」と

りみ「う、うん・・・」

(プルルルルル)

りみ「お姉ちゃん……」

(ガチャ)

ゆり「……りみ?」

りみ「お姉ちゃん……昨日はごめんなさい……私、お姉ちゃんのこと全く分かってなかった……隠し事をされただけであんなにひどいことを言つて……」

ゆり「私も……りみに隠し事なんてするなんてひどいお姉ちゃんだよね。りみに何も言わずに海外の大学を受験しようなんて……」

りみ「そんなことないよ!お姉ちゃんは私の憧れだもん!私はお姉ちゃんに憧れてベースを始めようつて思ったし、少しでもお姉ちゃんの力になりたかったから……」

ゆり「……そっか、りみは私のことをそんなふうに思つてくれてたんだ……私の方こそごめんね、りみ。私もりみのこと、まったくわかつてなかった……りみが生まれてからずっと側にいてくれたのに……」

りみ「ごめんね、お姉ちゃん……今疾透くんの家で朝食を済ませたから今から帰……」
ゆり「ううん、まだりみに合わせる顔がないから『今はまだ』帰つてこなくて大丈夫だよ。ただ、遅くなりすぎてもいけないから今日帰つてくるにしても夕方までには帰つてきてね」

りみ「うん、わかったよお姉ちゃん。それじゃあまたね」

ゆり「・・・りみ」

りみ「お姉ちゃん？」

ゆり「ありがとう・・・」

(プツツ、ツーツーツー)

りみ「(私の方こそ・・・ありがとう、お姉ちゃん)」

疾透「りみ、どうだった？」

りみ「うん、お姉ちゃんと仲直りできたよ。ありがとう疾透くん」

疾透「俺は何もしてないけどな。りみが頑張った結果だよ。これからどうする？一度家に戻るか？」

りみ「今はまだ合わせる顔がないからって・・・今日の夕方には帰るつもりだよ」

疾透「そうか。それじゃあどこか行くか？このまま家にいてもいいんだけど退屈だろ

うしな・・・」

りみ「それじゃああそこなんてどうかかな？」

そう言つてりみと一緒に向かったところは・・・

【午前10時：シヨツピングモール】

疾透「ここか、確かに時間を潰すにはもってこいだが誰かに出くわしそうだが」

りみ「気にしたら負けだよ？」

疾透「それじゃあどこに行く？ここつて結構広いし回れる場所は多いからな・・・」

りみ「それじゃあ・・・」

疾透「まあショツピングモールならここは定番だよな」

俺たちが向かったのは服屋だ。服は姉さんに買ってもらったばかりだったし、たまには自分で買うのもいいかなって思ってたしりみのチョイスに感謝だな。

りみ「めつちや服あるー！何買おう…？」

疾透「なあ、すごい今さらなんだけど・・・りみ」

りみ「何かな？」

疾透「もしかして、東京出身じゃなくて前は関西にいたとか？なんか関西の話し方が少しだけ混じってたし・・・」

りみ「えっ?!もしかして言ってた…？恥ずかしいー・・・」

疾透「いや、別に気にしてないけどな。そういう一面も新鮮でいいし、俺もたまにだけど向こうにいた時の話し方が出るし」

りみ「でも疾透くんが向こうにいた時の話し方って聞いたことがないような・・・」
疾透「まあ言うときはりみと同じで無意識に言うからな。学校でも普通に会話してたし向こうの言葉で話す機会なんてなかったし」

りみ「ううー・・・」

??「あれ、りみと疾透さん？どうしたんですかこんなところで」

疾透「誰かと思ったら美咲か。」

彼女は奥沢美咲（おくさわみさき）。俺たちのクラスメイトであるはぐみのいるガールズバンド、「ハロー、ハッピーワールド！」のDJ・・・のだが実際は商店街でバイトをしている着ぐるみ、ミッシェルの正体である。聞かれる前に言っておくけど、ハロハピと知り合ったのはついこの間はぐみに誘われてバンドの会議に半ば強制的に参加させられたからだ。メンバーは俺の一つ上の松原花音（まつばらかのん）先輩、クラスは違うけど学年は同じ弦巻（つるまき）こころ。羽丘学園2年の瀬田薫（せたかおる）さん、そして同じクラスの北沢はぐみ、そしてここにいる奥沢美咲（ミッシェル）の5人だ。連絡先も交換済である

りみ「美咲ちゃん、こんにちは。今日は一人？」

美咲「あー・・・実は花音さんと一緒に来たんですけど、花音さんは小柄なので人ごみに流されてですね・・・集合場所は決めてるんですけど」

疾透「それで案の定花音さんは迷って探している、と・・・」

そう、花音さんは極度の方向音痴で住宅街で迷ったりするほどである・・・偶に俺も花音さんの買い物に付き合ったりするのだが、気が付いた時にはいなくなっていたりする。

ちなみになんで『花音さん』と呼んでいるのかというと、花音さんのお願いだったりする。先輩呼びはあまり慣れてなかったらしく、仕方なくさん付けで呼ぶことになった

疾透 「で、花音さんと連絡は？」

美咲 「あー・・・実はスマホの充電を忘れてたせいで充電が切れちゃってですね・・・連絡が取れないんです」

疾透 「つまり花音さんと連絡が取れるのは俺かりみだけ・・・と」

美咲 「そういうことですね・・・お願いしてもいいですか？」

疾透 「別に大丈夫だ」

《GYNE》

疾透 「花音さん、俺です。今どこのあたりにいますか？」

花音 「疾透くん？えっと、今は1階のファッションコーナーの前にいるよ」

疾透 「1階のファッションコーナーの前ですね、わかりました。今から向かうのでそこで待つてください」

花音 「ふええ・・・ごめんね疾透くん・・・」

美咲「それで疾透さん、花音さんはどこにいるって言ってたんですか？」

疾透「1階のファッションコーナーだっけって言った。どうせだし俺たちもついていくよ。迷われてまた探す羽目になると困るし。りみもそれでいいか？」

りみ「私は大丈夫だよ」

疾透「というわけだ。それじゃあ行くか」

美咲「花音さん、大丈夫でしょうか・・・」

美咲&りみ&疾透移動中…

【ショッピングモール：1Fファッションコーナー】

美咲「えつと花音さんは・・・あ、いましたね。花音さーん！」

花音「美咲ちゃん・・・ごめんね・・・私からそっちに向かおうとしてただけ・・・」
美咲「一人でこつちに来たらまた迷いそうなのでこつちから迎えに来ました・・・また迷われると探さなきゃいけないので・・・」

花音「ふええ・・・本当にごめんね・・・疾透くんとりみちゃんもごめんね、私を探すのに時間を使わせちゃって」

りみ「いえ、大丈夫です！買い物はまだ終わってませんが、まだまだ時間はありますし」

疾透「せつかくなのでみんなで回りませんか？美咲のスマホの充電が切れてたからさつきは俺が連絡しましたし、また美咲と花音さんが一緒だとまた逸れた際に連絡が取れないので」

美咲「あー、確かにその方が良さそうですね・・・それじゃあどこに行きますか？」

りみ「さつき入り損ねちゃったし、2階の洋服コーナーでいいかな？」

美咲「じゃあまずはそのこに行って考えましようか」

こうして俺たちはさつき来た道戻って2階の洋服コーナーに向かった

【2F：洋服コーナー】

美咲「せっかくですし、ここで服とか色々買っちゃいましょうか花音さん。」

花音「そうだね、美咲ちゃん。私もそろそろ新しい服を買いたかったし・・・」

疾透「それじゃあ各自買う服を決めて買ったら洋服コーナー前に集合ってことで」
りみ「うん！どんな服はあるのかな・・・めっちゃ楽しみ・・・」

それから俺たちは洋服コーナーでいくつか服を買った。その後は美咲と花音さんとシヨツピングモールの入り口で別れ、俺たちはそのあと少しだけシヨツピングモールのゲームセンターやりみが見たいと言っていた映画を見たりして楽しんだ・・・映画の内

容は高校生の俺たちが見るには早そうなホラー映画だった。りみはホラー系が好きらしく、映画を見てる間も目を光らせていた。

疾透「りみってホラー映画もいけたのか…普段はおとなしいのにこういう時はすごい元気だよな…」

りみ「そんなに意外だった？私、小学生のころからホラー系は好きだったんだよ」

疾透「…ごめん、その感性にはついていけないかも。俺もホラーは苦手じゃないけど好きでもないからな…」

りみ「もしかして、嫌だった…？」

疾透「嫌なら映画はみないしな。それに俺にとっては面白かったからいいんだよ」

りみ「そう？よかったあ…」

疾透「つて、もうこんな時間か。どうする？」

時間が気になったので腕時計を見ると、針は5時を回ろうとしていた

りみ「私は家に帰ろうかな・・・お姉ちゃんも仲直りもできたし、早く戻って安心させてあげないと」

疾透「そうか、それじゃあ家まで送るよ」

りみ「そ、そんな悪いよ！疾透くんは朝から起きてここまで付き合ってくれたんだし・・・」

疾透「そうはいってももう夕焼け空だしここからりみの家に戻るまでに暗くなるかもしれないだろ？夜道に女の子一人で帰すわけにはいかないしな」

りみ「それじゃあ・・・お願いしてもいいかな？」

疾透「ああ、それじゃありみの家まで送るよ」

そうして俺たちはりみの家まで一緒に行くことにした

【午後5時20分：牛込家前】

疾透 「そこまで遅くならなかったな」

りみ 「うん、そうだね・・・あ、お姉ちゃん」

ゆり 「りみ、昨日はごめんね。りみに痛い思いをさせちゃって：私はもう大丈夫だから心配しなくて大丈夫だよ。疾透くんもありがとうね」

疾透 「いえ、俺は二人が仲直りできるようにちよつと手助けしただけですよ。それよりもりみは体冷えてるだろ？そろそろ家に入らないと風邪ひくぞ」

りみ 「今日はありがとうね疾透くん。それじゃあまた今度」

疾透 「ああ、またな」

そう言つてりみは家に戻った・・・

ゆり 「ねえ、疾透くん。」

疾透 「なんですか？ゆり先輩」

ゆり 「りみのこと、ありがとう。最近りみ、疾透くんのことばっかり話してるのよ。あなたにならりみのこと、頼めるかも」

疾透 「俺に頼める？一体何のことですか？」

ゆり 「あら、先輩の私に隠し事なんて10年早いわよ？自分でも気が付いてるんでしょ？『りみのことが好き』だって。」

疾透 「っ!?! どうしてそれを……?」

ゆり 「適当に言っただけだよっぱり凶星かあ。りみには伝えないの?」

疾透 「……ないんです」

ゆり 「ない?」

疾透 「俺がりみに思いを伝える勇気がないんです……まだ俺とりみは会ってから3ヶ月ほどしか経っていませんし、りみが俺のことを好きだとか思ってるかもわからない。そんな状況で伝えても……」

ゆり 「なら私が手伝おうか?」

疾透 「いえ、これは俺が乗り越えなきゃいけないことなので俺一人で何とかします。」

ゆり 「そっか、疾透くんがそう言うならそうしようかな。頑張ってね、疾透くん」

疾透 「はい、ゆり先輩も勉強を頑張ってください。りみのために、そしてゆり先輩自身のために」

ゆり 「ありがとね。もう今日は遅いから疾透くんも早く帰ったほうがいいよ」

疾透 「ゆり先輩もお体に気をつけて。あとこのことはりみには内緒に……」

ゆり 「わかってるよ。これは私じゃなくて疾透くん自身の課題だからね。ちゃんと自分で乗りこえてりみに思いを伝えること。これが私からの課題……っってことで」

疾透 「ゆり先輩からの課題……ですか。頑張ります。また今度」

ゆり「またね、疾透くん」

そうして俺とゆり先輩は別れ、俺は自分の部屋に戻った

疾透「(さすがに言えないよな・・・それにまだりみに伝えるときじゃない。俺は・・・)
りみに事が好きなんだ。でも今伝えてもしりみが俺のことを好きじゃなかったら一生
後悔することになる。だから・・・) 待っててくれ、りみ」

6話：まだ知らない音を求めて

9月1日

りみとゆり先輩が仲直りして早1ヶ月・・・今日は二学期の始業式だ。ゆり先輩に言われてから今日までりみのことをずっと考えていた。俺はりみのことがたしかに好きだ・・・でも俺にりみに告白する勇気なんてない。結局夜もあまり眠れず、今日に限って寝坊しかけていた。

【1-A】

疾透「ふわああああ・・・」

香澄「もりりん、寝不足？何時間寝たの？」

疾透「確か・・・6時間くらいだな・・・おかげで眠い・・・」

はぐみ「6時間!?!ダメだよ！最低9時間は寝ないと！はぐみも昨日は12時間寝たも
ん！」

たえ「はぐみ、とつても元気だね。私なんて13時間寝たよ」

疾透「お前たち・・・寝すぎは体に毒だぞ」

沙綾「確かにね・・・私だって昨日は9時間寝たのに。りみは？」

りみ「えつと・・・確か10時間くらいかな。イヴちゃんは？」

イヴ「私も10時間です！武士は早寝早起きが大事なので！」

香澄「私は11時間寝たよ！」

疾透「お前たちは元気がよすぎだ・・・俺はちよつと寝るから始業式の時間になつた
ら起こしてくれ・・・」

沙綾「うん。それじゃあ少しだけ休んでいいよ」

数分後・・・

沙綾「疾透くん、起きて。もうすぐ始業式だよ」

疾透「んー・・・おはよう、沙綾。数分だけだったけど寝れてすつきりしたよ」

沙綾「それはよかった。もうみんな廊下に並んでるから疾透くんも早く並んでね」

疾透「ああ、わかってるよ。」

そうして俺は体育館にいつて始業式に参加し、学園長や生徒会長のあいさつが終わって始業式は終わった。

【I-A】

香澄 「ところでもりりん、誕生日っていつ!？」

疾透 「・・・(やっぱり誕生日の話題出したな・・・こうなるのはわかってただけど) どうしても言わなきゃだめか？」

香澄 「ダメー!」

疾透 「・・・月・・・日だよ」

香澄 「何月何日!？」

疾透 「だから、2月14日だよ!はあ：面倒事になるから言いたくなかったんだが」
たえ 「あれ?確か2月14日って：」

疾透 「ああそうだよ・・・俺の誕生日はバレンタインデーだから毎年クラスメイトから山ほどチョコ貰ってるんだよ・・・おかげで家に戻ったら冷蔵庫の中が貰ったチョコでいっぱいになるからほとほと困ってるんだよ・・・こらその二人、ヒソヒソ話で俺に上げるチョコの話をするんじゃない」

はぐみ 「はーくんなんでわかったの!?!もしかしてエスパー!？」

イヴ 「ハヤトさん、盗み聞きなんてブシのすることではありません!」

疾透 「俺は武士じゃないしエスパーでもない。誕生日を聞いてまずチョコを作ろうとするのは普通だし、俺は花咲川で唯一の男子生徒だしな。だから一つ言っておこう。」

『悩みの種を増やささないでください（ダイナミック土下座）』

はぐみ 「えー!? はぐみも作りたいのにー!」

イヴ 「私もツグミさんに手作りチョコの作り方を教わったので作りたかったです
が・・・」

疾透 「あー、わかったわかった。作ってきてくれるのはありがたいんだがとりあえず
あまり大きすぎないように頼むな。あまり大きすぎると冷蔵庫に入りきらないからな」
はぐみ 「はーい!」

イヴ 「ありがとうございますハヤトさん!」

疾透 「というか、意気込むのはいいけどまだバレンタインには早すぎるからその時
で作るのは待つておけよ。特に今現在進行形で張り切ってるその2人」

香澄 「え? 誰誰!」

たえ 「どこにいるんだろう?」

疾透 「お前たちだお前たち!! はあ・・・今年が一番胃が痛くなるバレンタインなの
か
もな・・・」

りみ・沙綾 「大丈夫? 疾透くん」

疾透 「ああ、沙綾とりみがまともでよかったよ・・・」

こうして胃が痛くなりそうな誕生日になる予感が頭の中に遮りつつ始業式は無事

(?) に終わった。

【午前11時：花咲川学園校門前】

疾透「はあ・・・今年度は無事に過ぎせるんだろうか・・・」

紗夜「どうかしましたか疾透くん？」

燐子「顔色・・・悪そうです・・・」

疾透「ああ、紗夜さんと燐子さん・・・実はカクカクシカジカウマウマタトバタトバ・・・」

紗夜「・・・そうですか。今年の誕生日は荒れそうですね・・・」

燐子「大丈夫ですか・・・？」

疾透「俺の体は大丈夫ですけど精神が大丈夫じゃないですね・・・それよりどうかしたんですか？今日は燐子さん、図書委員の仕事は大丈夫なんですか？」

燐子「先輩たちがやってくれるというので・・・お言葉に甘えちゃいました・・・それより、この間はすみません：牛込さんにあの事を話しちゃいました・・・」

疾透「もう解決しましたし、あれはどう考えても俺のせいなので燐子さんは悪くないですよ。紗夜さんも何か俺に言いたいことがあるんですよね？」

紗夜「はい、その通りです。実は、私たちの主催ライブに疾透くんを招待しようかと思っています。」

疾透「俺を、ですか？別に時間はありますし大丈夫ですよ。その主催ライブの日はいつなんでしょうか？」

紗夜「今日からちょうど1週間後ですね。今日は始業式なので学校に来なくてはいけませんでしたが、来週は休日ですし皆さんの予定も合うそうなのでその日になりました。」

疾透「なるほど・・・大丈夫ですよ。その日は予定を開けておきますので」

紗夜「では、これを。」

疾透「これは？」

紗夜「ライブのチケットです。これがなくてはライブ会場に入ることはいけませんので。それと、このチケットの半券でライブが終わった後に私たちがいる楽屋に入ることができます」

疾透「ありがとうございます紗夜さん。」

紗夜「いえ、お礼を言われるようなことではありませんよ。当日を楽しみにしていただきます。場所はライブハウスのSPACEという場所ですので間違えないでくださいね」

疾透「前日にも視察に行くので大丈夫ですよ。ああそれと・・・バンド結成、おめでとうございます。ドラムの人も決まったんですね。」

紗夜「誰からの情報ですか？ドラムの人が入ったことは日菜以外に私は教えていませんが」

燐子「私は市ヶ谷さんに教えましたけど・・・」

疾透「情報源はその二人じゃなくて実はリサさんなんですよね…この間リサさんと日菜さんがうちに訪ねてきたのでその時にリサさんがポロつと喋ってました」

紗夜「今井さん・・・あなたという人は・・・まあいいでしょう。ドラムの人はあるの1つ年下なのですぐに仲良くなれると思います。ですが・・・」

疾透「また何か問題が？」

紗夜「問題と呼んでいいのかわかりませんが・・・その子、カッコいい言葉と言って白金さんを除いて私たちにはわからない言葉を言うので・・・」

疾透「所謂中二病というやつですか・・・まあ気を付けておきますよ」

紗夜「それではお疲れさまでした。白金さん、行きますよ」

燐子「はい・・・それではまた・・・」

疾透「ライブに誘ってくれてありがとうございました。当日は絶対にそちらに向かいます」

こうして俺たちは別れ、俺は家に帰って水夏姉さんにこのことを話した。水夏姉さんも行きたかったようだがその日は都合が悪いらしく、俺一人でライブを見に行くことになった。りみや蘭たちも誘ったけど見事に都合が悪かったという・・・

9月8日

そして今日は紗夜さんに誘われたRoseliaの主催ライブの日だ。Roseliaのことは先週の始業式の帰りの際に紗夜さんからバンドの名前を聞いていたからだ。リサさんが言っていたのはドラムの子が入ったという情報だけでバンドの名前までは言われなかったからな……言い忘れていたのかあえて言わなかったのかは知らない

【午後12時：ライブハウスSPACE】

疾透「ここか……ロビーはあまり広くないけどきれいに掃除が行き届いてるしここなら楽しくライブができそうだし、偶にここで練習するのもいいかもな……」

??「おや、見ない顔だね。男性客なんて珍しい」

疾透「あなたは？他の店員さんが来てないあたりオーナーと見受けましたが」

??「人を見る目は大したものだね。あたしはこのライブハウスのオーナー、都築 詩

船（つづき しふね）だよ。」

疾透「俺は森睦疾透つていいいます。よろしくお願いしますオーナー。」

詩船「ところで、今日は何のようだい？今日は主催ライブの日なんだが」

疾透「実は・・・」

詩船「なるほどね、それなら開始までゆっくりしな。」

疾透「ありがとうございます。」

それから俺はオーナーと少しばかり話した・・・俺が演奏してるキーボードのことなどいろんなことを話した。そして・・・

【午後1時：SPACEステージ】

疾透「そろそろライブが始まる時間か・・・Roseliaの他にはどんなバンドが

来てるんだ？」

そう俺が楽しみにしていると最初のバンドが入ってきた：すると現れたのは

疾透「香澄!?!りみとたえや沙綾と有咲まで!?!どういうことだ：?あいつら、俺には何も言わなかったよな・・・?」

香澄「今日はRoseliaの主催ライブに来てくれてありがとうございます!私たちはPoppin' Partyです!」

沙綾「こんなにお客さんがいるなんて演奏する私たちは嬉しいです!」

有咲「だから、今日はここにいらっしゃる皆さんに楽しんでもらえるように頑張ります!」

たえ「それでは聞いてください」

りみ『STAR BEAT!〜ホシノコドウ〜!』

疾透「(あいつら．．．俺に黙ってこんなことしてたのか。水臭いんだよ．．．おい待て香澄、歌いながらこつちを見るんじゃない。たえ、お前もだ。はあ．．．ライブの時はしつかりしてると思ったら結局いつも通りなのな．．．)」

こうしてPoppin' Partyの演奏は終わり、次々とバンドの演奏が終わってライブは終わった。それにしても、紗夜さんたちはもちろん蘭たちもいたなんてな．．．言ってくればよかったんだが。さて：俺はこのチケットを使って楽屋に行きたいところだが一回オーナーに話を通してから行くとするか。面倒事に巻き込まれたくないし

そうして俺はロビーにいるオーナーに話を通して楽屋に案内してもらった。

【楽屋】

(コンコン)

香澄「はい！誰かな？鍵空いてるよー！」

(ガチャ・・・)

疾透「こんにちは・・・いや、もう夕方だしこんばんはだな。」

りみ「は、疾透くん!? どうしてここに!？」

紗夜「やつと来ましたか。もう来ないかと思いましたがよ」

??「この人が紗夜さんが言っていた同じ学び舎に集いし同胞ですか？」

疾透「同じ・・・集いし・・・なんて? 紗夜さん、この人がドラマ担当の?」

??「はい！あこは宇田川（うだがわ）あこつていいます！Roseliaのドラマーです！」

疾透「俺は森睦疾透だ、よろしくなあこ。」

あこ「はい！よろしくお願ひします疾透さん！」

疾透「ところで、宇田川って名字ってことは・・・」

巴「ああ、あこはアタシの妹だな。来年は羽丘の高等部に入るんだってよ」

疾透「姉妹でこうも似てないのか・・・なんか大変そうだな巴」

巴「そうか? アタシはいい妹だって思うけど」

疾透「ごめん、巴のその感性にはついていけない・・・それで紗夜さん、俺をここに呼んだ理由は? よく見るとパスパレとハロハピのメンバーまでいるみたいですが」

紗夜「大事なことを言い忘れていました。疾透くんはマネージャーに興味はありませんか？」

疾透「マネージャー、ですか？あの体育系の部活にいる人の類のですか？」

紗夜「ええ、そのマネージャーです。実は疾透くんが来る前に少しだけ話し合っただけです」

彩「といつても、私たちパスパレの場合はライブの時に手伝ってくれば大丈夫なんだけど・・・」

蘭「疾透ってこっちに来て何年も経つけど、こういうのってやったことがないんでしょ？」

疾透「いや、確かにその通りなんだが・・・」

友希那「だから、私たちで話し合ってみたのよ。」

こころ「疾透が大丈夫なら、私たちのバンドのどれかのマネージャーになってほしいのよ！」

香澄「もちろん選ぶのは疾透くんの自由だし、複数のバンドのマネージャーになってもいいんだよ！」

疾透「そんなに簡単に決めてもいいんですか？俺はキーボード以外の楽器の知識はあまりないんですけど」

薫「構わないさ。マナージャーといっても楽器のメンテナンスをしないといけないと決まったわけじゃないからね。」

モカ「あたしたちのお手伝いをしてくれればーそれで万事オツケーって感じー」

疾透「んな適当な・・・で、決めるタイミミングは？」

疾透以外の全員「「「今ここで決めて」」」

疾透「デスヨネー。（さて、どのバンドにするか・・・ハロハピはマーチング衣装で世界のみんなに笑顔を届けるのがモットーのバンド。Roseliaは音楽の頂点へ咲き誇る5輪の青薔薇をモチーフにした本格的バンド。Afterglowは幼馴染5人で結成されたガールズバンド。Poppin' Partyは花咲川の仲良しメンバーで結成されたバンド。パスパレは事務所発のアイドルバンド。）俺が選ぶのは・・・ Poppin', Partyです。」

友希那「一応理由を聞いてもいいかしら？」

疾透「Poppin', Partyのメンバーには俺が花咲川に来てからとてもよくしてもらってます。それに・・・」

花音「それに？」

疾透「このバンドとなら俺はもつと頑張れる・・・そんな気がするんです」

友希那「そう・・・それがあなたの答えなのね。それなら私たちは何も言わないわ」

香澄 「これからよろしくねもりりん！」

疾透 「もうもりりん呼びは勘弁してくれ・・・そろそろ名前で呼んでくれ頼む」

香澄 「そう？それじゃあ改めてよろしくね疾透くん！」

疾透 「ああ、これからよろしくな。香澄、たえ、りみ、沙綾、有咲」

Poppin, Partyメンバー 「二三よろしく！二三」

こうして俺はポピパのマネージャーになり、その日は解散した・・・

7話：手助けという名の集合

突然だが、みんなは学校といったら何が浮かぶだろうか？学園祭、体育祭、卒業式、始業式、夏休みなどたくさんあるだろう。俺はこの中でもない何かが浮かんでいる。そう、テスト期間だ。学生の本業は勉強と偉い人は言っただろう：といても俺はテストの点数はそこそこ取れる普通の成績だ。頑張れば学年トップは取れるかもだが、あまり頑張りすぎても体に毒なので勉強は夜の9時までとしている。そんなある日の夜、俺に一本の電話が掛かってきた。

9月28日

【午後9時：疾透の部屋】

疾透「こんな遅くに誰だ・・・？有咲？もしもし、疾透だけど」

有咲「疾透か、悪いなこんな時間に。もしかして寝ろうとしてたか？」

疾透「いや、さつきまでテスト勉強してて今終わったところだ。別に何もすることがないから適当にキーボードでも演奏してみようと思ったんだけど、どうかしたか？」

有咲「疾透はまじめに勉強してるのな、いやそれはいいんだけど・・・」

疾透「そういえば有咲って入学試験をトップで合格したんだよな？それなのに俺に電話かけてくるのか？有咲もテスト勉強はしてるだろ？」

有咲「私は普通にやってるよ。でも問題は香澄のやつなんだよ。今日までバンド練習してて、明日からバンド練習を暫く休みにするって私が言ったんだよ。それで今どれくらいテスト勉強が進んでるか聞いてみたんだよ。そしたら香澄のやつ、なんて答えたと思う？」

疾透「あー、確かに俺は最近はずっと勉強で忙しくてポピパのマナージャーの仕事は放っておいたからな・・・で、香澄はなんて言ったんだよ？」

有咲「『テストなんてやらなくても生きていけるんだよ！』とか言ってたんだよ！それで来週から3日間試験だろ？だから明後日にポピパメンバー全員強制参加の学習会を開くから疾透も来てくれって話だよ。お前、入学試験を学年次席で受かったんだろ？」

疾透「そういえばそんなことを話したな、俺でよかつたら力になるよ。赤点を取ってバンド練習が厳かになつたら困るしな」

有咲「そう言ってくれて助かる。私だけじゃ香澄の相手はしきれねーしな・・・」

疾透「それじゃあ明後日は何時にそっちに向かったらいい？」

有咲「そうだな、朝9時に来てくれ。たえが香澄と一緒に来るから疾透はりみと沙綾を連れてきてくれ。みんなに連絡はすでに回してあるからこっちに來たら連絡してくれ」

疾透「了解。それじゃあ明後日の朝9時だな。」

有咲「夜中に悪いな。それじゃあお休み」

疾透「おう、お休み有咲」

(プツツ)

疾透「はあ・・・つい勢いで請け負ったが俺は勉強を教えるのはどうも苦手なんだよな・・・なんか有咲には期待されてるし期待を裏切りたくないからとにかく頑張るか・・・そろそろ寝ろう」

そうして俺は明後日の勉強会に備えて少し早く布団に入って寝た

9月30日

【午前8時：疾透の部屋】

疾透「今日は有咲の所の蔵で勉強会か・・・教えることは苦手だけど何とかするしかないな。とりあえずお出かけの服に着替えて勉強道具・・・と、よし準備はできたな。それじゃあ姉さん、行ってきます」

水夏「あれ、こんな時間にどこか行くの？今日は休日だから休んでればいいのに」

疾透「これから有咲のところまで勉強会なんだよ。」

水夏「あれ？疾透って入学試験を次席で合格したんだよね？なんでまた？」

疾透「ちよつと一人のクラスメイトが学生にあるまじき発言をしたんでちよつとこら

S・・・勉強を教えに行ってくる」

水夏「そう、じゃあ私は家で試験勉強してるからいつてらっしやい」

疾透「行ってきます」

【午前8時15分：牛込家前】

疾透 「りみー、迎えに来たぞー」

（ガチャ）

りみ 「疾透くん、おはよう。私は準備できてるからいこつか。」

疾透 「ああ。後は沙綾を迎えにいったって有咲のところに行くだけだな」

【午前8時20分：やまぶきベーカリー前】

疾透「沙綾、迎えに来たぞ」

(ガチャ・・・)

沙綾「おはよう疾透くん、りみ。ちよつと待っててね、今部屋から勉強道具持つてくるから」

疾透「そんなに急がなくても今から行けば15分くらい余裕があるぞ」

(1分後)

沙綾「お待たせ。それじゃあ有咲のところに行こうか」

りみ「勉強会なんて始めてから少し緊張しちゃうなあ…」

疾透「知ってる人たちでやるから別に緊張することはないんじゃないか？」

りみ「それはそうだけど、いつもお姉ちゃんと一緒に勉強してたから・・・疾透くんは誰と勉強してたの？」

疾透「別に、俺一人で勉強してたぞ？姉さんとは学校も違つたし範囲も完全に別々だったからな。自分のペースで勉強してた」

沙綾「ずっと一人でやってたの？すごいなあ・・・つてあれ？」

疾透「どうかしたか？」

沙綾「あそこに見えるのって：花音先輩と燐子先輩じゃない？」

りみ「本当だ。どうしたんだらう？」

疾透「花音さん、燐子さん、どうかしたんですか？」

花音「あ、疾透さんと沙綾ちゃんとりみちゃん・・・みんなも勉強会？」

沙綾「『みんなも』って・・・まさか花音先輩たちも？」

燐子「はい：：実は私たちも市ヶ谷さんに誘われてこれから行くところなんです：：」

沙綾「それじゃあ一緒に行きましょうか。」

花音「あ、ちよつと待って沙綾ちゃん。あと一人来るから・・・」

りみ「あと一人？」

燐子「もうすぐ・・・来ます・・・あ、氷川さん・・・こつちです・・・」

紗夜「白金さんたちは早いですね・・・あら、疾透さんと牛込さん、山吹さんではな

いですか。あなたたちも勉強会に？」

疾透「その口ぶりだと紗夜さんも有咲に誘われたんですね？」

紗夜「ええ。一緒に戸山さんの勉強を手伝ってほしいと頼まれていました。それでは

時間も押しますしそろそろ行きましょう」

そう紗夜さんは言ってみんなで有咲のところに向かった。

【午前8時45分：流星堂前】

(ピンポーン)

有咲 「ずいぶん早かったな・・・なんだ、松原さんたちと一緒に来たのかよ。てつきり別々に来ると思ってたんだけど」

疾透 「沙綾がこっちに来る途中で花音さんと燐子さんを見つけたものだからどうせだしっことで一緒に来たんだよ」

有咲 「おたえと香澄はもう来てるから早く入ってくれ。時間も押すだろーしな」
りみ 「それじゃあお邪魔するね有咲ちゃん」

燐子 「お邪魔・・・します・・・」

花音 「有咲ちゃんの所の蔵、初めて入るなあ・・・どんな感じなんだろう？」

有咲 「松原さんが考えてることとは多分違うと思いますよ」

【午前8時50分：流星堂蔵内】

たえ「あ、みんないらっしやい。さっそくお茶にする？」

有咲「ここはお前の家じゃねー！というかここに集まった本当の意味忘れてんじやねー！」

香澄「え!? みんなでお茶会するためじゃないの!？」

有咲「元々ここに集まったのは香澄の学力アップのためだー！だから香澄を呼んだんだろーが！」

香澄「そんな殺生なー！」

有咲「ここでお前が空か点を取ってバンド活動に支障が出たら武道館目指すどころ

じゃねーだろ！だから早く座って勉強の準備をしろ香澄ー！」

こうして有咲の騒がしい喧騒が蔵内に響き、勉強会：・基（もとい）香澄の学力アツプの会が始まった。

疾透「香澄、この漢字の読み方違うぞ」

たえ「香澄、この四字熟語の意味違うよ？」

りみ「香澄ちゃん、この数式間違ってる・・・」

沙綾「香澄、この実験器具の名称違うよ」

有咲「香澄！この絵のタイトル全然ちげーぞ！」

紗夜「戸山さん、この料理の作り方の手順が違います」

燐子「戸山さん・・・この英文の翻訳が違います・・・」

花音「香澄ちゃん、この製作する手順が違うよ……」

香澄「いいいいいいやややああああ……！」

……とまあ。間違えては指摘され、その繰り返しは何度も続いて昼になった

疾透「はあ……やつと昼か……香澄、問題を間違えすぎだ……！教える俺たちの身にもなつてくれ……！！」

香澄「(チーン)」

有咲「こりやダメだな……午後からは香澄抜きで私たちの勉強をするか……香澄ばかりに構って私たちの勉強が全くできなかつたし……でもまずは昼ご飯だな。」

沙綾「あはは……確かに香澄が間違えすぎて私たちの勉強にならなかつたもんね……」

香澄はどうする？」

疾透「このままソファで寝かせてやるか。さすがに俺たちが無慈悲すぎた」

りみ「そうだね・・・ごめんね香澄ちゃん」

そう言つてりみは香澄をソファに寝かせて布団をかぶせてあげた

燐子「お腹・・・すきましたね・・・」

花音「どうしよう・・・私何も持つてきてなかった・・・」

疾透「なあ有咲、家のキッチン借りていいか？後食材も」

有咲「うちのキッチンを？別にいいけど、お前何か作れるのか？それにこの人数だぞ

？」

疾透「この人数分のご飯を作るのは初めてだけどいつも作ってる料理の量を増やした
だけだし大丈夫だ。」

沙綾「私も手伝おうか？妹や弟によくお弁当を作つてあげてるから少しは力になれる
と思うけど」

疾透「ありがとう沙綾、でも気持ちだけ受け取つておくよ。」

沙綾「そう？でも無理しないでね。」

疾透「ああ、ありがとな沙綾。それじゃあ家のキッチンと食材借りるぞ」

有咲「お、おう・・・それじゃあ頼む疾透。」

そう言つて俺は有咲の家に入つてキッチンを借りてみんなの分の食事を作つた。で、みんなの感想はというと：

たえ「これ、オツちゃんに食べさせてもいいかな？」

りみ「めーっちやおいひー！」

沙綾「本当、おいしいねこれ。今度レシピ教えてよ疾透くん。」

有咲「ま、まあまあだな・・・べ、別に私より料理がうまいつてわけじゃねーからな！」

紗夜「疾透くんにこんなにおいしい料理が作れるなんて：驚きました。」

燐子「はい・・・とてもおいしいです・・・」

花音「うん、とてもおいしいよありがとう疾透くん。」

とまあ、とても好評価だつた。約一名が連れてきていたウサギに食べさせようとしていたのでそれはさすがに止めに入つた。だつて中華だぞ？そんなの食べさせたら場合によつてはとんでもないことになるからな。それから俺たちは個別でテスト勉強を始め、午前中からダウンしていた香澄は途中から参戦したものの結局はまた間違えたところを訂正するばかりで最終的にはまたダウンした。これ、本当に香澄の学力アップになつたのか？

【午後5時】

疾透 「とりあえず今日はここまで……だな。約一名がダウンして復活したと思っただらまたダウンしたりと対応に疲れた……」

有咲 「だな……とりあえず香澄は起きるまでここに置いておくから疾透たちは帰っていいぞ。」

たえ 「それじゃあ私は残っていいようかな」

有咲 「さっきの会話聞いてねーだろ！」

たえ 「ううん、聞いてたよ？今日は香澄と一緒に帰ろうかなって」

有咲 「それならそうって先に言えよ！紛らわしいんだよおたえは！」

疾透 「それじゃあ俺たちは先に失礼するぞ。お疲れ様有咲、たえ、香澄。」

有咲 「おう、気をつけて帰れよー」

そう言って俺たちは流星堂を後にして各自帰路についた・・・

【午後8時：疾透の部屋】

疾透「今日はどつと疲れたな・・・やばい、気力と体力が持ちそうにない・・・今日はもう寝ろう・・・」

(テロテロリン「GYNE通知の音」)

疾透「(こんな時間に・・・誰だ・・・?悪いけど・・・今日はもう休むって返事して寝るから・・・また明日話そうって・・・送るか・・・お休み・・・)」

そして俺は布団に入り今日の勉強会での疲労が蓄積されてたせいかな布団に入って数

秒で寝た・・・

【一方、疾透にGYNEを送った人の部屋】

りみ「疾透くん・・・今日は疲れちゃったのかな？もうちよつと話したかったんだけど・・・明日話そうって言ってるんだし今日は私も寝ちやおうかな・・・」

8話：巻き込まれて泊まって

テスト勉強が終わってから1週間後、無事にテストは終わって数日後にテストが帰ってきた。ポピパメンバーはもちろん、ハロハピメンバーやパスパレのメンバーもなんとか（香澄は本当にギリギリの赤点ライン）点数を取れたのでバンドをしてるメンバーは全員赤点を回避できていた。今日はテストが帰ってきただけだったのでその日は授業もなく午前中に解散となった。その帰り…

10月6日

「こころ「疾透——！」

はぐみ「はーくんー！」

疾透「誰かと思つたらはぐみとこころか。俺に何か用か？」

こころ「ええ！疾透、今日は私たちのバンドのお手伝いをしてくれないかしら？」

疾透「・・・いや、俺がポピパのマネージャーになつたことは知ってるんだよな？なんで俺なんだ」

はぐみ「実はみーくん、風邪ひいちゃつて学校に来てないんだつて・・・みーくんがないとバンド練習ができないんだよ！」

小言だが、みーくんとは奥沢美咲のことである。はぐみはバンドメンバーのことを呼びやすいように呼んでいるらしい。花音さんのことは『かのちゃん先輩』、薫さんのことは『薫くん』、こころのことは『こころん』という風に呼んでるらしい（美咲情報）それで、今日に限つて美咲は風邪をひき学校を休んでいるのでバンドメンバーが5人そろわないので練習ができないらしいので俺を誘っている・・・というわけである。ちなみに今日はポピパの練習は休みなので今日は家に帰つてゆっくりしようと思つていた・・・んだが

疾透「別に今日はポピパの練習は休みだし、大丈夫だぞ。」

はぐみ「わーい！はーくんありがとー！」

こころ「それじゃあ行きましょう！」

疾透「(あ、まずい・・・美咲Ⅱミツシエルってこいつらはわかってなかったからこのままいったとしてもやばいな・・・どこかでミツシエルに似たクマのぬいぐるみを借りないと・・・)」

こころ「どうしたの疾透？あかし達は先に行ってるわね！」

疾透「あ、ああ。俺もあとから追いつくから行っていいぞ」

はぐみ「はーくんも早く来てねー！」

そう言うってはぐみと心はこころの家に先に向かった

疾透「・・・これからどうするか。安請け合いしてしまったか・・・俺は着ぐるみなんて持ってないし誰かに言った所で貸してくれるわけじゃあるまいし・・・」

(シユタツ)

黒服「森睦様、お困りのようでしたらこちらをどうぞ」

疾透「うわっ!?!なんだ、黒服の人たちですか・・・」

【キャラ紹介：黒服の人たち。こころの家にいる何でもできる使用人達。こころや心の友達が困ったときは急に現れたりと神出鬼没である】

黒服「先ほどの会話をすべて聞いておりました。こちらをどうぞ」

疾透「はあ・・・ありがとうございます。」

黒服「それでは、ご健闘をお祈りします」

そう言つて黒服の人たちは去つていった・・・

疾透「仕方ない、これを着てこころの家に行くか・・・」

黒服に渡されたのは・・・見た目は完全にミツシエルだがミツシエルとは違つてピンの部分が青色だった。青ミツシエル・・・適当にクシエルとでも名付けておこう。どうせ今日だけだろうしな。さて・・・誰もいないのを確認して俺はクシエルに着替えてこころの家まで歩いて行つた。

(ピンポーン)

「はーい！疾透かしら？今行くわね！」

(ガチャ・・・)

「こころ「疾透」！よく来たわね・・・ってあら？あなたは誰かしら？」

クシエル(疾透)「ぼ、僕はクシエルって言うんだー。お友達の疾透くん聞いたんだけど、ちよつと遅れてくるらしいから僕が代理で来たんだー(意外と涼しいけど動きにくい・・・！)」

「こころ「クシエルね！いい名前じゃない！早く私の部屋に行くわよ！」

クシエル(疾透)「ま、待ってー、置いて行かないでー(動きづらくて思った方向に歩けない・・・！)」

【こころの部屋】

「こころ「みんなー！待たせたわね！今日限りだけど新しい友達を連れてきたわ！疾透はちよつと遅れてくるらしいけど話してたら来るんじゃないかしら？クシエルー！早く入りましょうー！」

はぐみ「クシエルって何、こころん？」

こころ「見た目はミツシエルだけど、ピンクの部分が青いクマさんよ！みんなもすぐに仲良くなれると思うわ！あ、来たわね！早く入ってちょうだい！」

クシエル（疾透）「や、やあみんなー。クシエルだよー。今日は疾透くんが来るまでの間だけみんなとお話に来たんだー（当の本人はこの中だけど・ど・ど）」

はぐみ「本当に青いねクシエル！はぐみは北沢はぐみっていうんだ！」

クシエル（疾透）「わかつてるよー。疾透くんからみんなのことは聞いてるからねー（当の本人はry）」

こころ「それじゃあさっそく話し合いましよ！今回の会議の話題は商店街のみんなにどんな風にして笑顔を届けるかよ！」

花音「商店街の人たちに笑顔を？」

薫「なるほど・・・儂い考えだよこころ。私はいいと思う」

クシエル（疾透）「商店街のみんなを笑顔にかー。（え!?いつからやるんだよそれ!!）ち、ちなみにいつやるのー？」

こころ「明後日よ！」

クシエル（疾透）「明後日かー。（うおいちよつと待て！さつき今日限りとか言ってたのはどこに行った！まさか明後日もこのままなのか!?）」

花音「明後日かあ：明後日は私が無理かなあ：（あれ？さつきから疾透くんの声が聞こえるような・・・もしかしてクシエルの正体って・・・後で聞いてみようかな）」

「こころ「そうなの？花音。」

花音「うん、ごめんねこころちゃん・・・ちなみにクシエルはその日は大丈夫なのかな？」

クシエル（疾透）「僕もその日は無理かなー：（適当に無理って言うっておけば多分大丈夫だろうし美咲の風邪が治ったら美咲に任せないと：さすがにこのままはきつい）」

はぐみ「そっかー。かのちゃん先輩もクシエルもダメかー。じゃあいつにする？」

花音「4日後なら空いてるかな。みんなは？」

薫「私は大丈夫だよ」

こころ「あたしも大丈夫よ！」

はぐみ「はぐみもその日は部活とかが休みだから大丈夫！」

クシエル（疾透）「ごめんねー、その日も僕は無理なんだー。でも僕じゃなくてミッシェルじゃダメかなー？僕はそもそもメンバーじゃないし、参加しても意味はないんじゃないかなー？（これからポピパの練習が続くから忙しいんだよ：）」

こころ「そうね・・・ごめんなさいクシエル。ミッシェルが戻ってきたら伝えておくわ！」

クシエル（疾透）「ごめんねー。ミツシエルにも伝えておくよー（ふう…何とか逃げ切れたな…）」

「こころ」「それじゃあ商店街でのライブは4日後に決まったわ！今日は解散よ！」

「こころがそう言う」と花音さんを除いたメンバーは部屋から出て行つた。で、部屋に残つた花音さんとクシエル（疾透）はというと：

疾透「ふう…疲れた…」

花音「お疲れさま、疾透くん。ごめんねこんなことに巻き込んだじゃって…」

疾透「ちなみにいつから気付いてました？」

花音「えつと、クシエル…疾透くんが『みんなのことは聞いてるから』って言った時からかなあ…」

疾透「やつぱりその辺からでしたか。名前を出さなかったらバレてませんでしたし本当に助かりました花音さん」

花音「ううん、私は何もしてないよ？」

疾透「いえ、俺だとわかつて日程をわざわざずらしてくれましたよ？それだけでも本当に助かりました…あ、黒服さんたちはいますよね？」

黒服「私たちの気配に気づくとは…さすが森睦様です。ではクシエルはこちらでお預かりしておきますので後のことはおまかせください」

疾透「わざわざこんなものまで用意させてすいません。あと美咲は・・・」

黒服「奥沢様ならお薬を飲ませましたので明日には元気になっていくでしょう。あと、ここでの会話は全て奥沢様に聞こえております。」

疾透「でしょうね・・・」

黒服「それでは失礼いたします、森睦様。こころ様は今ご主人様とお話をなさっているので帰るのならば今のうちかと・・・」

疾透「何かから何までありますがどうぞごさいます。花音さんはどうしますか？」

花音「私は美咲ちゃんのお見舞いに行こうかなって・・・疾透くんは？」

疾透「俺も暇ですし美咲のお見舞いに行こうかと思しますので一緒に行きますか？」

花音「いいの？」

疾透「それに、花音さんを一人で行かせると間違いなく迷いますし」

花音「ふえええ…ごめんね・・・」

疾透「これくらい大丈夫ですって。それじゃあ行きましようか」

そう言つて俺たちはこころの家を後にして美咲の家に足を進めた・・・

【午後4時：美咲の家への道中】

花音「美咲ちゃん、大丈夫かな・・・疾透くんも大丈夫だった？」

疾透「めっちゃくちや動きづらかったです・・・しかも初めて着ぐるみ着たんで」

花音「だ、だよね・・・あんなの着て動きやすいっていう方が無理だし・・・」

疾透「あんなのをどこに隠し持つて動いてるんですかね黒服の人たち。あれ？あそこにいるのって・・・りみ？たしかあの方向は美咲の家のはず・・・もしかしてりみもお見舞いに向かつてる最中とかか？おーい、りみ！」

りみ「疾透くんと花音先輩？2人も美咲ちゃんのお見舞い？」

花音『2人も』ってことはりみちゃんも美咲ちゃんのお見舞い？」

りみ「うん。有咲ちゃんから聞いたんだ。美咲ちゃん、今日は風邪で学校を休んでるって…今日の帰りに有咲ちゃんから美咲ちゃんのテストの回答も預かってるし持つ

ていつてるんだ」

疾透「あー・・・有咲は盆栽の世話か。なるほどな」

花音「有咲ちゃん、盆栽の世話が好きだからね・・・あ、美咲ちゃんの家見えてきたよ」

疾透「やっぱり話しながら向かってると距離が短く感じるな・・・」

りみ「そうだね、美咲ちゃん大丈夫かな・・・」

(ピンポン)

美咲「はいい・・・あれ、疾透さんと花音さん、それにりみ？どうしたんですかここまで？」

疾透「どうしたって、美咲のお見舞いだよ。途中まで花音さんと一緒に来たんだけどりみも見つけたからここまで一緒に来たんだよ。でも歩いてここまで来るなら元気そうだな、さすが黒服の人たち。さっき言っていたことは本当か」

りみ「え？疾透くん、何かあったの？」

疾透「それについてはカクカクシカジカガルパピコピコ・・・」

りみ「疾透くん・・・災難だったね・・・」

美咲「こんな時に風邪ひいてすみません・・・」

疾透「正直こうなるなんて思ってたからな・・・」

美咲「こんなところで立ち話もあれなんで入ってください．．．3人も玄関にいらなんて狭いですし」

疾透「それじゃお邪魔しますよっと」

【美咲の部屋】

疾透「それで美咲、今日の話聞いてたよな？」

美咲「はい、確か4日後に商店街のみんなを笑顔にするとかでライブをするそうですね．．．すみません疾透さん、うちの3バカが苦勞をかけました．．．」

ちなみにさつき美咲が言った3バカとは、はぐみ、薫さんの3人である。この

3人は美咲≠ミツシエルで見ているため3人はハロハピには6人のメンバーがいると思っ込んでいるという。この状況を見た美咲は3人のことを『3バカ』と呼ぶようになった。

疾透「薫さんは普段はまじめな人なんだがこころとはぐみはなあ…」

りみ「私のはぐみちゃんに巻き込まれることはあまりないけど…」

花音「私はいつも巻き込まれてるよ…」

疾透「…今人生で初めて人の苦勞が分かった気がする」

美咲「今までどんな人生送ってきたんですか…」

とまあ、今日起きた出来事（事件）のことを改めて美咲に説明したり、普段の日常などの話をした…

疾透「さて、と。そろそろ俺は帰るかな。姉さんは今日友達の家泊まって試験勉強会って言ってたし今家には誰もいないんだよ」

りみ「水夏さんは今お姉ちゃんのところだね。」

疾透「あれ、何でりみがそのことを知ってるんだ？」

りみ「私が返って来た時には水夏さんがうちにいたんだよ。だからみんなで勉強会かな・・・って」

疾透「あー、なるほどな・・・で、りみはどうするんだ？」

りみ「疾透くんさえよければ：だけど今日は疾透くんの家に泊まってもいいかな？」

疾透「俺の家に？」

りみ「うん、ダメ・・・かな？」

疾透「別にいいけど・・・でも今何も着替えとか持ってきてないだろ？一旦家に戻ってから着替えとかを持ってきた方がいいぞ。まだ5時なんだし風呂も入れてないからな。」

りみ「え？風呂までお世話になっちゃっていいの？」

疾透「いいんだよ。普段からポピパのメンバーには世話になりっぱなしなんだし、こういう時は甘えていいって」

りみ「それじゃあお言葉に甘えて・・・じゃあまた後でね。」

疾透「ああ、またな」

そう言つて俺たちは花音さんとりみと一緒に美咲の家を出ろうとしたが、花音さんはもう少し岬の家にいるつて言つて俺たちは美咲たちと別れた。

【午後5時30分：森睦家】

りみ「お、お邪魔します・・・」

疾透「この前来た時に近い状況だけどゆっくりしていいぞ」

りみ「う、うん・・・」

疾透「(やばい・・・改めて好きな人を家に泊めるのつて初めてだからな・・・誘つたのはいいんだけどいざ話すと何とも思いつかない・・・)」

りみ「あ、あの、疾透くん……」

疾透「なんだ？」

りみ「ここまで走ってきちゃって汗かいちやったから……お風呂借りてもいいかな？」

疾透「あ、ああ。もうお風呂は沸いてるから大丈夫だ。風邪ひく前に入っておいた方がいいぞ。俺は部屋にいるからあがったら呼ぶなり部屋に入ってくるなりしてくれ」

りみ「来て早々ごめんね……それじゃあお風呂借りるね」

そう言っつてりみは風呂場に入っつていった

【数分後】

りみ「疾透くん、お風呂上がったよ」

疾透「ああ、りみか。それじゃあ俺も入る……」

りみ「疾透くん？どうしたの？」

疾透「いや・・・結構薄着なんだなって・・・」

りみ「ご、ごめんね！家では冬以外は風呂上りはいつも薄着で・・・！」

疾透「こ、こつちこそごめん・・・俺も風呂入ってくるよ」

りみ「う、うん。いってらっしゃい・・・」

そう言つて俺は風呂場に向かった

【数分後】

疾透「りみ、風呂上がった・・・ぞ・・・？」

りみ「すう・・・すう・・・」

疾透「もう寝てるのか。今日は朝早かったし眠かったんだな．．．仰向けでベッドに寝るのはいいんだけど毛布を被つてないし被せてあげるか．．．」

俺は押し入れに入っていた毛布を取ると床に敷いてある布団に寝てるりみに被せてあげた。

疾透「さて、少し早いけど俺も寝るか．．．ん？」

俺の服の袖が引つ張られていたので見てみると、りみが服の袖を掴んでいた．．．

疾透「掴んでる手を放してもいいんだが．．．そうするとりみが起きるだろうから仕方ないな．．．」

結局俺はもう一つ床に敷いていた布団に入りりみの隣で寝た。途中からりみが俺の

腕にしがみついていたものだからあまり眠れなかったのは言うまでもない……

9話：忘れられない1日

唐突だが、冬といったら何を思いつくだろうか？雪合戦、こたつと蜜柑のセット、季節限定のスイーツなどの食べ物を食べるなどいろいろあるだろう・・・だけど俺の場合は今上げた候補のどれにも当てはまらない。ちなみに今現在進行形で花咲川を含めほんの一部を除く学校は冬休みに入っている。今日はクリスマススイヴの前日なのでここもクリスマススの準備で大忙しのように。でもそんなのはお構いなしのように大学を受験する生徒は今日が受験日なのだ。それは俺の姉、水夏姉さんにも当てはまる。今日と明日を使って受験は行われ、初日は学力での試験、2日目は面接試験とスケジュールが割り当てられている。今年は海外の大学を受験する人はそこそこいるらしいが、海外の

大学は受験が終わって大体1か月半後に合否が大学のサイトでわかるためあまり浮かれる雰囲気ではない。今日は姉さんが朝から受験に行ってるため今日は家に俺一人だ。といつても明日も家には俺一人なんだけど・・・

12月23日

【午前10時：森睦家】

疾透「今日はクリスマススイヴ前日なだけあつてどこもクリスマスモードだな・・・まあ俺は今はそのころじゃないんだけどな・・・姉さんとゆり先輩たちは受験だから大に受かるかどうかで今後の俺の生活が変わるだろうし気が気じゃないんだよな・・・つて悩んでも仕方ないし、今日はこの平和な一日を気楽に過ごすか」

(ピンポーン)

疾透「ん？今日は Poppin' Party は練習休みだし誰も来るなんて連絡は入れてないし……こんな朝早くに誰が何の用なんだ？」

(ガチャ)

疾透「あれ？明日香？」

明日香「はい、私ですよ。一体誰が来るって思ってたんですか？」

疾透「いや、香澄とかたえとかの無茶ぶり軍団の誰かって思ってた」

さつき俺が言った無茶ぶり軍団とは……戸山香澄、花園たえ、弦巻こころ、北沢はぐみ、氷川日菜の5人を指している。この5人は個々で何かを思いつくとなぜか俺に頼みごとをしてきたり、俺の可否なしに付き合わされたりしているため5人の誰かがいない状況では『無茶ぶり軍団』と偶に呼んでいる。ちなみに今日俺の家に訪ねてきたのは戸山明日香(とやまあすか)だ。俺の一つ下で香澄の実の妹である。姉の香澄とは違ってしっかり者で、花咲川の中等部3年生。今年は羽丘の高等部を受験するらしく、年が明けてから受験に入るため今日は家で勉強しているはずなんだが……

疾透「今日はどうしたんだ？受験勉強が忙しいとかで今日も家にいるって思ってたんだけど」

明日香「私も家にいたかったんですけど……姉さんとたえさんが騒がしくて勉強ど

「ころじやなかったので疾透さんの家に来たわけです」

疾透「あー・・・なるほどな、確かにあいづらがいたら勉強どころじやないのはわかる。つまり、今日は俺のところで受験勉強をさせてほしい、と?」

明日香「そういうことですね。もちろんご迷惑じやなければですけど」

疾透「迷惑だなんてとんでもない。むしろ今日は落ち着く1日を過ごしたかったから大歓迎だよ。」

明日香「押し入る感じになってしまってますみません、それじやあお邪魔しますね」
そうやって俺は明日香をリビングまで案内した

明日香「疾透さん、こんな感じですけど答え合ってます？」

疾透「どれどれ・・・うん、大体合ってるな。ここの公式をもう少し詳しく書いたら点数はもう少し高くなるんじゃないのか？」

明日香「なるほど・・・採点する側のことも考慮して回答するんですね・・・さすが先輩」

疾透「これでも入学試験は学年次席なんだよ。この間のテストも有咲と同率1位だったし」

明日香「一体どれだけ勉強したらそうなるんですか？」

疾透「俺の場合はちゃんとノートにとつてからどうすれば回答する側にとっての最適解なのか考えてあらためて新しいノートに書き留めてるな」

明日香「なるほど・・・」

疾透「そういえば明日はクリスマスイヴだけど香澄にプレゼントとか買ったのか？息抜き程度にショッピングモールまで買いに行かないか？また帰ってきてから勉強は見るからさ」

明日香「まだ買ってなかったですね・・・お願いしてもいいですか？」

疾透「それじゃあいくか。俺もあげないといけない人とかいるし」

明日香「誰にですか？」

疾透「Poppin' Partyメンバーと姉さんとゆり先輩と明日香の分・・・かな」

明日香「え、私にですか？世話になってるのは私の方なのでこういうのは私が上げる側じゃ・・・」

疾透「俺がプレゼントしてあげたいから買うんだよ。いいから遠慮するなつて。それじゃあ行くぞ」

【午後3時：シヨツピングモール】

疾透「さて……どこから回るか……明日香は誰に買うんだ？」

明日香「私もお姉ちゃんたちと疾透さんの分ですね。ここに来る前に言ったと思いますけど」

疾透「こんなに素直で頑張り屋な妹、ウチに一人は欲しいものだ……」

明日香「それ、この間も市ヶ谷さんに言われましたよ……」

疾透「あ……有咲なら言いかねないな。さて、どこで何を買うか決めてるか？俺はすでに決めてるんだが」

明日香「私も決めてますね。これとこれとこれを……あ、疾透さんの分は内緒ですよ」

疾透「まあそうだよな。というかほぼほぼ一緒だな。内緒なのは俺が明日香にあげる分と明日香が俺にくれる分か。とりあえず俺たちの分以外はほぼ一緒だし一緒に買いに行くか」

明日香「そうでしょうか。」

疾透「どうだ？お目当てのものはあったか？」

明日香「はい、ちょうどありましたね。ギリギリあと一つだったので・・・」

疾透「こっちも明日香にプレゼントする分が一つだけ残ってたから何とか変えたよ・・・これから家に戻って受験勉強の再開だな」

明日香「はい、またよろしくお願いします疾透さん」

そう言っただけ俺たちはショッピングモールを後にした。途中明日香の家によって明日香の部屋にプレゼントを置いてきて部屋に鍵をかけてから俺の家に向かった。

【午後5時：森睦家リビング】

疾透「言い忘れてたけど、今日と明日は姉さんはこっちに帰ってこないから帰りたいときに言ってくれば送るぞ」

明日香「そういえば今日からでしたっけ、海外の大学の受験日って」

疾透「ああ。ゆり先輩も同じところを受けるっていうから明日まで近くのホテルで勉強とか面接練習とかするんだと。だから今日はゆっくり過ごしたかったんだよな」

明日香「あー、なるほど・・・良かったですね疾透さん。無茶ぶり軍団の誰かが来なくて」

疾透「本当だよ・・・いつもこんな日常ならいいんだけど」

明日香「あはは・・・つてもうこんな時間ですか。そろそろ帰らないと・・・」

疾透「そうか？もう少しいいのに」

明日香「あまり長居してもあれですし、少しは落ち着いた空間がいいと思ったので今

日は帰ります」

疾透「無理強いはよくないしな。じゃあ家まで送っていくよ」

明日香「わざわざすみません」

疾透「いいって」

そう言つて俺は明日香を家まで送り届けたあと、俺は家に帰つて寝た。明日はクリスマスイヴだし、香澄たちも家に来るから少しでも体を休めないと後々持たないし・・・

12月24日

【午前10時：森睦家】

(ピンポーン)

疾透「よく来たなみんな」

香澄「やつほー疾透くん！」

たえ「遊びに来たよー」

りみ「お、お邪魔します・・・」

沙綾「ごめんね、こんな朝早くに」

有咲「おい香澄とおたえ！ここに来た目的忘れんじやねーぞ！」

明日香「お姉ちゃんが騒がしくてすみません・・・」

疾透「むしろいつもの学校生活に比べたら今日はまだ静かな方だよ・・・」

こうして騒がしくなりそうなクリスマス前夜のパーティーが始まった。

香澄 「これおいしいー！毎日食べたい！」

有咲 「毎日はいすぎだ！せめて1か月に1回にしろ！」

疾透 「別に今日はクリスマス前夜のパーティだし弁当に詰める分には作ってきてもいいぞ」

沙綾 「え、いいの？」

疾透 「いつも材料買ってくるの俺だし」

有咲 「水夏さん・・・こんなに出来のいい弟うちにもほしいです・・・」

りみ 「有咲ちゃん、それこの間も聞いたよ・・・？」

たえ 「私はお兄さんに欲しいかも」

りみ 「おたえちゃん、それ昨日も聞いた・・・」

明日香 「なんとというか・・・騒がしいですね、今日のパーティ」

疾透 「わかってたことだけどこれはどうしようもならないからしょうがないな」

こうして他愛もない雑談をしてプレゼントをあげてから今日は解散・・・のはずだったのだが、りみは少しだけ俺と話がしたいと言って俺の家に残った。

【午後7時：疾透の部屋】

疾透 「それで、話って何だ？」

りみ 「うん、水夏さんもお姉ちゃんも一緒の大学を受験してるんだよね？」

疾透 「ああ、そうだな。で、どうしたんだ？」

りみ 「私、いつもお姉ちゃんに頼りつきりだったんだ・・・ベースを始めたのもお姉ちゃんがギターをやったからだし、ベースの練習にずっとお姉ちゃんは付き合ってくれた。でも・・・お姉ちゃんが海外に行ったら私はどうすればいいのかわからなくなつて・・・」

疾透 「・・・それは俺も同じ考えだよ。俺もずっと姉さんに頼りつきりだった。『いつ

か一人暮らしをしなきゃいけない時が来る』って姉さんは俺に言って、炊事洗濯とかを俺に付きつきりで教えてくれた。いつしか姉さんは俺の目の前からいなくなつて自分の道を歩むんだらうなつて考えたら寝れなくなつた時だつてあつた。それをこの間初めて知つた。りみが俺のことを慰めに来てくれた時だ」

りみ「疾透くん・・・だからあの時リビングからこつちに歩いてくる音が聞こえたんだね・・・」

疾透「盗み聞きしたのは悪いと思つてる。でも・・・あの時知つたことはもう一つあつたんだ。」

りみ「・・・何かな？」

疾透「俺はりみのが好きだつてことにだ。りみは落ち込んでる時の俺を放つておらずに俺のことを慰めに来てくれたことがすごい嬉しかったんだ。その時からだな・・・俺がりみのことを気になり始めたのは。それからりみがゆり先輩と喧嘩して俺の家に来たことだつて会つただろ？昔の俺なら突き放して他のバンドメンバーのところ泊めていらだらうな。どうしてしなかつたのかわかるか？」

りみ「どうして・・・？」

疾透『りみのことを守りたい』そう思つたからだ。あの時泣いてたりみを見たら昔の自分を思い出したんだよ。昔はよく姉さんと喧嘩して友達の家で世話になつてたっけ

か・・・だから俺はその時思ったんだよ。『もう俺のような目に誰もあわせたくない、もしあの時と同じ状況になった人がいたら絶対に居場所を守ってみせる』って。」

りみ「疾透くん・・・わ、私なんかでいいの？私は引つ込み思案で、みんなとは違う環境で育って・・・疾透くんに比べたらいいところなんてないんだよ？そんな私のこと・・・好きだつて言ってくれるの？」

疾透「ああ、そうじゃなきゃこうして告白なんてしないさ。もともと俺は不器用でこんなことはできない人間だったんだ。それを覚えてくれたのは姉さんでも今日ここに来てくれた他のメンバーでもない。りみなんだ。りみが納得するまで俺は言う。俺はりみのことを一番近くで守りたいんだ。りみの笑顔、りみの居場所、りみのかけがえのない日常・・・りみにとっての守りたいものを俺にとっても守りたいものにしたんだ」

りみ「は、疾透くん・・・！わ、私も疾透くんのことがずっと好きだった！それなのに言い出す勇気が全然なくて、もしも疾透くんが好きならどうしようかって思ってた・・・」

疾透「それは俺だつて一緒だった。りみのことが好きだつて気が付いた時は告白する勇気なんてなかったし、りみに好きな人がいたらどうしようかって思ったらどうしようもなかったよ。でも俺は今日勇気を出してりみにこうやって告白してる。りみ、こんな俺だけ・・・これからよろしくね」

りみ「うん、うん……これからよろしくね、疾透くん！」

そう言っつてりみはこれまでに見せたことがないくらいに眩しい笑顔を俺に見せてくれた。今日の天気は雪で、今はもう夜の8時だ。そんな時に外に見える雪景色なんかよりも今のりみは眩しくて優しい表情だ。俺がりみに告白してそれを受け入れてくれた時はあの時のように泣いてくるかとは思ってたけどそんなことはなかった。それどころか俺に甘えてくるように抱き着いてきた。いきなりのことで少し驚いたが俺はそれを受け入れ……

俺はりみの唇にキスをした。クリスマスイヴということもあり、今日は一生で一番忘れることがない1日になった。キスをしたあと、りみは持つてきてる荷物から着替えを

出した。どうやらしばらくゆり先輩が家に帰ってこないから今日はうちに泊まる気満々だったようだ・・・(明日は一度帰るとも言っていた)今度ゆり先輩に会ったら報告しなきゃな。あとポピパのメンバーにも・・・

10話：Xmas Party

りに告白した次の日・・・今日はクリスマスだ。昨日も家の周りはクリスマススイヴでクリスマススムードだったが、今日はクリスマス当日なため昨日よりもっと盛り上がっている。つぐみの家ではクリスマス限定ケーキを食べることができたり、沙綾の所ではクリスマスパンを買って食べることもできるとクリスマスイヴの夜に連絡をもらっていた。今日もポピパのメンバーがうちに来て本格的なクリスマスパーティーだ。他のメンバーにりみは『ちよつと遅れてくる』とか適当なことを言っでごまかしているのだから驚きはしないだろうが・・・当の本人は少し恥ずかしがったりしている。何せ初めて着る衣装らしいからな・・・

12月25日

【午前9時30分：疾透の部屋】

りみ「ほ、本当にこの衣装を着てみんなの前に出るの……めっちゃ恥ずかしい……」

疾透「恥ずかしいなんて今更だろ？ ライブ衣装も似たようなものだし」

りみ「そうだけど、それとこれは別っていうか……」

(ピンポーン)

りみ「香澄ちゃんたち、もう来ちゃったの……？ 10時に来るとか言ってたのに……」

疾透「考えてみてくれ、香澄たちがきつちり時間通りに来るか？」

りみ「……ないね」

疾透「だろ？ それじゃあ俺はリビングに出て香澄たちを家に入れるから合図したら出

てきてくれ」

りみ「うん、わかったよ・・・」

【玄関】

疾透「いらっしやい、みんな」

香澄「おっじやましす！あつ、鶏肉のいい匂い！」

たえ「オツちゃん」連れてきたけどいいよね？」

疾透「ダメだ、一度家に戻ってから来い」

沙綾「さすがにウサギを家に連れてくるのはどうかと思うよおたえ」

有咲「だから言つたろー、ウサギを連れてくるのはダメじゃないかって」

明日香「またお世話になります・・・」

疾透「多分一番苦労してるのは有咲だな・・・まあこんなところで立ち話もあれだし早く上がれよ」

沙綾「そういえば疾透くん、りみは？りみはあの後ちよつとこつちに残つたんだよね？」

疾透「それについては後で説明するから」

有咲「後でちゃんと納得いくように説明しろよ？」

【午前10時：リビング】

疾透 「ちよつとご飯を食うのは待ってくれ、りみに連絡入れる」

有咲 「わーったよ、早く戻って来いよ？」

疾透 「連絡入れるだけだからすぐ済むぞ」

《GYNE》

疾透 「りみ、知つての通りみんなが来た。30分後に部屋から出てきてくれ」

りみ 「うん、30分後だね。みんな驚くだろうなあ…」

疾透 「そうだな、みんなの驚く顔が楽しみだよ。それじゃあ30分後にまたな」

《GYNE終了》

有咲「りみ、なんだって？」

疾透「あと30分もしたら来るんだと。それまでは普通にしゃべるか」

香澄「えー!?早く食べたいー!」

疾透「もうちよつと待て、りみが来た時にりみが食べるのがなくなったら困るだろ？」

たえ「それもそっか。何から話す？」

疾透「みんなは帰ってから何してたんだ？」

明日香「私はお姉ちゃんにサンタコスを着せられてすごい写メとられました・・・」

たえ「私はオツちゃんにサンタ帽と服で着せかえして遊んでたよ」

有咲「私は盆栽が枯れないように蔵の中に入れてたりしてたな、枯れたらまた買いなおさなきゃだし」

沙綾「私は妹と弟と一緒にプレゼント交換したよ。二人からもらったプレゼント、と

ても嬉しかったから後で見せるね」

有咲「で、疾透は何してたんだ？」

疾透「りみと一緒にちよつとお話してたよ。といってもあまり大したことじゃなかったけど」

有咲「ふーん・・・？珍しいな、疾透にしては。もうちよつとこう、世間話とかすると思つてただけ」

疾透「俺だつてそんなニュースとかいつも見るわけじゃないし、キーボードを弄つてる時が多いからあまり話さなくていいだろうな。と、そろそろ30分か。」

香澄「私、玄関で待つてるよ！」

たえ「私も玄関で待とうかな。沙綾と有咲はどうする？」

沙綾「私はここで待とうかな、どのみち会うわけだし」

有咲「私も沙綾と同じでここで待つぞー」

明日香「私も沙綾さんたちと同じで」

疾透「んじや香澄とたえが玄関に向かったところでご本人さんに来てもらうか」

有咲「は？今なんて言った？」

疾透「いやだから、りみご本人に来てもらおうかって」

明日香「え？意味が分からないんですけど・・・」

疾透 「鈍すぎないか・・・？まあすぐわかるし。ちよつとりみに電話かける」
(プルルル・・・)

【疾透の部屋】

りみ 「あつ、疾透くんから合図のワン切り電話だ。そろそろ時間だし・・・みんな待つてらるうなあ・・・な、なんとかなる・・・よね？」

【リビング】

有咲「で、りみはいつ来るんだ？もうすぐ30分だぞ」
疾透「もうすぐだ、といっても本当にすぐなんだけど」
俺がそう言うと部屋のドアが開いてりみが出てきた

りみ「み、みんなおはよう・・・でいいのかな？」

沙綾「りみ、おはよう…ってなに、その格好？」

有咲「一瞬誰かって思ったじゃねーか！」

明日香「でもりみさん、とても似合ってますよ」

りみ「でもめっちゃ恥ずかしい・・・」

りみが着ていたのはサンタのコスチュームだ。なぜか水夏姉さんが受験に行く前日

に買ってきていたのだという……その真意は不明なままだ

香澄「有咲の声が聞こえたけど何かあったのー？あ、りみりん！その格好すごく似合ってるよ！」

たえ「りみとオツちゃんを並べたら絵になるかな？」

有咲「で、なんでりみが疾透の家に私たちより早く来てたんだよ？」

りみ「そ、それは……」

疾透「別に隠すことじゃないだろ？」

りみ「それはそうだけど、恥ずかしいよ……」

有咲「で、何でりみがここに早く来てたんだ？」

疾透「有咲たちが帰った後、りみはうちに泊まったんだよ」

有咲「……は？りみが疾透の家に泊まった？」

疾透「んでもって、俺とりみは付き合うことになったんだ」

有咲「はああああああ!!」

りみ「そ、そういう事だよ有咲ちゃん……」

沙綾「そつか、二人ともおめでとう。」

香澄「りみちゃんと疾透くん、おめでとうー！」

有咲「そういうことは早く言えよ！何かあったのかって思ったじゃねーか！」

疾透「何かあったっていう見解は正しいけどな。」

たえ「それで、どっちから告白したの？」

りみ「は、疾透くんからだよ・・・私から言うなんてめっちゃ恥ずかしくて・・・」

明日香「まあ、お二人ともおめでとうございます。クリスマスイヴに告白なんてロマンチックですね」

疾透「俺も言うのは少し恥ずかしかつたけどな・・・まあこうして恋人同士になれて嬉しいって気持ちがあるから恥ずかしかつたのはもうなくなってるけどな」

有咲「それでもりみが来る前に言えよ！」

疾透「りみがいなくて言っても有咲たちは信じてたか？」

有咲「・・・信じてねーな」

疾透「だろ？だからみんなの前で言つた方がいいと思つたし、りみのサンタコスを見せるしこの方が手っ取り早いってりみと相談した結果だよ」

有咲「これ以上言つても無駄だろーな・・・で、二人はしたのか？そ、その・・・」

明日香「キス・・・ですよ？」

疾透「まあ、な・・・りみがいきなり俺に抱き着いてきて、それを俺が受け入れてから少し時間を空けてから俺からキスした」

りみ「うー・・・あの時は恥ずかしかつたよ・・・」

沙綾「それでりみ、今幸せ？」

りみ「うん！めーっっちゃ幸せだよ！」

沙綾「そつか、よかつたね。疾透くん、りみは引つ込み思案で少し恥ずかしがり屋だけどお願いね。」

疾透「言われなくても」

香澄「それよりお腹すいたー！早く食べようよー！お肉冷めちゃうー！」

疾透「おつと、それもそうだな。そろそろ食べるか」

俺たちは2人で用意していた料理をお腹いっぱいになるくらいに食べた。中でも香澄は今日のために夜ご飯を抜いていたらしく、二人分くらい食べていた・・・まあおいしそのの食べてたし作った側の俺たちとしては嬉しいんだけど、どこに置いていたのかたえのやつがウサギのオツちゃんを連れてきていくつかの料理を食べさせていた・・・おいうサギにそんなもの食べさせていいのか？とたえに聞いたら『オツちゃんは普通に食べれるよ？』と言っていたので返す言葉もなくなったのは言うまでもない

【午後4時：リビング】

香澄「そろそろやろうよ！」

たえ「何を？」

沙綾「プレゼントをあげる、だよね？有咲は？」

有咲「持ってこねーわけねーだろ！」

明日香「私もちゃんと持ってきてますので・・・はい、これはお姉ちゃんに。」

疾透「これは有咲に、これは沙綾に。これは・・・」

とまあこんな感じにみんなにクリスマスプレゼントを配った。中にはクリスマスプレゼントにしては高かったものや、なぜか季節外れだったものもあったりした・・・誰が持って来たのかは想像に任せよう。

【午後6時】

有咲 「んじや私はもう帰るわ。2人の邪魔しちやいけねーしな」

りみ 「あ、有咲ちゃん！別にまだいて大丈夫だから・・・」

香澄 「それじゃあ私も帰ろ〜つと！」

りみ 「香澄ちゃんまで!？」

たえ 「私もウサギたちにサンタコスを着せないといけないから帰ろつかないかな」

りみ 「おたえちゃんも!？」

沙綾「さつきお母さんから連絡来たから私も帰ろうかな。」

りみ「沙綾ちゃん!？」

明日香「お姉ちゃんが帰るなら私も帰りますね。」

りみ「明日香ちゃんも・・・!？」

疾透「みんながそう言うなら止めるのも野暮だしな。みんなの言葉に甘えるのもいいだろ」

りみ「でも・・・」

香澄「2人っきりのホワイトクリスマス、楽しんでねー!」

そうやって香澄たちはそれぞれの帰路についた・・・

【午後7時：疾透の部屋】

疾透 「なんとなく虚勢をはってみたけどやっぱり二人きりの時って緊張するな……」
りみ 「う、うん……なんかみんなに丸め込まれたような感じがするね……」

疾透 「なあ、それいつまで着てるつもりなんだ？」

りみ 「えつと……今日はお姉ちゃんが帰ってくるから私が家に帰るまで……かな」
疾透 「……そっか。俺は嬉しいな、その衣装を気に入ってくれたみたいで」

りみ 「なら来年も来てみようかな……なんて」

疾透 「今年は俺が頼んだみたいなき感じだったし来年着るかどうかはりみに任せるよ」

りみ 「それじゃあ来年も着ようかな……でも今のスタイルもキープしないと着れなくなっちゃうかもだから……」

疾透 「あー……確かにな。りみはチョコココロネが好きだし、甘いものは女の子の天敵っていうし今のスタイルをキープするならチョコココロネは控えた方がいいかもな……」

りみ 「でもチョコココロネも食べたいし……」

疾透 「まあ、りみがやりたいようにするのが一番だ。」

こんな感じの話をしてりみが帰るまで時間を潰した……

【午後8時】

りみ「もうこんな時間だね・・・そろそろお姉ちゃんが帰ってくるから私はそろそろ帰らないと・・・」

疾透「今日は水夏姉さん、ゆり先輩の家に泊まるって言ってたから今日も俺一人だな。」

りみ「大丈夫？」

疾透「まあ・・・姉さんたちが海外の大学に受かったら必然的に一人暮らしになるだろうし今のうちに慣らしておかないとだし大丈夫だ。りみも大丈夫か？ゆり先輩が海外の大学に受かったらりみも一人暮らしなんだろう？」

りみ「そうだね・・・でも料理とかは一通りできるし多分大丈夫だとは思うけど・・・」
疾透「俺でよければ料理とか教えるぞ。今後の生活に役立つだろうし」

りみ「それなら今度時間がある時にお願ひしてもいいかな？」

疾透「ああ、それくらいならお安い御用だ。」

りみ「ありがとう、疾透くん。それじゃあまた今度・・・だね」

疾透「次は会うときは多分大晦日だな」

りみ「あ、疾透くん、ちよつといいかな？」

疾透「どうした、りみ？」

りみ「んっ：」

そう言つてりみは少し背伸びをしてキスしてきた・・・

疾透「・・・りみ」

りみ「えへへ、今度は大晦日：だね。それじゃあ疾透くん、またね」

疾透「そうだりみ、忘れ物だぞ」

りみ「忘れ物？今私が持つてるもので全部だけ・・・何かあつたかな？」

りみは目を丸くして疾透が言つた意味があまりわからなかつたようだった。俺はさつき言つた意味をりみにわからせるように・・・俺はりみにキスをした。

疾透「俺からりみへの特別なクリスマスプレゼント：だ」

りみ「・・・えへへ、それじゃあ・・・今度こそまたね」

疾透「ああ、また大晦日だな」

そう言ったりみは俺の家を出て自分の家に帰った・・・

疾透「さて・・・食器とかを片づけなきゃな・・・あいつら、テーブルとかをこんなに汚して・・・片づけるのは俺なんだけど」

結局、俺は風呂に入って寝るまで2時間半ほどかけて食器を洗ったりテーブルを濡れた雑巾で拭いたりと忙しかった・・・

11話：みんなで過ごす新しい日々が始まり

今日は大晦日だ。1年の最後の日は大体の人は家族と過ごしたり、友人の家でゆっくりしたりと多種多様である。そんな中、俺は思い出にふけていた。今年一年は色々な事があった。共学になった花咲川学園でたくさんの新しい友人と会うことができた。ある時は弁当のおかずを取り合ったりしてワイワイ賑わったり、放課後には屋上で先輩たちと今日何をしていたかなども話し合ったりした。時には落ち込んでみんなに迷惑をかけたこともあった。そんな中でも一人のクラスメイトが俺のことを励ましたりしてくれて立ち直ることができた。でもそのクラスメイトもある日お姉さんと喧嘩して

うちに泊まりにきたりもした。そんなクラスメイトのことを放っておくこともできなかった俺はお姉さんとクラスメイトの仲介役を請け負ったりもした。今では普通に姉妹として接しているのが俺としても一安心だ。そして今年のクリスマスイヴ、俺はそのクラスメイトに告白した。最初はその人に好きな人がいるかもしれないという考えが頭の中によぎり、告白する勇気はなかった。でもその人は俺に勇気をくれた。告白は成功し、俺たちは恋人になった。そして今俺たちはその恋人が所属するガールズバンドの住んでいる家に向かってる途中だ。

12月31日

【午後1時：流星堂へ向かう道中】

疾透「しかし寒いな・・・冬っていつてもまだ始まったばかりだろ？なんでこんなに

も寒いんだよ・・・」

りみ「しよががないよ、今日は一日中雪って言ってたし・・・疾透くん、手袋しても寒いのか？」

疾透「俺は寒いのが好きじゃないんだよ・・・雪が降ってる時は一日中炬燵に籠ってるか一日中寝てるかの二択なんだし・・・寒っ」

りみ「もうすぐ有咲ちゃん所の蔵だからもう少しの辛抱だよ。あそこは暖房も入ってるし外よりかは暖かいから・・・」

疾透「なありみ、ゆり先輩のことが心配か？」

りみ「ど、どうしてわかったの!？」

疾透「だって、ずっと思いつめたような顔してるからさ。心配なのはわかるけど、それは俺だって同じだ。姉さんもゆり先輩と同じ大学に行くかもしれないんだし、血のつながった姉のことを心配しない弟なんていないし、りみも心配してるんじゃないかって」

りみ「うん・・・お姉ちゃん、大丈夫かな・・・？」

疾透「ゆり先輩たちなら大丈夫だって。信じよう、ゆり先輩たちを」

りみ「うん・・・」

疾透「ほら、流星堂が見えてきたから一旦この話はおしまいだ。早く行くぞ」

りみ「は、疾透くん待って…！早く温かいところに行きたいのはわかるけどそのまま走ると転ぶよ？」

疾透「大丈夫だって、俺はテニス部に入ってるんだし反射神経は元からよかつたんだからこんなことで転んだりしないよ。ほら、りみも早く行こう」

そう言つて俺たちは手を握つて流星堂まで歩いていった

【午後1時30分：流星堂前】

(ピンポーン)

有咲「やつと来たか・・・お前たちで最後だから早く入れ！」

疾透「今日が今年最後だからって焦りすぎじゃないか有咲？もうちよつと普通に対応

しないとこの先不安だぞ」

有咲「香澄たちでさえ12時に来たんだぞ！それをお前たちはー！」

疾透「はいはい、説教は後で受けるからとりあえず入れてくれ。寒くてたまらん」

有咲「つたく・・・香澄とおたえがいつもの調子だから疲れるんだよ・・・」

りみ「あはは・・・香澄ちゃんとおたえちゃんらしいね・・・」

有咲「とりあえず入ったら香澄とおたえを止めてくれ・・・」

疾透「わかってるよ」

そう言つて俺たちは流星堂に入った。入つて早々香澄が騒いでいるものだから俺が香澄のストッパーになつたのは当然だつた。今日は明日香は家族と過ごすというので今この場にはいない。まあ香澄を止めるのには一苦労なんだけどな・・・結局は物で釣つて無理やり止めた。

香澄「ねえ疾透くん！一回私たちで音合わせてみない!？」

疾透「はい？」

たえ「だから、一度私たちで音合わせてみない？」

疾透「いやいやなんでそうなるんだ？というか俺はポピパのマネージャーだろ？最近
は他の楽器の仕組みとかもわかつてきたけどいきなりすぎないか？」

沙綾「ほら、疾透くんって私たちの面倒見てくれてるじゃん？偶にはやつてみない？」

疾透「そうは言われてもな・・・今日はキーボード持つてきてないし、明日は朝早くから神社にお参りと初日の出を見に行くんだろ？大丈夫なのか？」

りみ「一回音を合わせるだけなら大丈夫だよ」

有咲「諦めろ疾透、5対1だ」

疾透「しょうがないな・・・で、俺はどれを使ったらいい？」

りみ「疾透くんがやりたいのでいいんじゃないかな？」

疾透「じゃあ・・・今回はドラムをやってみたいかな。」

沙綾「了解。じゃあ私は今回聞く側だね。なんだか新鮮だなあ、いつも演奏する側だし」

疾透「まあ今この中で一番慣れてない楽器だし、少しでも勉強しないと」

まあこういう感じに、香澄が思いついたのは偶に俺が他の楽器を使って音を合わせることだ。その時はポピパの誰か一人が聞く側になるのでその時はアドバイスをもらったりもしているから非常に助かっている。ちなみに香澄の説明はともぎっくりなのでその時はたえに助けてもらってる。こういう時のたえほど頼りになるのはないけど普段からその調子で頼む・・・

【午後一時45分】

疾透 「もうすぐ今年も終わりか・・・なんだかんだで色々あったな。」

香澄 「そうだね！入学式の時に疾透くんに出会って」

たえ 「同じクラスで同じ時間を過ごして」

りみ 「私は入学式の日の朝に疾透くんに出会って・・・」

沙綾 「時には私みんなに心配かけたこともあったっけ」

有咲 「私だけ別のクラスだったけどそんなの関係なしに話したりしたな」

疾透 「それから俺は紗夜さんからライブを見に来ないかって誘われて今はこうしてポ

ピパのマネージャーやってるし」

香澄 「みんなでクリスマスを楽しんだりもしたよね！」

りみ「それと、クリスマスイヴの日に疾透くんから私が告白を受けて・・・」

疾透「今俺とりみは恋人同士で」

たえ「練習の休憩の時にりみが疾透くんにベツタリくっついてたりしたよね」

有咲「だなー。あの時はめちやくちや甘い雰囲気出してたから見てるこつちの方が恥ずかしかつたけど」

りみ「あ、あれは忘れて！」

疾透「ま、今年一年はこのメンバーで過ごせて嬉しかったよ。つと・・・もうすぐだな、カウントダウンするか。6！」

有咲「5！」

沙綾「4！」

りみ「3！」

たえ「2！」

香澄「1！」

全員「一二三明けましておめでとうございます！今年も一年よろしく願います
！一二三」

こうして新年をポピパのメンバーと迎えた。その後はみんなで有咲の婆ちゃん手打ちの年越しそばを食べ、みんなは寝た。俺はというと、みんなが雑談してる間に眠りこ

けてそのまま少し寝ていたため眠気が来ず、ずっと起きていた。

1月1日

【午前5時：流星堂】

疾透「おーいみんな、起きろー。みんなで初日の出見に行くんだろ？」

香澄「今何時――？」

疾透「もう朝の5時だ。早く起きて出ないと初日の出が見れないぞ」

有咲「やつべー！もうそんな時間かよ！急いで支度して出るぞ！」

たえ「おおー、有咲張り切ってるー」

沙綾「あはは、結局はみんないつも通りだね」

疾透「それがポピパのいいところだからな。」

りみ「それじゃあ支度していこっか」

そうりみが言つて俺たちはしたくして初日の出が見れる神社まで歩いていった。昨日の夜には道に雪が積もっていたが、夜から雪かきをしていた人もいたらしく、ここ一体の道の雪はどけられていたため神社まではたいして苦はなく行けた。途中から寒く

て動けないメンバーが出た時は仕方なくおんぶしていった。

【午前5時30分：神社】

疾透 「ギリギリっぽいな：まあみんなは着物を着る時間があつたししようがなかつたけど約2名ほどマイペースで歩いてたからな・・・」

有咲 「つーわけで香澄は新年早々で悪いけどトレーニングなー」

香澄 「そんな殺生なー！新年あけて間もないから少しくらいゆっくりさせてよー！」

疾透 「大丈夫だ香澄、1日3時間のランニングコースだから」

香澄 「3時間でも苦行だよ！鬼！悪魔！人でなし！」

りみ 「香澄ちゃん、大丈夫だよ。私だって何とか乗り越えれたから・・・」

沙綾 「私は3日で終わったし大丈夫だって」

疾透 「体力がついたと思つたらそこでトレーニングは終わりだから頑張つた分だけ早

く終わるぞ」

香澄「うー・・・頑張る！あつみんな！初日の出だよ！」

疾透「初めて見たけど初日の出ってこんなに明るいな・・・」

りみ「私はお姉ちゃんと一緒に去年見に行ったらけど去年より明るいなあ・・・」

疾透「そうなのかな？」

りみ「うん。その時はまだ私は中学生だったから香澄ちゃんたちとは会ってないから二人だけだったよ。」

有咲「私はずっと蔵に籠りっぱなしだったからな」

香澄「私は明日香と一緒に炬燵で寝てた！」

たえ「私はウサギと一緒に炬燵で寝てたよ」

沙綾「私は弟と妹と一緒にトランプで遊んでたなあ・・・」

疾透「お前ら・・・」

彩「あれ？疾透くんと香澄ちゃん？」

疾透「・・・？彩さんに千聖さん、それにイヴと麻弥さんに日菜さんまで。パスパレの皆さんも初日の出を見に？」

千聖「ええ。今年の新しい目標のゲン担ぎで初日の出を見に行こうってなったのよ。」
イヴ「私たちは大晦日と元旦はお休みをいただいていたので日本での初日の出を見た

かったので皆さんをお誘いしました！」

麻弥「ジブンたちは日菜さんの家に泊まってからバスでここまで来ましたねやっぱり他の方も初日の出を見たかったのか雪かきをされていたみたいですし。」

日菜「うん、初日の出でてやっぱりるんってくるね！去年より明るーい！」

彩「え？日菜ちゃん去年も見に行ったの!？」

日菜「うん！おねーちゃんと一緒に！」

疾透「そういえばアイドルバンドを組んだのは去年のちようど半ばくらいだつて聞いたのでその時は暇だったんですね・・・よく紗夜さんを誘えましたね」

日菜「おねーちゃんも見なかったみたい！」

疾透「（紗夜さん・・・日菜さんに甘いですね。）」

千聖「それよりも、ずっと気になっていたのだけど疾透くんとりみちゃん、さつきからずつと手を繋いでないかしら？」

りみ「ふえっ?!い、いつからだつたっけ・・・」

疾透「確かこつちに着いてからだつたな・・・りみがずつと手に自分の息をかけていて寒いんだろうなって俺が手を握つてそのままだったか」

日菜「もしかしてー、二人つて付き合つてたりするー?」

麻弥「日菜さん!?!いきなり何を言つてるんですか!?!そんな当てずっぽうが当たつてる

わけ……」

りみ「は、はい……」

麻弥「えーっ!？」

日菜「あはは、やっぴりかー♪」

疾透「やっぴり日菜さんの洞察力はすごいですね。俺も見習った方がいいかもしれません」

イヴ「お二人とも、いつからお付き合いを始めたんですか？」

疾透「去年のクリスマスイヴ……まあほぼ1週間くらい前からだな。」

千聖「あら、とてもロマンチックなクリスマスイヴになったわね。2人とも、お幸せにね。」

りみ「あ、ありがとうございます……」

千聖「それじゃあ私たちはそろそろ帰るわね」

有咲「あれ、もう行っちゃうんですか？」

彩「今日は早くから日菜ちゃんに起こされて眠いんだよ……」

たえ「何時から起こされたんですか？」

彩「えつと……朝3時……」

疾透「……日菜さん」

日菜「テヘツ」

疾透「そこは照れるところじゃないです」

イヴ「それではこれで私たちはオサラバします！また学校でお会いしましょう！」

香澄「うん！彩先輩たちもまた学校で！」

そう言つてパスパレのみんなは神社を出て行つた

疾透「なんだかんだでパスパレのみんなもいつも通りだな。これはたぶん他のバンドメンバーもいつも通りだろ」

有咲「いきなり変わったら普通に驚くからいつも通りの方が助かるんだけどな・・・」
疾透「まあなんだ、改めて今年もよろしくな」

ポピパメンバー「「「うん！（ああ！）」」」」

こうして初日の出を見た俺たちは自分たちの家に戻つてポピパメンバーは朝早く起きたので眠気が来たので昼まで寝た。ただ俺は少し家の周りをランニングしてから寝ることにしたので少しだけ走つた。途中他のバンドメンバーにも会つて少しだけ話をしてその後は家に戻つてそのまま寝た。

12話：未来への旅立ち

：みんなは覚えているだろうか、俺が以前に言ったことを。今日は俺の誕生日：つまりバレンタインデーである。多分クラスメイトはおろか同じ学年の友人もチョコを持ってくるだろう：今年は何倍だろうか・・胃がキリキリしつつ今日の朝を迎えた。ちなみに大学の合格発表は今日の午後4時、つまりは放課後にはわかるという。さすがに自分たちで調べるのはちょっとばかり気が引けるので姉さんは俺に、ゆり先輩はりにみに、という感じでGYNEを通じて教えてもらおう感じになっている。

2月14日

【午前7時30分：森睦家リビング】

疾透「・・・」

水夏「なーにしょぼくれてるの疾透？」

疾透「姉さんだつてわかつてるだろ…今日は俺の誕生日なんだよ。今年はどれだけのチヨコをもらうのか…」

水夏「去年は普通の中学校だったから量は少なかつたけど・・・今年から通い始めた高校は元は女子高で今年から共学になったものの男子生徒は疾透一人だからね。私は今日は羽丘に顔を出すだけなんだけど、多分後輩たちからもらうんだろうなあ…」

疾透「他人事だと思つて・・・まあいいや、俺はもう行くから」

水夏「行つてらっしゃい、疾透」

そう姉さんに言つて俺は家を出て学校へ足を進めた

【通学路】

疾透 「はあー・・・」

有咲 「ずいぶんと大きいため息だな、何かあつたのか？」

疾透 「そういえば有咲にはまだ言つてなかつたか。今日は俺の誕生日なんだよ・・・」

有咲 「それとこのため息に何の関係があるんだよ？」

疾透 「有咲は今日が何の日か知ってるだろ？」

有咲「今日ってバレンタインデーだろ？それとこれに・・・あっ」

疾透「そうだよ・・・今日は少し出てくるのが遅れたから今頃クラスメイトは全員教室に入ってるだろうし・・・」

有咲「まあその・・・なんだ、ドンマイ。それと・・・こ、これ・・・」

疾透「これってもしかして・・・チョコか？」

有咲「け、けっしてお前のために作ったわけじゃねーからな！そこところは勘違いすんじゃねー！」

そう言つて有咲は花咲川までダッシュしていった

疾透「こんな時まで猫を被るのか有咲は・・・ま、いつもと変わらない日常だしこんなのが続けばいいんだけど・・・な。そろそろ俺も教室に行かないと。遅刻になりそうだし」

【午前8時：花咲川学園1-A】

疾透「みんな、おは．．．よ．．．う．．．？」

俺が教室に入ってきたとき真っ先に入ったのは．．．俺の机の上が謎の箱で埋め尽くされていた状況だった。やっぱり俺が予想してた通り、クラスメイトはおろか同学年の友達も持ってきていたみたいだった。

はぐみ「おはようはーくん！今日はすごいいね！机の上がチョコの箱でいっぱいだよ！」

イヴ「ハヤトさん、モテモテですね！」

たえ「おはよう疾透くん。今日は一段と暗い顔だね？」

香澄「こんな時でも笑顔笑顔！」

りみ「あはは．．．」

沙綾「疾透くん、言いたいことはわかるけど．．．とりあえずこれを何とかしよつか。」

疾透「ああ．．．とりあえず手伝ってくれ。今日は見る限り去年の5割増しだから少し大きめのトートバッグを持ってきておいてよかったよ．．．（あとで黒服の人たちを呼んで家に運んでもらおう）」

そうして午前中の授業は終わって昼食の時間となった。

【午後12時：花咲川学園屋上】

あれから俺はみんなに気づかれないように黒服の人たちを呼び、今日貰ったチョコを俺の家に運んでもらった。

疾透「はあ・・・今日はまさか去年の5割増しだったとは…食べる側も苦勞するんだぞチョコは・・・」

燐子「ごめんなさい…」

疾透「燐子さんは悪くないですよ。ただチョコをくれたことには感謝しています。紗夜さんも彩さんも千聖さんも花音さんもありがとうございます」

紗夜「私は日菜に言われたので仕方なく・・・」

彩「私は偶に疾透くんにお世話になつてゐるからそのお礼だよ！」

千聖「私は花音のことを助けてもらつてたりしてたからそのお礼ね」

花音「私はハロハピのことを助けてもらつてたりしたから・・・」

沙綾「疾透くん、先輩たちからも人気だね・・・」

疾透「今年のバレンタインは一番過酷なような気がする・・・」

りみ「私たちの学年だけでも多かつたのに燐子先輩たちからももらうと相当な量だよね・・・」

疾透「暫くはチョコだけで生活できそうな量だ・・・香澄、本当にあれで自重してたのか？」

香澄「あつちやんと私の分であなつたよ？」

疾透「やつぱりか・・・！」

たえ「私のはどうだった？」

疾透「たえにしてはちやんと言われたことを守つてたな。でもお前たちは本当に自重したか？」

そう言つて俺はこころとはぐみの方を見た

はぐみ「ごめんねはーくん、つい張り切りすぎちゃつて・・・」

「こころ「私は時間を忘れて作ってたらかなりの大ききさになっていたわ！」

疾透「それでもこころのあのチョコはさすがに自重してほしかったが・・・」

こころが持つてきたチョコはなんと、等身大の自分をかたどつたようなチョコだつた・・・これにはさすがのクラスメイトも引いていた

疾透「頼むからお前たちは本当に『自重』の意味を広辞苑とかの辞書で調べてから頼むな・・・」

はぐみ「はい！」

疾透「にしても意外だつたのが有咲も作つてきてたことだな。それも朝一に会つた時に渡されたし」

有咲「し、仕方ねーだろ！お前たちとはクラスが違うんだし・・・」

香澄「有咲ー！抜け駆けはずるいよー！」

疾透「貰つた中で2番目に大きかつたお前が言えたことか!!」

こうして花咲川のバンドメンバーで過ごした騒がしい昼休みは終わった。

【放課後：花咲川学園屋上】

疾透 「……」

りみ 「……」

俺たちはゆり先輩たちの試験結果を屋上で待っていた。

疾透 「なんか俺たちのことじゃないのに緊張するな……」

りみ 「そうだね……試験のことはお姉ちゃんからは何も聞いてないしそんなそぶりは見せなかつたから大丈夫だとは思うんだけど……」

疾透 「姉さんもそんな感じだったからな……勉強は人一倍頑張ってたみたいだけど内心は結構焦ってたんだろな……ゆり先輩は俺のことを応援してくれたし、姉さん以上に心配だ……」

りみ「お姉ちゃんが疾透くんのことを心配？」

疾透「ゆり先輩は俺がりみのことが好きだつてことに気が付いていたんだよな。あの日、りみを家に送つたときにゆり先輩に聞かれたんだよ」

りみ「お姉ちゃんがそんなことを・・・」

疾透「だからゆり先輩のことも心配なんだよ。いつ試験結果が伝えられるのか…他人事のように思えないんだよ」

りみ「私も、水夏さんが疾透くんと合わせてくれた時は本当に感謝してたんだよ？私でも疾透くんのことを救えたんだなつて…」

疾透「俺もりみとゆり先輩が喧嘩した時は少しじやないくらいに焦つたよ。俺のことを救つてくれたりみが今度は窮地に立たせられて、今度は俺が助けてやらなきゃなつて…そう思えたのはりみのおかげだ。ありがとう、りみ」

(テロテロリン♪)

疾透・りみ「!!」

来た。りみの方にはゆり先輩から、俺の方には水夏姉さんからこの間の試験結果が今来たんだ。そして俺たちは連絡の内容を『同時に』見た。結果は・・・

疾透「りみ・・・！」

りみ「疾透くん・・・！」

俺たちに伝えられたのは……

『みんなで合格できたよ!』という文字だった。

疾透「りみ……よかったな。ゆり先輩、無事に大学に受かって……!」

りみ「うん、うん……! 本当に良かった……! お姉ちゃんたちが大学に受かって……! 疾透くんもよかったね……グスツ」

疾透「ああ……! 本当に……!」

りみ「でも今年でお姉ちゃんと離れ離れかあ……これから一人で頑張らないと……」

疾透「一人じゃないだろ? りみにはPoppin' Partyのメンバーや俺がい

る。りみは一人なんかじゃない。それに、離れ離れになってもゆり先輩たちとは心で繋がってるさ」

りみ「そっか・・・そうだよね：悲しんでちゃダメ・・・だよね。お姉ちゃんたちのこと、笑顔で送り出してあげないと・・・」

疾透「ああ、そうだな。ただ一人暮らしになることは変わりないし・・・これからのことを考えないと・・・」

りみ「それなら・・・一つ提案があるんだけど」

疾透「なんだ？」

りみ「あの・・・たまにそっちに泊まりに来てもいいかな・・・？」

疾透「・・・そんなのは俺に聞かなくても大丈夫だ。りみならそういうだろうと思っ
てたし、りみがこっちに来たいときに来ればいい。」

りみ「えへへ：ありがとう疾透くん。」

そうして俺たちは屋上を後にして帰路についた・・・帰り道ではあまり言葉を交わさず
に手を繋いでりみを送っていった。りみの家の前にはゆり先輩がいて、俺たちは付き
合うことになったことを教えた。ゆり先輩は涙を流して俺たちのことを祝福してくれ
た。ゆり先輩からの言葉を心に刻んで俺は自分の家に帰った・・・

3月22日

今日は羽丘と花咲川での卒業式だ。3年生である水夏姉さんとゆり先輩は卒業し、来年度からは海外の大学に通うので寂しくなるけど、そんなことも言ってもらえない。卒業式が終わってからすぐに海外に向かわなければならないため、俺たちは空港までタクシーで一緒に向かった。そして今ポピパメンバーと俺は空港のロビーにいる。今日からしばらくの間はゆり先輩たちとはお別れだ。

疾透「それじゃあゆり先輩、姉さん。向こうでも頑張ってください」

ゆり「こんないい後輩を持って私は嬉しかったよ。りみも今日まで一緒にいてくれてありがとね」

りみ「お姉ちゃんたちも、向こうで元気だね。偶にこっちで撮った写真を送るからね」
水夏「あはは、ありがとねりみちゃん。できの悪い弟かもしれないけどこれからよろしくお願ひするね」

疾透「出来の悪いは余計だ姉さん。せっかくの旅立ちなのに雰囲気壊れるだろ……」
水夏「あはは、ごめんって。私なりの気遣いのつもりだったんだけど」

香澄「水夏さん、ゆり先輩！卒業おめでとうございます！これ、私たちが作ったクッキーです！飛行機の中で食べてください！」

たえ「あと、私たちがポピパからは曲の贈り物です。向こうで聞いてください」

沙綾「たまに手紙とか送りますね。あとこれは私の家から持ってきたパンです。クッキーと一緒にどうぞ」

有咲「あとこれ……これまでに撮った写真を入れたアルバムです。偶にはこれを見てこっちで遊んだことを思い出してください」

ゆり「ふふっ、ありがとうみんな。」

(ピーピーピー)

水夏「ゆり、そろそろ時間だよ。」

ゆり「そつか、もうそんな時間かあ：なんだか時間が過ぎるのが速く感じるなあ：」
疾透「そうですね・・・でもこんな時間でも大切な思い出です。こつちのことは任せ
て向こうでも頑張ってください」

ゆり「うん、疾透くんもりみのことお願いね」

疾透「はい、りみのことは俺たちに任せてください。」

そう言つて俺たちはゆり先輩たちが乗った飛行機が飛び立つてから見えなくなるま
でずっと空を見上げていた。

疾透「行つてしまったなあ・・・」

有咲「だな・・・やっぱり一人でもいなくなると寂しく感じるな」

香澄「こんなところで落ち込むなんて私たちらしくないよ！ゆり先輩たちの分までキ
ラキラドキドキしよう！」

たえ「香澄の言うとおりだよ。私たちにはまだ2年あるんだよ？」

沙綾「そうだね、まだ2年あるから卒業までにゆり先輩たちにまた会えるだろうから
私たちも頑張らないと」

りみ「うん！」

来月から俺たちは新しい学年になつて後輩たちも入ってくる。その時には今のクラ
スメイトとは違うクラスになるだろう。でも俺たちはクラスは離れても心は繋がって

いる。

また・・・みんな
で輝こう。

高校2年生編

13話：みんなでまた輝こう

ゆり先輩たちが海外の大学へ行ってから早1ヶ月が経ち、俺たちは進級して高校2年生になっていた。3年生だった先輩は卒業し、県外の大学や県内の大学に進学したり、高卒で就職したりと多種多様、十人十色である。今日は花咲川も羽丘も始業式兼入学式で新しいクラスの発表とか新しいクラスメイトとの会話、自己紹介などをしたりと始業式が始まるまでは自由だ。ちなみにその日の学校は午前中で終わりらしいので昼から部活動や生徒会に入っている人たちは昼から忙しいこともある。今は新しい学年になつて学園に向かつてる途中だ。

4月21日

【午前7時30分：牛込家前】

疾透 「りみー、準備できたかー？」

りみ 「も、もうちよつと待って疾透くん……あと少しだから……！」

疾透 「そんなんじやポピパの縁の下の力持ちなんて言えないぞー」

(ガチャ)

りみ 「ご、ごめんね疾透くん……今日から2年生だからネクタイの色を間違えちゃつてさつき変えてきた所だったから……」

疾透 「俺も間違えそうになったから大丈夫だ。そろそろ行こうりみ」

りみ 「うん！」

【花咲川学園への通学路】

疾透 「お、沙綾と有咲じゃないか。元気にしてたか？」

りみ 「おはよう沙綾ちゃん、有咲ちゃん。」

沙綾 「おはよう疾透くん、りみ。二人とも元気そうだね」

有咲 「2人とも、ネクタイを間違えようとしてなかったよな？」

疾透 「危うく間違えそうになったけど間違えてはないから大丈夫だ。でもりみが……」
りみ 「ううー……今日から2年生つてことを忘れてて一回間違えちゃったよ……」

沙綾 「あはは……やっぱり誰かしらは間違えるよね……」

疾透 「やっぱり学年が変わってもみんなはいつも通りだな。といっても約一名さつきからそわそわしっぱなしだけど」

有咲 「そわそわなんかしてねーよ！」

疾透 「いや俺は有咲がそわそわしてるとか一言も言っていないんだが」

りみ 「有咲ちゃん……」

有咲 「う、うっせー！さつきと行くぞ！」

沙綾 「はいはい、そろそろ行こうか。新しいクラスに誰がいるのか確認しておきたいし」

疾透 「悪い、紗夜さんから呼び出しくらったからちよつと俺は先に行くぞ」

有咲「私もだ、つーことで後は二人で行ってくれ」

りみ「うん、また後でね。」

有咲「それじゃ行くぞ疾透」

疾透「とりあえず学園まで走るか」

【午前7時45分：花咲川学園校舎前】

疾透「すみません紗夜さん、これでも走ってきたんですが……有咲が途中疲れちゃつて」

有咲「私は部活に入ってるわけじゃねーから体力はねーんだよ……!」

紗夜「急に呼び出してすみません。お二人には入学式の時の新入生への挨拶をしてもらおうと思ひまして呼び出しました」

疾透「俺と有咲が、ですか？」

燐子「はい：二人ともテストの成績がいいので……お二人は新入生の時は学年主席と学年次席だったの……」

有咲「あー、そんなことありましたね……」

紗夜「私たち3年生がやってもいいのですが、白金さんは生徒会長としての挨拶がありませんし、私が言うところと新入生の人たちが怖がってしまうかもしれないので……二人は生徒会にも入っていますからこうして頼んでいるんです。」

疾透「なるほど……すみませんが俺は辞退させていただきます。こういうのは有咲の方が向いてると思うので」

有咲「ちよっ!?!なんで私に押し付けてんだよ!お前もやれ!」

疾透「あがり症ってわけじゃないんだけど、あまり人前に出るのが苦手って言った方がいいかな……だから悪い有咲、頼む」

有咲「はあ……わかったよ。でも後で私が頼むことは手伝ってもらうからな!」

疾透「はいはい。ということです紗夜さん。」

紗夜「わかりました。市ヶ谷さん、では放課後に生徒会室に来てください。」

有咲「わかりました。それではまた放課後に」

燐子「よろしく・・・お願いします」

紗夜「ちなみに私たちはすでに新しいクラスの把握は終わってるので今のうちに済ませておいてください。私たちは校舎に入っておくので」

疾透「わかりました。有咲、とりあえず新しいクラスの確認をしておくか」

有咲「オツケー、さっさと確認するか。ちようどりみたちも来たし。」

りみ「燐子先輩たちのお話、終わった？」

疾透「ああ、ちようど今な。じゃあ新しいクラスの確認をするか。香澄たちは待てなかつたみたいでもう向こうに行ってるけど」

有咲「つたく・・・さっさと確認するぞ」

俺たちは新しいクラスのメンバーが書かれた掲示板を確認した。

【午前8時：花咲川学園2F掲示板前】

疾透「もうみんな来てるな。美咲、こころ、はぐみ、イヴ、おはよう」

美咲「疾透さん、おはようございます。もうここにいるみんなは新しいクラスの確認しましたよ」

こころ「とつてもワクワクしたわ！新しいクラスのみんなと話すのがとつても楽しみね！」

はぐみ「はぐみもとても楽しみ！」

イヴ「はい！新しいクラスの人たちと新しい思い出を作るのも楽しみです！」

疾透「どれどれ・・・？俺のクラスは・・・つと・・・俺は2ーBだな。」

香澄「私は2ーAだよ！美咲ちゃんと一緒だ！」

有咲「私も2ーAだな。よろしく奥沢さん」

りみ「私は2ーBだよ。また疾透くんと同じクラスだね。こころちゃんと同じクラスかあ……」

沙綾「私も2ーBだね。今年もよろしくね疾透くん、りみ。」

香澄「おたえは!? おたえはどのクラス!？」

たえ「えつと、2ーEだね。はぐみとイヴと同じクラスだよ」

香澄「おたえー……(泣)」

たえ「みんなもE組にする?」

有咲「できるか!」

たえ「クラスは違っても心は繋がってる、でしょ?」

沙綾「それじゃあ放課後、蔵に集まる?」

たえ「ごめん今日バイト」

疾透「おい……って俺も人のこと言えないな。今日はテニス部に顔を出さないと。大会も近いし練習しておかないと体が鈍っちゃいそうだしな。美咲はどうする?」

美咲「私も練習しようかなって思います。春休みは休みが多かったので体が鈍ってそうですし」

香澄「それじゃあまた放課後に蔵に集まろうよ!」

有咲「わり、今日は少し遅くなるわ。生徒会室に行かねーと……」

沙綾「じゃあ今日は自主練ってことにしようか。疾透くんも時間あったらでいいから」

疾透「了解。んじゃ新しい教室に入って話すか。また後でな」

香澄「うん！また後で！」

そう言つて俺たちは新しい教室に入った・・・

【午後12時：屋上】

疾透「一応大きめの弁当箱を持ってきておいて正解だったな。部活には顔を出す予定だったんだけどまさか3時間もフルに動くことになるなんて思わなかったし」

美咲「ですね。新部長は結構張り切ってますし振り回されないようにしないと……」

千聖「あら？疾透くんと美咲ちゃん。こんにちは」

疾透「千聖さん？それに彩さんと花音さんまで。」

彩「ううー……」

美咲「つてどうしたんですか彩さん？元気なさそうな声を出して」

花音「実は……私と千聖ちゃん、燐子ちゃんと紗夜ちゃんは同じクラスだったんだけど、彩ちゃんだけ別のクラスになっちゃって……」

疾透「あー……そうだったんですか。去年は蘭だけ別のクラスになったとか聞いてましたけど今年はこっちで彩さんだけ別のクラスですか……」

彩「そうなんだよ……だからお昼になつたら千聖ちゃんたちのクラスまで顔を出しに行かないといけなくなっちゃって……」

千聖「あら、去年も別のクラスで私のいるクラスまで来てたのはどの誰かしら？」

疾透「……彩さん、去年も千聖さんのところに行つてたんですね……」

花音「お昼になつたらすぐいなくなっちゃったと思つてたらそんなことしてただ……」

彩「だつて、千聖ちゃんと別々のクラスだったから昼休みにならないと話せなかったんだもん……」

美咲「あはは……今年もまた彩さんは振り回されるんですね……」

千聖「それで二人とも、こんなところでどうしたのかしら？ほとんどの人はもう帰つ

てるけど」

疾透「俺と美咲はこれから部活動なんですよ。3時間くらい動きっぱなしになりますね・・・」

千聖「そういえば新人戦って来月だったかしら、早いよね」

疾透「そういう千聖さんは部活とかやってないんですか？」

千聖「私はイヴちゃんみたいに部活はしてないわよ。これでも忙しいから」

疾透「確か剣道部と茶道部の掛け持ちでしたっけ？」

花音「茶道部には私も入ってるけどイヴちゃんのみこみが早いからすごいんだよね

…」

美咲「あはは・・・って疾透さん、そろそろ行かないと」

疾透「もうそんな時間経ったのか。それじゃあ俺たちは部活に行きますね、もし時間があつたら来てください」

彩「うん！今日はお仕事ないし時間があつたら見に来るよ！」

そう彩さんが言つて俺と美咲は屋上を後にしてテニスコートに向かった

【午後3時10分：テニスコート】

疾透「さて…と、手加減なしで行くぞ美咲」

美咲「望むところです。練習には来てませんでしたけどストリートでテニスしたんで

その成果みせますよ」

疾透「俺もストリートで練習してな。じゃあ始めるぞ」

俺たちは春休み中も各自練習をして来月の大会に備えていた。今日はここに来るまでに話し合った結果、俺と美咲は練習の最後に練習試合をすることに決めていた。

疾透「ほっ…よっ…！あれから…うまくなつたな美咲！」

美咲「疾透さん…こそ！去年始めたばかり…なのに…もうあたしに追いつく…ようになつたなんて！」

疾透「部活が…休みでも…ストリートで練習…してたんだよ！よし、まず」

セツト目は貰った！」

美咲「やりますね疾透さん・・・でも次は取りますよ」

こうして俺たちは1セットを取ったり取られたりを繰り返して、最終的には俺が最終セットを取ってゲームセットとなった。途中から花咲川だけでなく羽丘のテニス部員が来たりして気が付けばテニスコートの上には観戦でいっぱいだった。羽丘からは A f t e r g l o w の面々から花咲川にはいないバンドメンバーが来て新しいクラス等の話をしてその日は解散した。帰り際に美咲から『次は負けませんか』と言われ、次に美咲と試合する時までに腕を磨いてストレートで勝てるように練習しようと思った。で、俺はというと・・・

【午後4時50分：流星堂】

疾透「悪い、美咲との試合が長引いて・・・」

沙綾「シー。おたえ、さつきまでバイトだったから疲れてるんだよ」

疾透「そうか、起こすのも悪いし今日は解散・・・」

たえ「おはようー・・・」

疾透「あれ、起きたのか。もしかして起こしちゃったか？」

たえ「ううん、さつきから起きてたけど寝たふりしてたよ？」

疾透「・・・心配して損した。これからどうする？」

りみ「ちよつとお散歩しない？さつきまで音合わせしてて疲れちゃって・・・」

疾透「そうするか、さつき俺も美咲と試合してクタクタでな・・・」

香澄「それじゃあさつそく行こう！」

そう香澄が言うのと俺たちは流星堂を出て適当にふらつくことにした。

【午後5時20分：散歩道】

疾透 「今年は結構クラスメイトががらりと変わったな、去年はクラスにバンドメンバーが多かったのに今年は大体半分くらいに減ったし」

沙綾 「そうだねー、去年ははぐみとりみと香澄とおたえとりみりんとイヴがいたし：その時は有咲はいなかったけど」

有咲 「うるせー！こっちは授業中も寂しかったんだぞ！」

りみ 「有咲ちゃん、私たちとバンドを組んでからずっと放課後になったら私たちのクラスに来てたもんね・・・」

疾透 「まあ今はもう慣れたけどな。ん？向こうに走ってる人がいるな・・・ってあの、こっちにきてないか？」

?? 「はあ：はあ：すみません、あなたたちはPoppin, Partyさんでしょうか・・・？」

疾透 「俺はマネージャーですけど、この5人はPoppin, Partyのメンバーです。失礼だけど、名前を聞かせてもらえないか？ちなみに俺は森睦疾透だ」

?? 「あ、はい！私は朝日六花（あさひろつか）ついでいます！最近オープンしたライブハウス『Galaxy』でバイトしてて、羽丘学園の高等部1年に今日入学しました

！実はポピパの皆さんにお願いがあるんです！

有咲「私たちにお願ひ？」

六花「はい！『Galaxy』のオープン記念ライブに出ただけじゃないでしょうか

!!

りみ「え…？」

ポピパメンバー「「「えー！？」」「「」」

14話：新しい道しるべ

俺たちは今、とても驚いた状況になっている。始業式が終わってから部活動に顔を出してからポピパのメンバーのところに顔を出してから気分転換がてら散歩に出かけて朝日六花という女の子から『Galaxy』のオープン記念ライブに出ていただけないでしょうか!!」などといきなり言われたら困惑するだろう。会ってから初日にライブに出してほしいなんてまずないと思っでいい。で、今・・・

4月21日

【午後5時30分：散歩道】

六花「どう…でしようか？」

疾透「・・・とりあえず日程を聞かせてください、まずはそこからです。」

六花「実は・・・今日この後すぐなんです。他にも3組出演はオツケーをもらいましたので、ポピパさんが最後だったんです。」

疾透「この後すぐ・・・ですか。みんなはどうs・・・」

香澄「やりたいやりたいやりたいー！ライブがやりたいー！」

たえ「香澄がやりたいなら私もやりたいかな」

りみ「他にどんなバンドが来るのか楽しみだし私も・・・」

沙綾「私も賛成かな。他のバンドのライブを見て今後の参考になるし」

有咲「わ、私は他のやつらがやりたいって言うなら・・・別にいいけどな」

疾透「とまあこんな感じなんで今日はよろしく。えつと・・・なんて呼べばいい？」

六花「名字でも名前でも呼びたいように呼んでもらって構いません！」

疾透「じゃあ六花で。六花、とりあえず俺たちは場所を知らないから案内頼んでいいか？」

六花「わかりました！ご案内します！ちなみに他のバンドの順番はもうすでに決まってるのでポピパさんは最後になります！」

有咲「最後かー...香澄、緊張してテンパるんじゃねーぞ？」

疾透「早く行くぞ、お客さんは待ってられないからな」

そうして俺たちは六花の案内でライブハウス『Galaxy』に移動した。ちなみにポピパのメンバーは六花のことを『ロック』と呼んでいた。言い出したのは香澄で、『キララドキドキする！』だそう。俺的には『音楽っぽい呼び方』の方がしっくりくるんだが・・・香澄が言うんだからしょうがないな（諦）

【ライブハウス『Galaxy』】

疾透「入口が狭かったけど中に入るとそんなに狭くは感じないな。むしろ広すぎるって感じがする」

六花「そう言ってもらえて嬉しいです！今一組目が演奏してるので時間まで待っててくださいね。」

有咲「今日はありがとなロック。いきなり誘われたときはどうなるかと思ったけど」
 沙綾「ねえみんな、今演奏してるバンドの曲だけどさ・・・どこかで聞いたことない？」

りみ「そういえばそうかも・・・どこのバンドだったかな？」

たえ「うーん：私は覚えてないや」

香澄「私は知ってるよ！えーつと・・・どこだっけ？」

有咲「お前から覚えてねーのかよ！私は覚えてるぞ！」

疾透「俺も覚えてるけどな。沙綾とりみはすぐバンドの名前は出ると思ったんだけど」

などと他愛もない話をしていたら一組目のバンドが終わって楽屋に入ってきた。入ってきたのは・・・

疾透「やつぱり蘭たちAfterglowだったか。『Scarlet sky』お疲れ様。」

蘭「あれ、疾透とポピパじゃん。疾透たちも来たんだ」

疾透「ああ、ちよつと散歩してたら六花に会って有咲以外が意気投合して参加することになったんだ。道中で千聖さんに連絡を入れたんだけど今日は仕事があるとかで参加できないって言ってたからあと二組か・・・」

モカ「今日もひーちゃんはつぐってスカってたねー」

ひまり「モカー！やめてよー！」

巴「まあこれもアタシたちのいつも通りだな。偶にお客さんが乗ってくれることはあるけど」

つぐみ「それでも『偶に』だから・・・」

疾透「お前たちも苦労してるんだな・・・新しい学年になったんだから少し落ち着いてるかなって思ったんだけどやっぱりいつも通りだな」

蘭「モカが落ち着くなんてあると思う？」

疾透「ないな。」

蘭「でしょ？」

モカ「蘭ー？それってどういう意味ー？」

沙綾「モカらしいってことだよ。つてあれ？またこの曲は聞いたことあるんだけど・・・」

りみ「本当だね、しかもこの曲って・・・」

疾透「今度はあいつらなのか・・・」

香澄「誰誰!？」

疾透「なあ有咲・・・」

有咲「そうだな疾透。とりあえず言っとくか。」

疾透・有咲「「いい加減に覚えろ!!」」

香澄「わー! 疾透くんと有咲が怒ったー!」

などと言っていると演奏が終わって楽屋に走ってくる音がしたので俺はドアから離れた。そして入ってきたのは・・・

「こころ「六花! 終わったわよ! お客さんを笑顔にしてきたわ!・・・ってあら?」

疾透「おうこころおかえり。『えがおのオーケストラっ!』お疲れ様」

はぐみ「どうしたのこころん? わっ! (ドンツ) わー! はーくんとかーくんだ!」

香澄「こころんとはぐーだ! こころんたちも来てたんだね!」

「こころ「ええ! 六花に誘われたのよ!」

薫「私たちがこころの家に行った時に突如現れたんだよ。ああ、とても儚い出会いだったね・・・」

疾透「ところで花音さんと美s・・・ミツシエルはどこにいったんだ?」

「こころ「あら? さつきまで隣にいたのに二人ともどこに行ったのかしら?」

疾透「しようがないな・・・香澄たちはまだ出番じゃないし話したいこともあるだろうから俺が探してくるよ」

たえ「いつてらっしやーい」

そう言つて俺は楽屋を後にして花音さんと美咲を探しに行つた

疾透「一体どこに行つたんだ美咲と花音さん……つていつでも大体のところはわかるんだけどな、多分あそこだろ」

そう言つて俺が向かつたところは……

【男女共通更衣室】

疾透「やつぱりここだったか。美咲、花音さん。ここら達が探してたので楽屋に早く向かった方がいいかと」

美咲「あれ、よくここがわかりましたね疾透さん。」

花音「疾透くんが来てるってことは沙綾ちゃんたちも来てるってこと?」

疾透「そうですね、今頃は楽屋で香澄たちとおしゃべりしてるんじゃないでしょうか。んでもって有咲がめちやくちや苦労してるのが目に浮かぶ」

美咲「あー・・・確かにここらとはぐみと戸山さんがいるので騒がしいんでしょうね・・・」

疾透「というわけで楽屋にいつてここら達のお喋りを止めてくれると助かる。」

美咲「もちろんそのつもりですよ」

花音「疾透くんはどうするの?」

疾透「俺も楽屋に戻りますよ。やることないんで」

俺たちは楽屋へ戻った

【楽屋】

疾透 「ただいま」

りみ 「おかえり疾透くん。私たちの出番はもうすぐだよ」

疾透 「つまり今3組目が歌つてるところなのか。とういかこの曲・・・」

沙綾 「うん、あの曲だよ。つぐみたちのAfterglowからはぐみたちの『ハロー、ハッピーワールド!』と来たら・・・やっぱりこう来るよねって思ってたけど」

有咲 「今日はとことん会うなー・・・私も今日放課後に疾透たちのテニスの練習試合を見てただけどいつの間にか隣にいたし」

疾透 「俺は試合に集中してたし、あの後は無心で話しかけてただけどまたこうして会うことになるなんてな」

とかなんとか話したら演奏が終わって楽屋に入ってきたのは・・・

リサ 「あれ、疾透くんと香澄たちじゃん。」

疾透「どうもリサさん。2時間ぶりですね」

あこ「あ、疾透さんだ！今日の練習試合、とてもカッコよかったです！」

疾透「はは、ありがとうなあこ。といってもテニスを始めてまだ2年目なだけで」

紗夜「そうだとしても、1年であそこまで上達する人はいないですよ。疾透さんの努力の賜物です」

疾透「ありがとうございます紗夜さん。でもまだ練習を重ねないと……それにポピパの練習にも顔を出さないといけないので両立はなかなか難しいですね。」

友希那「そうだとしても、あなたの技術面に関しての飲み込みの早さは折り紙付きよ。今からでも勧誘したいわ」

疾透「すみませんが、その勧誘には乗れません」

友希那「わかってるわ、言ってみただけよ。」

香澄「あつ、そろそろ出番だよ！それじゃあ行ってくるね疾透くん！」

疾透「ああ、いつてらっしやい。頑張つて来いよ」

そう言つて香澄たちは楽屋を出てステージに行った……

紗夜「そういうえば疾透さん、新しいクラスはどうでしたか？」

疾透「俺はりみと沙綾、こころが同じクラスですね。結構がらりと変わりました。」

燐子「それと……風の噂で知りましたけど疾透くんと牛込さんつて……付き合い始め

たんですよね…?」

あこ「本当ですか疾透さん!」

疾透「誰が広めたのかだいたい予想はつきますけどその通りですよ。そういえばまだここにいるメンバーには言ってませんでしたね。といつても約数名すぐに言いふらしそうなのがいるんで言わなかっただけなんですけど」

はぐみ「えーっ!? そうなの!」

美咲「そういえばあたしもそれ聞きましたよ。まあうちにはこころとはぐみがいるのと言うのはやめてましたけど」

花音「いつから付き合い始めたの?」

疾透「去年の末ですね。クリスマスイヴだったんで忘れることなんてできないですよ」

ひまり「疾透ってロマンチックなことするねー! おめでどう!」

つぐみ「偶にでもいいのうちに二人で来た時はカップル割にしまするのでその時は来てくださいね。」

疾透「なんか改めて言われるとなんか恥ずかしいな・・・」

モカ「おやー? 照れてるー?」

蘭「モカ、からかうと今度ファーストフード店に一緒に行ったときに頼むハンバー

ガーの個数減らすから」

モカ「蘭がそう言うならやめようーっと」

疾透「こういう時の蘭って頼もしいよな……って、りみたちの演奏終わったみたいだぞ。」

俺がそういうと楽屋のドアが開いた

六花「Roseliaさん、Afterglowさん、ハロー、ハッピーワールドさん！ステージにどうぞ！皆さんでお客さんにご挨拶をお願いします！」

「こころ「もうそんな時間なの？それじゃあみんな行くわよ！」
はぐみ「うん！それじゃあまた後でねー！」

そう言って他のバンドメンバーはステージに向かった。

六花「疾透さんはどうしますか？」

疾透「俺も舞台袖に行くよ。」

六花「わかりました！案内しますね！」

疾透「ああ、頼む。」

そう言って六花は俺を舞台袖に案内してくれた。

【スタジオ内：舞台袖に続く通路】

疾透「：：（誰かに見られているな。もしかしてこの間みんなに内緒で路上でキーボードを演奏してた時にでも見られてたか？後でちよつと聞いてみるか）」

【『Galaxy』ステージ】

香澄「今日はとても楽しかったです！急にこのライブに誘われたときはどうしようかと思いましたが、こんなにくさんのお客さんがいてとても嬉しかったです！」

友希那「私たちのライブ、楽しんでもらえたかしら？」

蘭「あたし達もここで演奏できたこと、嬉しかったよ。」

こころ「みーんなどつてもいい笑顔ね！素敵だわ！」

紗夜「ここで、私たちRoseliaからお知らせがあります。」

友希那「今度、私たちRoseliaが主催のライブをすることにしたわ。日程はまだ決まっていないけれど、見に来てくれたら嬉しいわ」

香澄「私たちからもお知らせがあるよ！」

有咲「(香澄?!お知らせがあるなんて聞いてねーぞ?!)」

疾透「(嫌な予感しかしないんだけど・・・聞くだけ聞いてみるか)」

香澄「私たち、主催ライブをすることにしました！日程はまだ決まっていますが、時間がある人はぜひお越しください！」

疾透・有咲「(やっぱりかー!)」

六花「(Roseliaさんだけじゃなくてポピパさんまで主催ライブのお知らせですか!)」

「こころ「それじゃあ今日は……」

香澄「ありがとうございますー！」

【『Galaxy』外】

疾透「香澄お前な……よくあんなこと思いついたものだな。」

香澄「だって一回やってみたかったから！」

有咲「だからっていつて相談もなしに言うんじゃないー！」

りみ「主催ライブをするならセトリも考えないと……新曲も作らなきゃいけないね……」

沙綾「今日はもう遅いから明日から考えようか。今日はお疲れ様」

たえ「お疲れさま。」

疾透「悪い、ちよつと連絡はいつたからみんなは先帰ってていいぞ」

香澄「それじゃあまた学校でねー！」
そう言つて香澄たちはそれぞれの帰路についた・・・

疾透「ちよつとした演技だったけど香澄たちは気にする素振りを見せなかったな。さて・・・そろそろ出てきたらどうなんだ？そこにいるのはわかってるんだ」

俺がそういうと、路地裏から猫耳のヘッドホンをつけた少女が来た

??「あら、私に気付くなんていいSense（センス）ね。」

疾透「あれだけ俺のことは見てたら気づかない方が不自然だしな。とりあえず何の用か聞こう」

??「私の名前はチュチュよ。今私は最高のバンドを組むために最高のメンバーを集めているところなの。この間あなたの路上での演奏を聞いたわ。あなた、とても高い技術

を持つてるわね」

疾透「そいつはどうも。で、最高のバンドを組むための最高のメンバーを募集して
るって言ってましたね。今日はその勧誘ですか？」

チュチュ「ええ、その通りよ。ハヤト、私がプロデューズするバンドのメンバーにな
りなさい！」

疾透「お誘い、ありがとうございます。」

チュチュ「それじゃあ・・・」

疾透「すみませんが、その話は受けることができません。」

チュチュ「どうしてよ!？」

疾透「それじゃあ一つ質問します。『チュチュにとっての最高のバンド』って何なんだ
?」

チュチュ「何って：それは世界最高の音楽を奏するためよ!」

疾透「やっぱりそういう回答でしたか。ならなおさらその話は受けることができませ
んね。音楽に大切なのは『奏でる』だけじゃ足りません。『どうやってお客さんを楽しま
せるか』が大事なんです。それを分かってないのなら何度誘っても無駄ですよ。それ
じゃあ俺はこれで失礼しますね」

チュチュ「ちよっと!まだ話は・・・!どうしてなのよ!どうして私の言いたいこと

が理解できないのよー！」
(ドガアとこみ箱を蹴る音)

疾透 「『世界最高の音楽を奏でるため』……か。あいつらに言ったらなんて言うんだろうな……。まあ今度聞いてみるだけでもしてやるか。ちよつと小耳に挟んだけど足りないのはキーボードとギターか……」

さつきチュチュが言つてたことを思い出して俺は家に帰つた

15話：色々な意味で苦悩

突然 Galaxy のライブにポピパが参加してから1週間ほど経った。あのあとチュチュという女の子に誘われた際に少しの隙を突かれてなぜか連絡先が交換されていて、ちよくちよく『早く答えを聞かせなさい!』などと催促に近い感じで連絡が来ている。こういうタイプの人は返事するのもめんどくさいので既読スルーしてるが、電話がかかってきたこともあった。1週間ほど返事すらしていなかったのですが、少しだけ話した結果『来月に一緒に音を合わせるわよ!』と半ば強制参加させられる形になったので渋々行かないといけなくなった。ちなみにこの1週間と少しの間、Rose lia の主催ライブにポピパの面々は参加したが、友希那さんの言葉に香澄たちは言葉を失くし、主催ライブに対する緊張でいっぱいになっていた。それは俺も同じで、チュ

チュという女の子から勧誘されてから少しづつどんなバンドになるのかという考えが頭の中に浮かび、ポピパの練習の時にも考えていたら当たり前のように心配されたりした。それで今日は・・・

5月2日

【昼休み：花咲川学園中庭】

香澄「うーん・・・」

りみ「うーん・・・うん？」

沙綾「あはは・・・」

有咲「いや・・・無理じゃね？」

疾透「少しは頭をひねったほうがいいって言ったんだけどこれはひねると言うよりぶっ飛んでるな」

香澄がスケッチブックに書いていたのは、ポピパのメンバーが空を飛んでいる・・・よ

うに見える絵だった。去年から香澄は絵が下手だったので①年で上手くなっていったらうという考えはどこか行つた。

香澄「飛ぼうよ！」

有咲「できるか!! ライブハウス内で飛ぶとかぜってー無理！」

たえ「そうかな? 私はいと思うんだけど」

疾透「そもそも天井がそこまで高くないんだ、飛ぶとしても少しジャンプする程度に抑えないとライブとしてどうなんだ?」

りみ「そうだよ香澄ちゃん、私たちは普通の高校生なんだし・・・」

香澄「うーん・・・」

などと唸っていると・・・

こころ「かつすみー!」

2階の自分のクラスから飛び降りてこちらに側転で向かってこころがやってきた。本当にお前の運動神経どうなってるの・・・

こころ「やつほー!」

香澄「こころん!」

こころ「どうしたの? さっきからずーっとしかめっ面。全然笑顔じゃないわ!」

香澄・たえ「はっ!」

有咲「…」

「こころ「あら、どうしたのこれ？香澄が書いたのかしら？」」

香澄「うん！」

「こころ「ふむふむ・・・なるほど分かったわ！ちよつと待つててちようだい！」

「そういつてこころは校舎内に走つていった・・・数分後

「香澄・こころ「ハッピー！ラッキー！スマイル・・・イエーイ！」」

疾透「・・・」

「美咲「あの一・・・うちのこころが迷惑をかけてる最中・・・といえますか」

「疾透「いや・・・現在進行形で迷惑かけてるところだ・・・」

「美咲「あれ、何やってるの？」

「りみ「えつと、空を飛ぶ練習？」

「美咲「は？」」

「疾透「まあそんな反応だよな・・・」

「たえ「ライブはイメージトレーニングが大事・・・行つてきます」

「沙綾・りみ「行つてらっしやい！」

「有咲「アホが増えた・・・」

「疾透「それで美咲、こころはなんて言つたんだ？」」

美咲「えっと・・・」

「こころ」「私たち、近いうちにライブをするわ!といっても主催ライブじゃないから規模は小さい物よ」

美咲「とまあ・・・こんな感じでして。こころはクシエルにも来てほしいなーって言うてました」

疾透「(おいしいiiiiiiii!?なんで俺巻き込まれんのおおお!!)」

りみ「(あつ・・・)」

沙綾「クシエルって何?」

美咲「まあ・・・ハロハピの第二のマスクットって言った方が速いですかね。去年話し合
いに来てから見てませんけど」

有咲「へー、新しいマスクットがいるのか。メンバーじゃねーんだな」

美咲「これ以上メンバーが増えたらあたしの胃が持たないので助かってますけど
ね・・・ははは」

疾透「あまり増えすぎるとただのマーチングに見られるだろうからな(あんなのに
入ったら美咲の言った通り胃が壊れそうだし)」

美咲「(というわけで疾透さん、放課後はこころの家をお願いします)」

疾透「(わかつてるわかつてる・・・)」

りみ「(疾透くん、頑張ってね・・・)」

疾透「(結局は巻き込まれる側だからな・・・心配してくれてありがとうりみ)」

美咲「さて、と。こころ、ポピパのみんなの邪魔をしちやいけないから撤収—」

こころ「香澄—！みんな！ライブするから待っててね—！」

香澄「うん！楽しみにしてるよ！」

とまあ、こんな感じでハロハピメンバーはポピパメンバーに今度ライブをしようと
て校舎に戻っていった。こころを連れて行く美咲は一度こつちに顔だけ向けて『黒服の
人たちも放課後に来るように呼んでるので放課後に一度校舎裏まで来てください』と口
パクされたので放課後は一度校舎裏まで行くことになった。

【放課後：花咲川校舎裏】

疾透 「はあ……まさかまたこれを着ることになるなんてな……」

美咲 「あれからあたしがちゃんど話し合いに参加しましたからね……なんで今回は疾透さん……クシエルを呼んだんでしょう？」

疾透 「俺にもよくわからん……さっさと着替えてこころの家に行こう……」

美咲 「ですね……」

俺たちはミッシェルとクシエルに着替えてこころの家まで歩いていった……

【○○○○の家……○○○○の部屋】

「こころ「やつとみんな集まったわね！今日はライブについての話し合いよ！」

花音「ふえええ……ライブやるの……？」

はぐみ「さんせー！いつやるの!?はぐみは早くやりたいよー！」

薫「はぐみ、あまり焦ってもダメさ。ポピパの子猫ちゃんに笑顔を届けるライブだから向こうと連絡が取れないことにはどうしようもないよ」

はぐみ「そっかー」

クシエル（疾透）「それに、どんなライブをするのか決めないとダメじゃないかなー？こつちからライブをするのなら曲と場所が必要でしょー？」

ミツシエル（美咲）「そうだよー。まずは場所の確保をしないとー」

「こころ「場所ならもう決めてるわ！船の上よ！」

クシエル（疾透）「なるほどー、船の上かー（ちよつと待てえええ！なんで船の上でライブするんだよ!!）」

はぐみ「面白そう！やろうよこころん！」

「こころ「ええ！やりましょう！」

クシエル（疾透）「それでこころー？後ろに書いてある絵は何なのかなー？（ちよつと待て、あの絵見たことあるぞ…！おいまさか）」

こころ「いいところに目が付いたわねクシエル！あたし達ー、2曲目は空を飛ぶの！」
薫「・・・すまないこころ、もう一度言ってくれないか？」

こころ「あたし達、空を飛ぶの！」

薫「そうか・・・飛ぶのか・・・」

ミツシエル（美咲）「待つてこころ！薫さんは飛ぶのが苦手だから・・・」

薫「だがそれでポピパの子猫ちゃんが笑顔になれるのなら・・・私は喜んでこの身をささげよう・・・」

クシエル（疾透）「そ、そこまでしないでいいんじゃないかなー？（おいおい待つてくれまさか本当にやるつもりなのか!? いやこころたちのことだ、絶対にやる!!）花音さんも何か・・・」

花音「うん・・・やろう！」

クシエル（疾透）& amp; ミツシエル（美咲）「（ええええええ!!）ちよつと待つて考え直して花音さん！空飛ぶんだよ!!」

花音「うん・・・でも頑張ろう！」

クシエル（疾透）「（花音さあああん!?）」

「ここで、疾透がないけどどこに行つたのかしら？このライブには疾透がないと成功しないわ・・・」

クシエル（疾透）「は、疾透くんかー。呼んでくるよー（ちよつと待て!!俺もこれに巻き込まれんのかよ!!）」

はぐみ「行つてらっしゃーい！」

数分後・・・

疾透「クシエルとかいうのに呼ばれてきたけど・・・俺も必要なんだって？」

「こころ「えええ！疾透にはこの衣装を着てライブを手伝ってもらうわ！」」

「そう言つてこころが出したのは・・・漫画とかでよく見る怪盗が着てる服だった。まさかこれを生きてるうちに着ることになるなんてな・・・」

疾透「これを着て演奏してくれってことか？」

「こころ「いいえ違うわ！疾透にやってもらいたいのは・・・（ゴニョゴニョゴニョ・・・）」」

疾透「はあああああ!?それを俺にやれって!?とんでもない無茶ぶりだな!」

こころ「ならりみたち、Poppin' Partyの笑顔は諦めるしかないわね?」

疾透「(ぐっ……!りみと付き合ってることをこんな形で使われるなんて……!しょうが

ない、一肌脱ぐか……)……わかったよ、やればいいんだろやれば!」

こころ「いい返事ね!疾透、さっそく香澄たちに連絡を入れてちようだい!」

疾透「わかったよ……帰ったら連絡入れるから」

こころ「それじゃあ今日は解散よ!みんなお疲れさま!」

そういつてみんなは部屋を出て行った……

【こころの家からの帰り道】

疾透 「はあああああ．．．疲れた．．．」

美咲 「疾透さん．．．ごめんなさい、こんなのに巻き込んだりして．．．」

疾透 「こころだからしょうがないけど、次は絶対に断らないと俺の胃が死ぬ．．．」

花音 「ふえええ．．．疾透くんごめんね．．．」

疾透 「もう絶対こういうことに巻き込まれたくないです．．．さて、と。香澄たちに連絡回さない」と．．．

美咲 「なんかすいません疾透さん．．．」

疾透 「慣れたくないけど慣らさないとどうにもならないからな．．．」

そうやって俺はポピパメンバーにいつが空いてるか連絡を取って、3日後の夜なら空いてるって連絡が来た。

疾透 「3日後なら空いてるってよ。こころ達に連絡を頼んだ。」

美咲 「了解。それじゃあ3日後にまた」

疾透 「ああ．．．」

そうやって俺たちは別れ、家に戻った後は速攻で寝た。

5月5日

【午後7時：駅前】

香澄「疾透くん、どうしたんだろう？ 駅前に集合って言われたのに肝心の疾透くん本人が来てないよ？」

たえ「そういえば電車にも乗ってなかったね」

りみ「疾透くん、どこに行ったんだろう…？」

沙綾「空いてる日にちだけ聞いて疾透くんが来ないってことはなかったからさすがに来るんじゃない？」

有咲「あれ？なんか向こうから船が来るんだけど…って目の前に止まったぞ？」

黒服の人たち「Poppin, Partyの皆様、ようこそお越しくださいました。」

香澄「あつ、黒服の人たちだ！この船は何ですか!？」

黒服の人たち「こころ様の船、『スマイル号』です。」

たえ「おー、これがこころの船なんだー」

有咲「何感心してんだ！まさか・・・今日のライブってここですか!?!」
 黒服の人たち「それではご案内します」

【スマイル号：メインホール】

香澄「とりあえずここまで案内されたけど何が起きるんだろう？黒服さん、何か・・・」
 (バチン！)

「こころ・はぐみ」「lady s & girls!」

ミッシェル(美咲)「ようこそスマイル号へ」

「こころ」「『ゴーカ！・ゴーかい！ファントムシーフ！』さあ出番よ怪盗さん！あなたにとつての大事なものを盗んで来てちょうだい！」

(バチンと証明が落ちる)

?? 「きやつ!」

(明かりがつく)

有咲 「な、なんなんだ一体…みんな無事か!」

沙綾 「私は大丈夫…」

香澄 「私もなんともないよ!」

たえ 「オツちゃんも私もちゃんというよ。ところでりみは?」

有咲 「は? つてまさかさっきの停電でりみが連れていかれたのか!?! こうしちやいられ
ねー! 早くりみを助けに行くぞ!」

こころ 「制限時間はこの曲が終わるまでよ! それじゃあ始めましょう!」

【1分後：スマイル号甲板】

有咲「はあ、はあ……とりあえず追いついたな……お前！りみを返せ！」

怪盗（疾透）「そんなにこの娘が大事か？ならば取り返してみせろ」

有咲「言われなくても！お前たち！あいつを囲め！」

香澄「サー！イエツサー！」

怪盗（疾透）「（お前はどこの軍人だどこの）ほう……4人がかりで私を捕らえられるとでも？」

有咲「当たり前だ！お前ら、一斉に飛びかかるぞ！」

たえ「怪盗さん、覚悟！」

（ドンッ）

有咲「いったー！？お前らどこ見てんだよ！」

沙綾「おかしいなあ……私はちゃんと怪盗めがけて向かっていったんだけど……綺麗に頭をこつつんこしちやっただね……いたた」

有咲「おい怪盗！どこに行った！」

怪盗（疾透）「私はここだ。残念ながら捕まえることはできなかったみたいだな」

有咲「まだ制限時間まで問題ねー、さっさと追いついて捕まえるから待ってろ！」

怪盗（疾透）「フツ、だが次にいるところまでは時間がかかるだろう……メインホー

ルにて待つ。そこで勝負といこう」

有咲「おい待て……！逃げ足はえーな……」

沙綾「それよりもりみとさっきの怪盗、メインホールだったつけ。早くいかないと……」

【メインホール】

有咲「やっと……追いついた……！」

香澄「怪盗さん！りみを返して！」

怪盗（疾透）「そう焦ることはない。一つゲームといこう、それで私に勝てば返してやろう。だが勝てなかつたら……」

たえ「勝てなかったら？」

怪盗（疾透）「そうだな．．．この娘の心をいただくとしよう。」

沙綾「心って．．．どういうこと？」

怪盗（疾透）「さて、どういうことだろうな．．．？ではそろそろゲームを始めようか。」

有咲「一体どんなゲームだよ．．．」

怪盗（疾透）「ルールは簡単。私が今欲しいものを一人ずつ挙げ、一つでも正解したら返してやろう」

香澄「え？それだけでいいの？」

怪盗（疾透）「さて、答えることができるかな？」

香澄「答えられるよ！怪盗さんが今欲しいのはりみりんの心だよ！」

怪盗（疾透）「もしやさっき言ったものが欲しいものだと思ったか？浅はかなり。」

たえ「じゃあ．．．ウサギさん？」

怪盗（疾透）「それも違う。さて．．．あとの二人はどう答えるのかね？」

沙綾「有咲．．．わかる？」

有咲「まったくわかんねー．．．せめてあいつの正体がわかれば．．．」

沙綾「うーん．．．ちよつと揺さぶりかけてみるから間違えたら有咲お願い。それじゃ

あ次は私だよ。私からの答えは『音楽』だよ」

怪盗（疾透）「さすが沙綾だな。俺の正体に気が付き始めてるか……。近いが正解には至らん」

沙綾「そつか……。じゃあ有咲、あとはお願い」

有咲「お、おう……。やべえ、まったく思いつかねー……。どうすりゃいいんだよ……。」

沙綾「（有咲、多分あの怪盗の正体は疾透くんだよ。）」

有咲「（はあ!?!何言ってるんだよ!）」

沙綾「さつき、音楽って言葉に近い答えって言ったでしょ？最近の疾透くん、元気ないじゃん。この間チラツと携帯の画面見たけど、どうやらバンドに誘われているみたい。それで居場所に困ってるんじゃない？だから多分答えは『居場所』なんじゃない?）」

有咲「（なるほどな……。当たってなかったら今度沙綾の所のパン、タダで貰うからな?）」

沙綾「（それでいいよ。買ってくれるのならうれしいし）」

怪盗（疾透）「さて：相談は終わりか？そろそろ答えてもらおうか。私の今一番欲しいものは何だ？」

有咲「……。場所」

怪盗（疾透）「はつきり答えてもらわないと不正解にするぞ?。」

有咲「だーうつせー！答えりやいいんだろ！『居場所』だ！」

怪盗（疾透）「……正解だ娘よ。では約束通りこの娘は返そう。ではさらばだ」

有咲「おい待て！……ってもう行つちまったな……逃げ足が速えー……っせ
んなことよりもだ！」

香澄「りみりん！大丈夫!？」

りみ「私は大丈夫。でもさっきの人……」

沙綾「りみもさっきの人、誰だかわかったみたいだね」

りみ「うん。疾透くん……だよね？」

沙綾「うん、多分そうだよ。それにしても結構動いたね……疲れちゃった。」

香澄「私も——！」

黒服「左様でございますか。ではこちらを」

有咲「うわあ!?!どつから湧いて出たんですか！」

黒服「こころ様より、『一緒に夜ご飯でも食べましょう!』と伝言を預かっております」

香澄「ご飯?!食べます食べます！」

香澄たちは食堂へ向かった

【食堂】

香澄 「ごっはん、ごっはん！」

疾透 「お疲れさん」

たえ 「え？疾透くん？なんでここにいるの？」

疾透 「なんでって、今日はずっととは言わないけど一緒にいただろ？」

香澄 「もしかしてあの怪盗の正体って疾透くん!？」

疾透 「今更か」

りみ 「疾透くん、お疲れ様・・・」

疾透 「りみもすまないな、こんなことに巻き込んで・・・」

りみ 「ううん、大丈夫だよ。（お姫様抱っこされてたのは恥ずかしかったよ・・・!）」

有咲 「ったく、一言言えつての・・・」

疾透 「悪い、どうやったらお前たちを笑顔にできるのかずっと話し合ってたんだ。」

沙綾 「確かにそれは隠したくもなるよね・・・」

とまあ、今日このライブに至るまでの話をした。この間美咲が言っていたクシエルの正体が俺だと知ったときはさすがに驚いていた。その帰り道・・・

【午後9時：帰り道】

疾透「・・・いつまで俯いてるんだりみ。だからさつきは悪かったって・・・」

とまあ、さつき『スマイル号』でやったことがとても恥ずかしかったみたいで、こんな調子で覗き込もうとするとそっぽを向いたりしている。

りみ「ううー・・・めっちゃ恥ずかしかったよ・・・」

疾透「……本当に悪い。まさかそんなに顔を赤くするまで恥ずかしかったなんて……」
りみ「……」

疾透「…(き)、気まずい……!」

りみ「疾透くん……?」

疾透「な、何かなりみ……?」

りみ「……私だけ恥ずかしい思いするのは不公平だよね?」

疾透「……何が言いたいんだ?」

りみ「……疾透くん、ちよつと屈んでくれないかな? 疾透くんの方が少し身長が高いから届かなくて……」

疾透「俺の顔に何かついてるか? ……こんな感じでどうだ?」

りみ「そのままそのまま……えいっ!」

りみがそう言うとき、俺の唇にキスをしてきた。

疾透「っ!」

りみ「えへへ、これでおあいこ……だね」

疾透「りみって本当に不意打ちが得意だよな……」

りみ「疾透くんもそういう割には不意打ち得意だよね?」

疾透「不意打ちされるのは苦手なんだよ……まあ、されてばかりじゃ悔しいし」

そう言つて俺はりみにお返しするように抱きしめながらキスをした

りみ「んっ……えへへ、不意打ちつてわかつてても疾透くとキスするのめっちゃ嬉しい……」

疾透「……俺もだ。つと、今日はここまでだな。また学校でな、りみ」

りみ「うん、また学校でね。疾透くん」

そう言つて俺たちは別れてそれぞれの帰路についた……

16話：選択と試み

ハロハピのライブと呼んでいいのか豪華客船での一連の出来事があってから日にちが経った。今日は休日、特に何もすることがなくて暇を持て余している。ポピパは練習があるらしいが、有咲から『最近は私たちのために頑張ってくれてるから今日は休め！』と連絡があつたから今日は家でゆっくりしている。

5月9日

【午前9時：疾透の部屋】

疾透「あー、今日は久しぶりの平和な一日だな．．．この間はこころの提案に巻き込まれてとんでもないことになったし、その前だつて色んなことあつたしな．．．偶にはこういう一日もいい．．．」

（ピンポーン）

疾透「．．．ん？誰か来たのか？こんな朝早くに．．．」

（ピンポーンピンポーンピンポーン）

疾透「あー五月蠅いな．．．一体誰なんだ．．．」

（ガチャ）

疾透「こんな朝早くに誰ですか．．．つて日菜さん？」

日菜「疾透くんおっはよー！」

疾透「今日は休日だっていうのにこんな時間から何の用なんですか？」

日菜「えつとねー、今日は仕事もなくて疾透くんと一緒に何かしたいなーって！」

疾透「何かって言っても特に俺の家には何もありませんよ？」

日菜「じゃあ散歩に行こう！」

疾透「えつと・・・俺に拒否権というものは」

日菜「ないよ？」

疾透「デスヨネー（さらば俺の平和な一日・・・）」

こうして俺の平和な一日は日菜さんによって変えられ、忙しい一日となった・・・

日菜「そういえば疾透くん、最近りみちちゃんとはどう?」

疾透「どうって、何事もなく順調に付き合ってますよ。まあこの間ちよつとしたハプニングに巻き込まれたんですけどね・・・あはは」

日菜「それってどんなの?」

疾透「話すと長くなりますけど、カクカクシカジカクラゲクラゲ・・・」

日菜「へー、そんなことあったんだ。あ、それでね疾透くん!」

疾透「何です?」

日菜「今度、私たちがライブに出るから見に来てよ!」

疾透「・・・はい?」

事は数日前に遡る・・・

5月7日

【事務所】

彩「ごめんみんな！バイトが長引いちやつて…」

千聖「そんなに走ってこなくても今日は仕事はないから大丈夫よ？それよりも、髪がぼさぼさになってるから早くこっちにいらっしやい、とかしてあげるから」

彩「え!?そんなに髪乱れてる!？」

麻弥「彩さん、バイトお疲れ様です。」

彩「みんな、差し入れ持って来たからみんなで食べよう!」

イヴ「ありがとうございますアヤさん！かたじけないです!」

彩「それで千聖ちゃん、話って何？」

日菜「ふっふっふ…」

イヴ「ではこちらを刮目してください!」

彩「これって：『World idol Festival』!?これに出れるの!?」
千聖「ええ、先日これに出てみないかってオフアーが来たのよ。大きなライブイベントの、ね。」

そして今に至る・・・

日菜「つてことがあつてねー♪」

疾透「なるほど・・・で、そのライブイベントに見に来てほしいと?」

日菜「うん!」

疾透「ちなみにいつなんですか？」

日菜「ちょうど来週だね！」

疾透「んー…まだいけるって決まったわけじゃないので前日に連絡入れますね。あと

このことはポピパのメンバーには・・・」

日菜「まだ言っていないよ。だから有咲ちゃんたちに伝えるかどうかは疾透くん次第かなー」

疾透「わかりました。それじゃあ後でこのことは伝えておきますね。」

日菜「オツケー！それじゃああたしはここで！」

疾透「・・・はい？」

日菜「ごめんね、おねーちゃんから連絡来て今から帰らないと・・・」

疾透「そうですか。それじゃあここでお別れですね。」

日菜「まったねー！」

そう言つて日菜さんはスキップしながら家に戻っていった・・・

疾透「パスパレのライブイベント・・・なあ…」

俺はまだ悩んでいた。結局ハロハピのあの事件からずっとチュチュという子にバンドに誘われて、少しずつ興味がわいていた。何せバンドなんて組んだこともないし、路上で演奏する程度のもだったからな・・・みんな演奏することなんてポピパのみならず音を合わせる程度だったし、少しの期間だけなら入ってもいいかも…って思ってた。などと考えていると…

チュチュ「あら、ハヤトじゃない。あれから考えはまとまったかしら？」

疾透「…誰かと思っただらチュチュか。」

チュチュ「どうかしら？私がプロデューズするバンドのメンバーになる気は」

疾透「ちよつとききまでそのことについて考えていてな。まあ…ちよつとだけなら顔を出しているって思ってる。それと、一つ質問いいか？」

チュチュ「何かしら？」

疾透「今足りないパートは何だ？」

チュチュ「あれからメンバーを勧誘して、後はギターだけかしら。ハヤト、あなたギターはできる？」

疾透「ちよつと他のバンドのマネージャーをやつてて、そこで少しだけど音を合わせたりとかしてたな。まだ感覚を掴んだだけでそこまでうまくはないけどな」

チュチュ「そう、ならなおさら来てもらおうかしら。最初は誰にでも慣れは必要だから、ギターと私がプロデュースするバンドのことを知ってもらいたいものね。それじゃあ今から行きましょうか」

疾透「今から、か？」

チュチュ「早くバンドを組んで本格的な練習を重ねてライブをしたいのよ。」

疾透「まあ、その気持ちはわかるが……」

チュチュ「それじゃあ早く行きましょう。時間も押してるし」

チュチュがそう言つて俺はチュチュについていった……

【アパート】

チュチュ「みんな、新しいMember候補を連れてきたわよ。」

疾透「どうも、森睦疾透です。チュチュに連れられてここに来ました」

??「あなたがチュチュ様が言ってたハヤトさんですね！私はパレオと言います！」

疾透「パレオ……か、担当パートは何だ？」

パレオ「私はキーボード担当です！昔からキーボードを演奏してたので！」

疾透「なるほどな。」

??「次は私だな。私は佐藤（さとう）ますき、ドラムを担当させてもらっている」

疾透「佐藤……ますき……？もしかしてますきか？」

ますき「ああ……つてまさか疾透か？何年ぶりだ？」

疾透「確か……4年ぶりだったか。」

チュチュ「あら、あなたたち知り合いなの？」

疾透「まあ、こつちに引越してくる前にできた友達だよ。ただ中学からは別々だったし本当に久しぶりだな。」

ますき「あれからお前は どうして たんだ？」

疾透「普通に吹奏楽部でピアノを演奏してたよ。で、今はこことは別のバンドのマネージャーをしてる。」

ますき「なんというか、疾透も変わったな。前までは『面倒事は嫌だ』とかで勉強とかを見るのは嫌がってたのに」

疾透「まあ、色々あつてな。」

ますき「ちなみに私はドラム担当だ。元からこういう打楽器は好きだったからこういうのがあつて助かった」

疾透「まあ、改めてよろしくな」

??「最後は私だな。私は和奏（わかかな）レイ、担当パートはベースとボーカルだ」

疾透「ベース兼ボーカル・・・？珍しいな。俺が見てきたバンドはボーカルだけとかギター兼ボーカルとかいたんだけど」

レイ「ギターは幼馴染がやっていてね、ミュージックスクールでは一度私がベースを使つて一緒に演奏したこともあつて、それからずっとベースの技術を磨いてきたんだ」

疾透「へえ：まあ歌うこと自体は難しくないしいのかもな。よろしく、レイ。」

レイ「ああ、こちらこそよろしく疾透」

チュチュ「自己紹介は終わったみたいね。それじゃあまずはハヤトがこっちにいると

きの名前でもきめようかしら」

疾透「『こつちにいるときの名前』?」

チユチユ「ええ。マスクは『マスキング』、レイは『レイヤ』。パレオはそのままパレオって呼んでるわ。ハヤトはそうね・・・『ハヤブサ』なんてどうかしら?」

疾透「ハヤブサ：ね。別にいいよ、呼びたいように呼んでもらうって。ただ日常で出くわした時は普通に下の名前と呼んでくれると助かる。」

チユチユ「それじゃあ、よろしくハヤブサ。後は・・・あなたのギターの腕前を見せてもらおうかしら。」

疾透「俺はギターを持ってないからここにあつたりは・・・しないか?」

チユチユ「あるわよ。ここは私のアパート兼練習場所だから一通り楽器はあるわよ」

疾透「そうなのか、それじゃあギターを借りるけど・・・」

チユチユ「ハヤブサなら・・・このギターがいいかしら。」

チユチユが持つて来たのは、紺色のギターだった。

疾透「こんな色のギターまであるのか。というかここにはどのくらい楽器があるんだ?」

チユチユ「一応ギターとベースは2つずつかしら。後はひとつずつね」

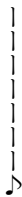
疾透「そんなにあつて費用とか大丈夫なのか・・・?」

チュチュ「私は飛び級でこっちの高校に来てるのよ。特待生とかでその分優遇されるから学費はカットされてるわね」

疾透「飛び級って…つまりチュチュは俺より年下なのか。」

チュチュ「そ、そんなのはどうでもいいでしょ！早くハヤブサのギターの腕前を見せなさい！」

疾透「はいはい、言われなくても見せますよ。ちよつとチューニングをして…よし、こんな感じな音で大丈夫かな。それじゃあ・・・」



疾透「まだギターを使わせてもらってから経験が浅いからな・・・これくらいのことしかできないけど」

チユチユ「・・・いわ」

疾透「え？」

チユチユ「ハヤブサ、あなたとてもすごいわ！まだ始めて時間が浅いって思えないくらいね！これなら私がプロデュースするバンドのメンバーになってほしいわ！」

疾透「はあ・・・なるほど、ありがとうございます。ただ、返事は保留させてください。やっぱりまだ決断ができません。俺はマネージャーもやってますし、こっちはバンドの練習もするとなると相当大変なスケジュールになりますし、向こうのバンドは日程は決まっていますが主催ライブをするって言ったので、そっちも考えないといけませんし・・・」

チユチユ「そう、なら時間がある時にこっちに来てくれて構わないわ。」

疾透「すみません、そうしてくれると助かります。ところで、バンド名って決まってるんですか？俺を仮メンバーに換算するとして、これで5人ですし」

チュチュ「そうね・・・『RAISE A SUILEN』なんてどうかしら？」

疾透「『RAISE A SUILEN』・・・ですか。いいかもしれませぬね。ただ俺が来るのは本当に偶になるのでその時はどうするんです？」

チュチュ「その時はハヤブサを除いたメンバーでやるから大丈夫よ。ハヤブサはハヤブサのやりたいようにすればいいわ」

疾透「すみません、練習に来る時間帯が曖昧になってしまつて。今日はこれからどうしますか？」

チュチュ「そうね：今日は解散しましょうか。今日はハヤブサのギターの技量を見せてもらうことが目的だったのだから」

疾透「そうですか、それじゃあ今日は失礼します」

チュチュ「あらそう？今日はお疲れさま。今度練習に来る時までに腕を上げておきなさい！いざれRAISE A SUILENのリードギターになつてもらおうわよ！」

疾透「前向きに検討しておきますね、それじゃあお疲れさまでした」

そうして俺はRAISE A SUILENの練習場を後にした・・・

【帰り道】

疾透「はあ・・・なんだか安請け合いしてしまったか？俺はポピパのマネージャーで忙しいのに：：こうなると体力をもっとつけないし、RAISE A SUI LENもPoppin' Partyも両立しなきゃいけないしな・・・さて、バイトの給料も随分たまってきたしギターを買った方がいいかもな。つと、『江戸川楽器店』か。ここならいいギターとかありそうだし買った方がいいかもな・・・」

【江戸川楽器店】

疾透「えつと・・・俺に合いそうなのは・・・」

麻弥「何かお探しですか？」

疾透「あれ、麻弥さん？麻弥さんこそどうしてここに？」

麻弥「日菜さんから『るんつてくる新しいピック買ってきて！』って連絡が来て今ここでピックを探してるんです。そういう疾透さんだつてここに顔を出すなんて珍しいですね」

疾透「まあ、ちよつと成り行きで今日結成されたバンドに顔を出すことになって、ここでギターを担当することになってギターを探しに来たんです。といつてもまだ返事は出してないので仮メンバーですけど」

麻弥「なるほど・・・市ヶ谷さんから聞きましたけどPoppin' Partyのマネージャーになってるんですね。だからマネージャーとバンド練習の両立をするこ
とになったんですね・・・」

疾透 「はい、そういう事です・・・」

麻弥 「ギターっていつでもその人の性格とかで変わるのでそこは疾透さんに合ったよ
うなギターがいいですね」

疾透 「といっても、俺に似合うようなギターなんて俺一人じゃ・・・あつ」

麻弥 「どうしたんですか？」

疾透 「麻弥さん、一緒にギター探しに付き合っただけませんか？麻弥さんってス
タジオミュージシャンだったんですよね？ならギターとかに詳しいんじゃないですか
？」

麻弥 「おお！それならお任せください！」

こうして俺は楽器店で麻弥さんからギター選びの基本をレクチャーしてもらって、少
し時間をかけてからギターとギターケースを購入した。ギターのカラーは水色で、ちよ
うど隣にあった隼（はやぶさ）がモチーフとなったストラップがあつたのでギターケー
スに付けた。さすがにギターケースだけだと誰のかわからなくなるし、RAISE A
SUILENで付けられた俺のバンド内での呼び方が少し気にいったっていうのも
あつた。

疾透 「今日はありがとうございました麻弥さん。わざわざギター選びに付き合っ
てらつて。」

麻弥「いえ、ジブンもお目当てのものが買えたのでよかったです！それじゃあジブンはそろそろ帰りますね、お疲れさまでした！」

そう言つて俺たちは別れてそれぞれの帰路についた。

結局俺はパスパレのライブを見に行くことはなく、RAISE A SUILENの練習に付き合っていた。あれから俺は『Ruby & Sapphire』でギターの練習をしていたりして、RAISE A SUILENのメンバーからも評判がよくなって

いた。

：だが本当にこのまま俺はRAISE A SILENのメンバーになってもいいのだろうか？まだ他のメンバーには俺がりみと付き合っていることは教えてない。俺はポピパのマネージャーとしてPoppin Partyの主催ライブを考えないといけないんだ・・・ここで俺がますき達のバンドに入ったらそれはポピパのマネージャーをやめなきゃいけないくなる。俺は・・・どうすればいいんだ？

17話：艱難辛苦

俺がRASの練習に顔を出してさらに日が経った。Poppin' Partyのメンバーには『ちよつと用事がある』って言つて誤魔化してはいるけど、それでも4日1日はRASの練習に顔を出している。沙綾やりみはあまり深く聞かないで助かつてるけど、香澄やたえはしつこく聞いてくるから有咲が毎回止めにかかつてくれなければ口が滑つて喋っていただろう…本当に有咲には助けられてばかりだから今度何か奢つてやるか……

それで今は……

6月10日

〔午後12時：花咲川学園2ーB〕

疾透「ふうー・・・今日の授業はなかなかハードだったな・・・まさか1時限目から小テストが連続で続くんなんて・・・まあ数日後には帰ってくるし、赤点だったときとかの追試がないから苦にはならないんだけど」

りみ「そうだね・・・香澄ちゃんたち大丈夫かな・・・？」

沙綾「時間がある時に疾透くんが勉強を教えてくれたみたいだし大丈夫なんじゃない？」

こころ「それなら香澄は大丈夫ね！そろそろお昼にしましょう！」

疾透「そうだな・・・お腹が減ったからそろそろ昼ご飯を食べに行くか。場所はいつもの屋上でいいよな？」

りみ「うん。誰か誘う？」

疾透「いつものメンバーばかりじゃ話すことが決まってるし偶には誰か別の人を誘う

か。」

沙綾 「それ賛成！誰を誘う？」

疾透 「うーん…あの人とあの人、あとはあの人なんてどうだ？」

りみ 「確かにそのメンバーなら話がいろいろできそうだからいいかも…」

沙綾 「それじゃあ連絡まわそっか。」

【花咲川学園屋上】

美咲 「どうも、疾透さん。皆さん連れてきましたよ」

疾透 「ありがとな美咲。偶には別のメンバーで食べようかってこっちで話してたか

ら」

花音「誘ってくれてありがとう疾透くん。このメンバーで昼食ってなんか新鮮だね」
彩「そうだね。私と花音ちゃんはよく一緒に食べるけど疾透くんやりみちゃんたちとはあまり食べないからなあ……」

りみ「それじゃあ早く昼食を済ませちゃおつか。」

少年少女食事中……

疾透「ごちそうさま」

沙綾「今日も自分で作ってきたんだね疾透くん」

疾透「一人暮らしにも結構慣れてきたからな。りみは最近どうだ？」

りみ「偶に失敗しちゃう時もあるけど、最近はうまく作れてるよ。」

疾透「そうか、今度俺の分を作ってもらいたいな。逆に俺がりみの分を作ってみるっ

てことで」

美咲「2人とも本当に仲いいよね。」

疾透「まあ付き合ってるわけだし、偶にりみがお菓子とか作ってきてくれたりするしな。おかげでポピパのメンバーはりみの作ったお菓子を好評してるし俺も食べておいしいって思うし、ありがとりのりみ」

りみ「また今度新しいお菓子里に挑戦しようかなって…」

花音「りみちゃん、本当に甘いものが好きなんだね。」

彩「花咲川は疾透くん以外女の子だし、女の子は甘いものが好きだからね。」

疾透「いや俺も普通に甘いもの好きですけど。偶に沙綾の所でチョコチップパン買ってますし、偶にRASの練習にだって…」

りみ「えっ?」

疾透「(ああああ!俺の馬鹿ああ!なんで自分から暴露してるんだよ!!)」

沙綾「疾透くん、RASって何?」

疾透「はあ…まあ隠しておく意味もないし言うよ。俺は偶にRAISE ASUI LENってバンドの練習に顔を出してるんだよ。」

彩「いつから?」

疾透「大体1ヶ月くらい前ですね。ただバンドに誘われたのはGalaxyでのライブが終わった後だったか」

りみ「あれ？もしかしてその時って…」

疾透「ああ、あの時は悪かった。携帯を見たのはただの演技で、心配をかけたくなかったからみんなを先に帰したんだよ…」

沙綾「一言言ってくれたらよかったのに。それで… R A I S E A S U I L E N だっけ？そこに入ることにしたの？」

疾透「いや、入るかどうかは検討中だ。入るにしてもポピパのマネージャーはやめること必至だろうしな…でも昔馴染が入ってるバンドだし、支えてあげたいんだけど…ポピパにはりみもいる。だから今俺はそこで悩んでるんだ」

花音「ふえええ…疾透くん大変そう…」

疾透「実際大変ですよ…とことん練習に付き合ってほしいって言われたときは4時間くらいぶつ通しで演奏したりするな…」

彩「疾透くんの R A I S E A S U I L E N での担当パートって何？」

疾透「ギターですよ。ちなみにボーカルはベースの人がしてるので」

たえ「ねえ、それって誰？」

疾透「ああ、レイって言って…ってたえ、お前いつからそこにいた!？」

たえ「え、さつきだけど？それとさつき、レイって言った？」

疾透「ああ、言ったけど…それがどうしたんだ？」

たえ「もしかして、本名って和奏レイじゃない？」

疾透「ああ、それも言ってたな。」

たえ「そっか、レイってこっちに戻ってきてたんだ。」

疾透「ん？たえてってレイのこと知ってるのか？」

たえ「うん、ちよつとミュージックスクールで一緒の時があつて、その時に話したんだよ。」

疾透「なるほど、そんな事があつたのか。」

たえ「それじゃあまたねー」

そういうとたえは屋上から出ていった

疾透「はあ…本当にたえは学園内じゃ神出鬼没だな。えつと…どこまで話したか」
彩「えつと、昔馴染がいたつてところだね。」

疾透「ああ、ますきつていって、ドラム担当なんだよな。小学6年生の時にちよつと話して仲良くなったのはいいけどこっちに引越す際に別れちゃつてな。で、この間久しぶりに会ったけど元気そうだったから何よりだよ」

花音「ドラムかあ…今度教えてもらおう事つてできるかな？」

疾透「いや、ますきも俺と一緒に説明は下手な部類に入るから教えてもらおうことはたぶんないと思います」

花音「そっかあ…」

(ヒロヒロリン)

疾透「ん？ごめん、ちよつと失礼するぞ」

りみ「もしかしてRASの人？」

疾透「まあそんな感じだ」

沙綾「私たちはもう少しお話してるから大丈夫だよ」

疾透「悪いな沙綾」

そう言つて俺は屋上を後にした

疾透「それで、話って何だチュチュ？」

チュチュ「ハヤブサ、今度のデビュラーイブだけどあなたに出てほしいのよ。」

疾透「もうデビュラーイブなのか？日にちはもう決まってるのか？」

チュチュ「ええ。8月21日とそこそこ遠いけど、その日は他のみんなも大丈夫って言ってたから後はハヤブサ次第といったところかしら」

疾透「まあ、その日なら大丈夫そうだな。何か急なことに巻き込まれなければ、けど・・・その時にでもメンバーになるかどうかの返事をする感じでいいか？一応MCでもそのように言ってくれると助かる」

チュチュ「OK。それじゃあ今日は暇かしら？」

疾透「まあ今日は暇だな。そっちにギター持ってくればいいんだな？」

チュチュ「Excitely。それじゃあ放課後にまた会いましょう」

【放課後】

りみ「疾透くん、この後時間ある？ポピパのみんなでお買い物に行こうって話になってるんだけど・・・」

疾透「あー、悪い。今日は予定あるんだ。」

沙綾「もしかしてRASの練習とか？」

疾透「そんな感じだ。今度のデビューライブに出てほしいとかでその話し合いだ」

沙綾「そっか。それじゃあまた今度みんなの時間が空いた時にでも買い物しよっか。」

疾透「悪いな、あとこのことは・・・」

りみ「みんなには秘密、だよな？大丈夫だよ」

疾透「何から何まですまないりみ・・・」

そうやって俺は教室を後にしてRASのメンバーが待ってる『Ruby&Sapphire』に向かった。りみたちはできるだけ香澄たちにGalaxyで練習するって言うってたので多分しばらくは大丈夫：だろう。

【午後4時30分：『Ruby & Sapphire』スタジオ内】

チュチュ「やっと来たわね、ハヤブサ！」

疾透「これでも急いできた方なんだけど」

パレオ「チュチュ様、これで全員揃いました！」

チュチュ「さて、本題に入るわよ。今度デビューライブをすることになったわ！と

いつでも他の主催ライブに入れてもらう形だから演奏できるのは1曲だけだけど」

ますき「1曲だけ演奏できるだけでも構わない。」

レイ「ますきの言うとおりだ。曲は『R・I・O・T』しかないがそれで行くしかないだろう」

チユチユ「そうね、まだ私たちはバンドとしては成り立っていないから一曲だけ作れば上等よ！」

疾透「まあ・・・チユチユの言う通り俺はまだ仮メンバーですし。ライブが終わるまでに答えは出しておきますよ」

チユチユ「さて、それじゃあ練習するわよ！」

R A S 練習中…

チユチユ「そろそろ時間かしら。今日は解散よ！」

疾透「お疲れさまでした。」

ますき「なんだ、今日は帰る準備が速いな疾透」

疾透「ちよつと待ち合わせしてな。ここの練習が終わったら友達の家泊まること

になつてるんだ。てなわけで俺は早めに失礼する」
チユチユ「お疲れさま、ハヤブサ。また今度ね！」

【午後6時：牛込家前】

疾透「りみ、泊まりに来たぞー」

（ガチャ・・・）

りみ「いらつしやい疾透くん。といつても何も無いけど・・・」

疾透「うちよりは物はある方だろ、こんなところで話すものあれだし上がるぞー」

【りみの部屋】

りみ「疾透くん、私の部屋に入るのって久しぶりだよね？」

疾透「ああ、ここに入るのはGalaxyでのライブが終わったとき以来か。」

りみ「それで疾透くん、RASの練習はどうだった？」

疾透「RASなあ：Roseliaに負けなくらい本格的なバンドだし、多分RASに入ったらポピパには・・・」

りみ「そっかあ：そうなたら疾透くんと話せる機会が減っちゃうね：まだ決めきれないの？」

疾透「ああ：まだ決めかねてるよ。俺は今居場所に悩んでるんだ。この間ハロハピの時に『今一番欲しいもの』って問題出しただろ？あれはそのまま俺の心情を問いに出したんだ。俺の居場所はどっちなんだろうな・・・って」

りみ「それは疾透くんが決めることだから、疾透くんが決めたことなら私は何も言わないよ。たとえば疾透くんと別々のバンドになっちゃっても・・・」

疾透「りみ：もしかして、俺と離れ離れになるのが怖いのか？」

りみ「えっ？何で・・・そう思ったの？」

疾透「りみって寂しそうなときは顔が俯くからな。今そうして俯くってことはそう思ってるってことだ」

りみ「・・・疾透くんってなんでもお見通しだよな。」

疾透「付き合い始めてもうすぐ半年だからな。大体のことはわかってる」

りみ「うん・・・あたりだよ疾透くん。お姉ちゃんだけじゃなくて疾透くんも遠くに行っちゃおうとって思うと・・・」

疾透「・・・本当は俺はどうすればいいのかわからないんだ。でも、今度のデビューライブには答えを出すつもりだからぜひ見に来てほしい。俺にとってもデビューライブだからりみたちにも聞いてほしいんだ」

りみ「いつなの？」

疾透「8月21日だな。結構先だけど」

りみ「後でみんなに連絡回してみるよ。でも疾透くんがメンバーってことは・・・」

疾透「ああ、できるだけ沙綾とりみと俺だけの秘密ってことにしておいてくれると助かる。」

りみ「うん、できるだけ隠しておくよ。・・・ねえ疾透くん」

疾透「今日は一緒に布団で寝たい、だろ？」

りみ「う、うん……」

疾透「しようがないな……ほらりみ、こっちに」

そう言つてりみは俺が入つてゐる布団の隣で寝転んだ

りみ「そういえばお姉ちゃんと水夏さん、向こうでもうまくいつてゐるみたい。」

疾透「そうか、俺もたまに姉さんと連絡とつたりしてゐるけど写真とかしか送られてこないから何が言いたいのかわからないだよ……ゆり先輩はちゃんと返してくれるの
に」

りみ「あはは、水夏さんも相変わらずみたいだね……ねえ疾透くん、今つて楽しい
？」

疾透「今が？楽しいぞ。」

りみ「そうじゃなくて……『バンドとマネージャーの両立が楽しいの？』つてことだ

よ

疾透「…正直なところ分からないんだ。さつきも言ったけど、俺の居場所はどつちなのかわからないんだ。Poppin' PartyなのかRAISE A SUILE Nなのか…俺には両方なんて選ぶことはできない…」

りみ「…」

疾透「…」

りみ「…疾透くん」

はやと「なんだ？りみ…」

俺がりみの名前を呼んで何かを言おうとする前にりみはキスをしてきた

りみ「私は…大丈夫だから。疾透くんの人生に私が口を出すなんて野暮だと思うし、疾透くんがそうしたいなら私は何も言わないよ。だから…」

疾透「…はは、こんなに可愛い彼女に慰めてもらうなんて少し自分が情けないって思うよ。ありがとなりみ」

りみ「疾透くんの悩みは私の悩みみたいなものだし、疾透くんも迷ってる時は私たちのこと頼ってほしいな。私たちはポピパの仲間なんだから…」

疾透「ああ、本当に道に迷った時は頼らせてもらうよ、その時はよろしくな。それじゃあもう遅いし今日は寝るか」

りみ「うん、お休み。疾透くん」
そう言つて俺たちは寢息を立てて寢た。

疾透「（…俺は本当にどうすればいいんだ。去年みたいに姉さんに相談に乗れないし、りみたちに心配をかけたくないし…考えるだけ悩みは増えていくばかりだし今日はもう寝ろう。明日も学校だし制服は持つてきてるけど寢坊は体に悪いしな）」

18話：心情と予定

あれから俺もPoppin' Partyも何事もなく、ただただ普通にバンド活動に勤しんで主催ライブの日にもち等を考えたりした。香澄はあいかわらず俺がいないときは俺のことを心配していたが、りみと沙綾が何とか香澄を落ち着かせてくれたみたいだ。たえはこの間俺たちが話していたことを香澄に喋ることはなかった。天然で忘れていたのか、俺のことを心配して言わなかったのか、俺にはわからない：今日は1学期の終業式で、明日から羽丘と花咲川は夏休みに入る。まあこれからも俺は4日に1日程度でRASの練習に顔を出すんだろうが・・・そうも言ってもらえないのが現実だ。そろそろ本格的にPoppin' Partyの主催ライブのことを考えないと、他のバンドもいつライブに参加できるのかわからない。そして今俺たちは・・・

7月21日

【午後1時：流星堂】

有咲「で、いつ主催ライブの日にするんだ？できるだけ多くのバンドに来てほしいから日程を決めておかねーとやばいんじゃないか？」

疾透「だな。夏休み中に予定がないってわけがないし、やるにしても夏休みが終わってからがいいだろうな。」

有咲「それに、できるなら知った顔がいるバンドがいいしな。Afterglow、P
astel*Palettes、ハローハッピーワールド、Roseliaの4組を誘
うのがいいだろうな。」

疾透「それなら俺から休みの日とかを聞いてみるよ。みんなの休日が一致した日を主
催ライブの日にする…っていうのはどうだ？」

沙綾「うん、それが良さそうだね。それじゃあ日程は疾透くん任せるとして…」

香澄「私たちはセツトリストを考えないと！」

たえ「でもまだこれから局はいくつか作れるかもしれないからセトリはもう少し後にしたほうがいいんじゃない？」

香澄「それもそっか！じゃあ今から曲を作ろう！」

有咲「お前、今の話聞いてなかったのか!? 今すぐに作るなんてできねーからまずは曲のコンセプトを考えろよ！」

疾透「はあ…結局はまた曲作りなのか…こりやセトリがいつ出来上がるのか不安だな…。」

りみ「あはは…結局はいつも通りだね…。」

(ピロピロリン)

有咲「ん？誰かのケータイに連絡来たな。私のじゃねーぞ」

香澄「私でもないよ？」

りみ「私でもないよ。」

沙綾「私の…じゃないみたいだね。」

たえ「もちろん私でもないよ。じゃあ後は…。」

疾透「俺の、だな。ちょっと待っててくれ」

そう言つて俺は流星堂の外へ移動した

《GYNE》

疾透「こんな時に連絡を入れてくるなんて珍しいなチュチュ」

チュチュ「ハヤブサ、ちよつといいかしら？」

疾透「どうかしたのか？」

チュチュ「マスクキングの予定がちよつとだけずれてしまって、8月21日のデビューライブがずれちゃったのよ。だからそのことで報告しておこうと思ったからこうして連絡したの」

ちなみにマスクキングとは、チュチュがますきに付けたバンドネームである。パレオとチュチュは本名を聞いてなかったの俺はそのまま呼んでいる。

疾透「そうなのか。ちなみにいつになっただ？」

チュチュ「9月23日よ。ちなみにハヤブサはその日は大丈夫かしら？」

疾透「学校はあるけどそっちには間に合うと思うから大丈夫だ。」

チュチュ「OK。それじゃあデビューライブの日は9月23日で最終決定よ。ハヤブサも体調を崩さないようにしなさいね」

疾透「わざわざありがとなチュチュ。あと聞かれる前に言っておくけど悪いが今日はそっちに向かえない。」

チュチュ「わかったわ。無理に理由を作ってこなくていいからそっちでやりたいことに専念しなさい。」

疾透「悪いな。こっちはもう夏休みに入ったから時間は結構作れると思うからその時はこっちから連絡入れるよ」

チュチュ「OK。それじゃあまた練習で会いましょう」

《GYNE終了》

チュチュとのGYNEが終わった後、俺は流星堂に戻った

疾透 「悪い、ちよつと長引いちやつて……って何してるんだ」

有咲 「疾透、ちよつどいいところに戻つてきたな。香澄をどうにかしてくれ……」

香澄 「疾透くん！この歌詞どう!？」

疾透 「俺がいない数分の間によくこんな歌詞書けたな……相談はしたのか？」

香澄 「ううん！してないよ！」

疾透 「……香澄？」

香澄 「何かな？」

疾透 「今度からみんなにどんな歌詞にするか相談しながら書こうな？確かに歌詞としては申し分ないのかもしれない、でも何の相談もなしに書くとみんなが混乱するからこれからはみんなで書こうな？」

香澄 「は、はい……」

有咲 「疾透すげー……香澄の扱い慣れてねーか？」

疾透 「俺のクラスにも一人香澄に似たやつがいるしな。あと羽丘にも一人だけ似たような人いるし……」

沙綾 「あー、確かにこころは香澄に似てるし疾透くんって何かあつたらこころに何か頼まれるしね……」

りみ 「だから香澄ちゃんの扱いに慣れてるんだね……」

たえ「もしかして疾透くんって香澄の調教師？」

疾透「違うしどこでそんな言葉を覚えたんだたえ」

たえ「うーん…バラエティ番組とかだったかな？」

疾透「こつちではそんなハードなバラエティ放送してるのかよ…俺はクイズ番組しか見ないんだけど」

有咲「で、さつきは何の連絡だったんだ？」

疾透「ちよつと手伝ってほしいことがあつて、時間がある時にでも手伝ってほしいってことだったよ。別に有咲たちが心配するようなことじゃないから大丈夫だ」

有咲「そうか？ならいいんだけどよ…」

りみ「(疾透くん、もしかしてRASの人からの連絡だったのかな?)」

沙綾「(多分ね。何事もなかったらしいんだけど…)」

疾透「(ああ、そんな感じだ。今度のライブの日がずれて9月23日に延期になったんだよ)」

りみ「(そっかあ…)」

沙綾「それより、今日は何の楽器を演奏してみるの？昨日はベースだったよね？」

疾透「そうだったな。昨日はベースで一昨日はドラムだったから…今日はギターにするかな。」

たえ「じゃあこれ使う？」

疾透「いや、大丈夫だ。バイト代がたまつたからこの間ギターを買つて最近で家で練習したりしてるからな。今日も持つてきてるぞ」

香澄「もしかしてそれ!? 見せて見せて！」

疾透「変に躓いたりして壊すなよ？」

香澄「大丈夫大丈夫！ ギターの扱いには慣れてるから！」

有咲「私が見張ってるから大丈夫だから安心していいぞー」

香澄「はい！ ありがとう疾透くん！ すっごいキラキラドキドキしたよ！」

疾透「そうか。じゃあ今日の音合わせといこう。曲は何にする？」

沙綾『『キズナミュージック』でどう？』

りみ「それにしよつか。じゃあ・・・」

少年少女演奏中…

疾透「ふう…こんな感じだな。」

りみ「疾透くんすごいよ！何度かみんなで合わせたことはあったけど、今回はすっごい合ってた！」

香澄「うんうん！疾透くんはギターをあまり使わなかったけど、すっごい練習したのがわかるよ！」

有咲「だな。私も今日のは今までよりも合ってた感じがするしな。疾透、ものすごい練習したんだな。」

疾透「まあな。努力はいくらしても困らないし、いざという時のために動けないとマ

ネージャーとしては当然だからな。」

沙綾「本当にこういうときの疾透くんって頼もしいよね。疾透くんがマネージャーでよかつたよ。(疾透くん、RASで結構演奏してるんだね・・・いつかは追い越されちゃうのかな)」

たえ「(でも疾透くん、なんだか苦しそう。もしかして、RASとポピパで迷ってるのかな?)」

疾透「それで、夏休みの間は どうするんだ?あまり無茶して熱中症で倒れたりしないために1週間に2日くらい休みを設けるか?」

香澄「さんせー!」

有咲「それは別にいいんだけどよ、宿題は早めに済ませろよ?バンドも大事だけど学業も大事だからな」

疾透「そう考えると1週間に2日じゃ宿題が終わるか不安だな・・・1日おきに流星堂とうちで交代制で宿題とバンド活動にするか?」

沙綾「バランス的にはそれがいいかもね。早く終わればバンドの方に顔を出せるから」

疾透「ちなみに言っておくと、俺はもう夏休みの宿題の3分の1は終わってるぞ。」

有咲「早っ!?何でもうそんなに終わってんだよ!」

疾透「なんであって、授業と授業の合間の時間とか昼時間を使って進めてたからな。後々にめんどくさい宿題だけ残して追いつめられるっていうのも嫌だし」

りみ「だから最近昼休みとかは一人だけ教室に残って弁当を食べてたんだね。」

疾透「まあな。夏休みが終わったらまた一緒に昼ご飯を食べよう」

沙綾「うん、約束だよ」

疾透「ああ。(約束…か。ますきとの約束…どうすればいいんだ。一緒にバンドを組んで約束を破りたくない。でも…)」

りみ「疾透くん？ 思いつめたような顔してるけど大丈夫？」

疾透「あ、ああ…大丈夫だ。」

たえ「ねえ、それよりも時間大丈夫？ もうこんな時間だよ？」

有咲「げっ、もうこんな時間なのか…結構頑張ったな。今日はもう解散するか…」
俺たちはケータイを見て時間を確認した。気が付いたらアナログ時計は7時を回ろうとしていた

疾透「まずいな…そろそろ夕食の材料を買って帰らないと売り切れるかもしれない」

沙綾「私もパンの材料とか夕食のおかずとかを買って帰らないと…りみはどうするの？」

りみ「私は少し買い置きしてるからしばらくは買わなくて大丈夫かな。」

疾透「そうか。じゃあこの後買い出しに付き合ってくれないか沙綾？」

沙綾「オツケー。それじゃあ帰りに寄っていいこうか。それじゃあみんな、またね」
そう沙綾が言うのと俺たちは流星堂で別れた

【午後7時15分：ショッピングモール】

沙綾「RASの練習とマネージャーの仕事で両立して疲れてるはずなのに買い物に付き合ってくれてごめんね疾透くん」

疾透「いいって。バンドとマネージャーの両立はしたことなかったし、新しい体験ができてるんだ。だけど・・・」

沙綾「やっぱり、この間のハロハピでのことを気にしてるんだね？」

疾透「ああ…やっぱり不安なんだよ。両立をいざやってみるとなると結構難しいし、俺にとつての居場所はどっちなのかって…」

沙綾「このことはりみりんにも話してるの？」

疾透「ああ、先月りみの家に泊まった際にな。やっぱりみにも心配されたよ…」

沙綾「りみりん、誰に対しても心配だからね。この間私もりみりんにも心配されちゃつて…」

疾透「りみと沙綾と有咲は色んな意味で心配してるんだな…こんなこと有咲に言ったらなんて言われるか…・沙綾」

沙綾「わかってる。りみりんも私もなんとか平然を装ってるけどいつ心配されるか…」

疾透「その時は俺からちゃんと説明するよ。でもあまり平然を装つてると逆に見抜かれるから注意しておけよ？」

沙綾「うん、わかってる。わかってるけど…・実はバンドを組んだ時もみんなに心配されちゃつたんだよ。」

疾透「それって、沙綾のお母さんが倒れた時のことか？」

沙綾「うん。お母さん、お店のことで張り切りすぎちゃって、過労で倒れちゃつたこ

とがあつたんだよ。その時は病院に走って行って香澄たちに心配されちゃったなあ……今は何とか店を切り盛りしてくれてるんだけど今度いつ倒れるかわからないし……」

疾透「その時は俺も手伝うぞ、沙綾一人に負担をさせたくないからな。沙綾まで倒れると香澄たちはとても心配しそうだしな」

沙綾「あはは、それじゃあその時はお願いしようかな。」

疾透「困ったときは頼ってくれ。それが仲間つてもものだろ？」

沙綾「うん。疾透くんも困ったら私たちをドンドン頼ってね？」

疾透「ああ。どうしても前へ進めなかつた時は頼るよ。つと、そろそろレジが空くな。沙綾の分を先に会計を済ませていいぞ。俺が買ったのは量が多いし」

沙綾「それじゃあそうするね」

俺たちはレジで会計を済ませてシヨッピングモールを出た……

【帰り道】

沙綾「今日は買い物に付き合ってくれてありがとね疾透くん。おまけに荷物まで持つてもらっちゃって」

疾透「いつもエコバッグを持ってきてるからこれくらいはお安い御用だよ。まあ俺が買った荷物の方が多すぎるんだけど・・・」

沙綾「本当にこういうときの男の子って頼もしいよね。腕つぶしがあるし、体力もあるもん」

疾透「男が女に体力面で負けるなんてシャレにならないからな。テニス部にも顔を出してるし実質3つも請け負ってることになるな・・・いや、生徒会にも入ってるから4つも請け負ってることになるのか・・・」

沙綾「そんなにやあって疲れたりしない？」

疾透「疲れることもあるけど、やっぱり達成感があるからそこまで苦にはならないかな。テニスをしてて、誰かと競いあうというのが楽しいんだよ。」

沙綾「そういえば高校総体で全国8位まで行ったんだっけ。たった1年であそこまで上達するなんてすごいなあ・・・」

疾透 「努力の賜物だよ。つと、そろそろ沙綾の家だな。」

沙綾 「本当にありがとうね。それじゃあまた明日」

疾透 「ああ、また明日流星堂でな」

そう言つて俺は持つてた荷物を沙綾に渡して俺も自分の荷物を持つて家に帰つた…

19話：迫られる決断

あれから俺はR A Sのライブの練習とポピパの主催ライブのセトリなどを考えたりと多忙な日々を送っている。1日おきにR A Sの練習↓ポピパの主催ライブの計画↓夏休みの宿題↓R A Sの練習とわずか4日でループするスケジュールだ。体への負担が大きいけど、こつちの方がバンドの方も学業の方もバランスが取れていつもと変わらない感じがしていい・・・んだが、いつものように香澄が宿題を放り出して遊びに行っている。明日香から報告があったため、スケジュールをR A Sの練習↓夏休みの宿題↓ポピパの主催ライブの計画↓夏休みの宿題↓休日↓R A Sの練習と、結局は6日でル

プするスケジュールに変更された。明日香は香澄と違ってしつかり者だからこういうときほどしつかりしてる人には助けられるな…それで今日はというと…

8月1日

明日香「すみません疾透さん…あこがどうしても行きたいところがあるからって付き合ってもらって…」

疾透「まあ、あこが楽しそうな顔をしてるからいいけど…一つ気になることがあるんだが」

明日香「そうですね。私も言いたいことがあるんです。」

疾透・明日香「何で日菜さんが付いてきてるんですか？」

日菜「だっておねーちゃんはRoseliaの個人練習にいつて家にはあたし一人

だったし、今日は仕事ないし暇だったんだもーん！」

疾透「だからといって偶然見つけた俺たちについてくるのはどうなんでしょうね？」

日菜「だって疾透くん達と一緒にいたらるんってくるもん！」

明日香「どうします？疾透さん」

疾透「こうなったら紗夜さんでも止めるのは至難だし・・・しようがないからこのま

ま日菜さんも連れていくか。」

あこ「疾透さんも日菜ちゃんも何してるのー？早く行こうよ！」

疾透「はいはい。」

こうして俺の滅多にない夏休みの休日は平和ではなく振り回される一日になった・・・

【東京ビッグOイト】

あこ「すつごーいNFOのアバターやモンスターの格好をした人たちがいっぱい！」

明日香「あこ、NFOが好きなのでこのイベントには絶対に行きたいとかで私が誘われたんです。燐子さんとかもいるんですけど、生徒会の仕事を立て込んで今日に来られなかったそうです。」

疾透「で、俺はそのとぼっちりを受けたと…それで明日香、一つ気になったんだが」
明日香「奇遇ですね、私も一つ気になりました」

明日香・疾透「「何で日菜さんが真っ先にいなくなるんですか」
そう、日菜さんはここに入った直後に『るんって来た！』って言って勝手になくなっていた。人混みの中に突っ走っていったので俺たちはただ日菜さんが人混みに入っていくのを見ていた…」

あこ「あー！あれは超激強ボスのスターロード・ビーストだー！再現率もすごくてかつこいい！」

明日香「疾透さん、あこ…どうします？」

疾透「少ししたらこっちに戻ってくるだろうから適当にフラつくか。」

明日香「ですね。」

俺と明日香は適当にその辺をふらついて時間を潰すことにした

疾透「・・・なあ明日香。」

明日香「・・・はい疾透さん」

疾透・明日香「また人増えてるんだけどなんでこうなってるの?」

あれから少し時間を潰すために会場を適当に歩いていたら花咲川で生徒会の仕事を
してるはずの燐子さんや、燐子さんの手伝いをしていたらしいひまりも来て遭遇したた
め4人に増えた。あこと日菜さん?察してくれ…

ひまり「疾透くんも来てたんだね!」

疾透「そういうひまりこそ。まあ俺はあこの連れの明日香に頼まれてきたんだけどな
…燐子さんもこんにちには」

燐子「こんにちは・・・疾透くん・・・」

疾透「こういうところに来るなんて珍しいですね、人混みは嫌いだとか紗夜さんに聞
いたんですけど」

燐子「今日はNFOのキャラやモンスターのコスプレをした人がたくさん集まって
グッズとか衣装の販売をするんですよ。私とあこちゃんは最初からNFOをプレイ
していて、このイベントをずっと心待ちにしていたんです。私とあこちゃんはNFOは
やっててもグッズとかはほとんど持つていなくて早く買いたいなーとは思ってはいた
んですが学校が忙しくて行けなかったので今年は偶然にも夏休み中であってよかった
です」

疾透「燐子さん、本当にNFOが好きなんですな…俺も最近復帰したんですけどすご
く助かってます」

明日香「え？疾透さんNFOをやってたんですか？」

疾透「といっても数年ぶりにログインしたから勘を取り戻すのに7時間丸々使ったけ
どな・・・」

燐子「この間あこちゃんと一緒にやりましたけど・・・とても楽しかったです・・・疾

透さんはNFO内でも結構有名だったので・・・」

ひまり「え？疾透くんってNFOでそんな有名だったの!？」

疾透「有名ってほどじゃないけどな。ただコツコツと一人で経験値を積んで高ランカーになってから至る所の低ランカーに手伝いに行ったらなんか『始まりの風』とかNFO内で勝手に呼ばれたな…中3になってから忙しくなったんでついこの間まで放置してました。」

明日香「疾透くんってやりはじめると忙しかったりめんどくさいと感じたりしない限り途中で作業とか投げ出したりしない感じですよね」

疾透「まあな。」

ひまり「つてあれ？燐子先輩はどこに行ったんですか？」

疾透「…あ？」

ひまりにそう言われて周りを見渡してみると…燐子さんは足早にあこのところに向かつて行つてたみたいだ…

明日香「向こうは向こうで盛り上がってるみたいですし私たちは適当に見て回りましょうか」

疾透「まあ本当に俺たちは連れてこられた側だしな・・・特にやることはないし」

そう言つて俺たちはまた適当にふらつくことにした。途中あこからGYNEで『あこ

たちはりんと日菜ちゃんと一緒に帰るので大丈夫です！』と送られてきたので向こうは心配しなくてよさそうだ

【通路】

ひまり「ね、気になることがあるんだけど」

疾透「奇遇だな、俺もだ」

明日香「そうですね。もうこの展開には慣れたんですけど」

疾透・明日香「また人が増えてるんだけど」

そう、またまた適当にふらついているとりみと薫さんの二人組に会っていた。

薫「やあ、子猫ちゃんたち。こんなところで会うなんて奇遇だね」

疾透「薫さんこそ、こういうところは無縁だって思ってたんですけど」

薫「いや、私はこここの隣にあるシヨツピングモールで買い物をしていったんだ。そこでもちやんに会って今に至るといわけだよ」

疾透「（なあひまり、羽丘って結構フリーダムすぎないか？）」

ひまり「（そんなことないと思うよ？花咲川だって結構フリーダムじゃない？）」

疾透「（あー、確かにそう言われると納得だな。香澄とかこころとかはぐみとかたえがいるし）」

ひまり「（でも羽丘だってモカとか日菜先輩とか薫先輩とかあこちゃんとかもいるし…そう考えると羽丘もフリーダムかな？）」

りみ「ひまりちゃん？疾透くんと何の話してるの？」

疾透「別に、羽丘も花咲川もフリーダムってことだよ。自由すぎて逆にやること
が……」

（ピロピロリン）

疾透「なんだ、間が悪いな…ちよつと席を外すぞ」

薫「ああ、行っておいで。私たちはここで待っているよ」

《GYNE》

チュチュ「ハヤブサ、今日は時間あるかしら？」

疾透「(あると言えば嘘になるけど、別にないって言ってもな…)別に何もなければいいけど」
チュチュ「そう。ちよつと話したいことがあるから今からこつちに来れないかしら？」

疾透「別に構わないけど」

チュチュ「OK。今どこにいるのかは知らないけど、できるだけ早く来てちょうだい」

疾透「わかった。それと、一人だけ連れてくるけどいいか？」

チュチュ「それはPoppin' PartyのMemberかしら？」

疾透「ああ。ちよつと引つ込み思案だけど、まだRASの仮メンバーだつてことは教えたけどどんな人がメンバーなのかは教えてないしこの際紹介しようつて思つて」

チュチュ「別に構わないわ。それじゃあ早く来なさい！」

疾透「はいはい。」

チュチュ「『はい』は一回で十分よ！」

《GYNE終了》

疾透「悪い、ちよつと話が長引いてた。あと俺はここまでだな」

りみ「どこかに行くの？」

疾透「ああ、ちよつとな。」

ひまり「私もついていく！」

疾透「悪いな、連れて行くのはりみだ。」

りみ「え、私？（疾透くん、もしかしてRASの人たちの所？）」

疾透「ああ、そういうことだ。まだメンバーが誰なのか紹介してないし、この際りみのことも紹介しておこうかなって思つて。」

りみ「（そういう事ならついていくよ。）ごめんねみんな、私は疾透くんと一緒に行くよ」

薫「そうかい？それじゃあ私たちはお別れか。こっちはこっちで楽しんでるから気にしなくて大丈夫だよ」

疾透「すみません、それじゃあ俺たちはこれで。」

明日香「ここまで付き合ってくれてありがとうございました疾透さん。それじゃあまた今度」

そう言つて俺たちは別れて、俺はりみと一緒にRASの練習の場所に向かった

【アパート】

チュチュ「Welcome、ハヤブサ。そして隣にいる子がPoppin' PartyのMemberね？」

リミ「は、はい！私は牛込りみつていいいます！Poppin' Partyというバンドのベースを担当しています！」

チュチュ「リミね。私はRAISE A SUILENのDJ担当でありRAISE A SUILENのプロデューサーのチュチュよ。ハヤブサ：ハヤトの年下だからリミは私より年上ね。それより、こんなところで立ち話もあれだから入りなさい」

リミ「お、お邪魔します・・・」

疾透「ますき、レイ、パレオ。こんにちはだな」

ますき「ああ、こんな時間に呼び出して悪いな疾透。」

レイ「疾透は何で呼ばれたのかわからないのか？」

疾透「ああ、俺の急に呼ばれただけで内容はまだ何も聞いてないな」

パレオ「それより気になったのですが、隣の子は誰ですか？」

りみ「は、初めまして！私は牛込みっていいます！」

レイ「キミがりみちゃんか。疾透が最近『りみがく』とか話してるからどんな子かとは思ったけど可愛いね」

りみ「か、かわっ：!？」

疾透「レイ、あまりりみを揶揄うんじゃない。顔を赤くしちゃっただろ」

レイ「揶揄ったつもりじゃないんだが、そう見えてしまったのならすまない。りみちゃんもごめんね」

りみ「い、いえ・・・大丈夫です・・・」

チュチュ「さて、本題に入るわよ。今日は1か月後に控えたライブのことについての

話し合いよ！」

疾透「セトリは『R・I・O・T』だけだけど、ライブの衣装も考えないとか？」

チュチュ「今から用意するにしても時間が足りない可能性が高いわ。衣装はその時に考えましょう。最悪近くのショッピンングモールで買えば済むし」

疾透「それなら最終的にはそっちで済ませるとして・・・問題が一つだけあるな」

りみ「何かあったかな？」

疾透「いや、チュチュたちには関係ないことなのかもしれないけど、今年は日菜さん、何か企んでる感じがするんだよ。あの人は羽丘の生徒会長だろ？だから何か起こしそうで・・・」

りみ「あはは・・・疾透くんって日菜先輩によく巻き込まれたりするからね・・・」

疾透「でもライブの日が9月23日で最終決定だからもう延長もできないし・・・あとは日菜さん次第だよ本当に」

りみ「あはは・・・」

パレオ「あの、ハヤブサさん、一つ聞いてもよろしいでしょうか？」

疾透「なんだ？」

パレオ「お二人は付き合ってたっしやるんですか？」

チュチュ「パレオ？何根も葉もないことを聞いているのかしら？それにハヤブサにこ

んな可愛い子が彼女なわk・・・」

疾透「いや、事実だけど？」

チュチュ「そうそう、事実…ってなんで今まで隠していたのよ!!」

疾透「いやそんなことを一回も聞かれなかつたし、りみもここに初めて連れてきたんだしな。」

チュチュ「それは確かにそうだけど…それならそうって早めに言いなさいよ!はあ…こんなんじゃ先が思いやられるわね・・・」

疾透「別に俺とりみが付き合ってるからっていつてもそんな毎日一緒にいるわけじゃないしデートだつてそこまで行つてるわけでもないからな。行つて月に1回くらいだし、現にこれまでにここに練習しに来た時に支障が出たことなんてあつたか？」

チュチュ「…ない、わね」

疾透「そうだろ?それに今は今度のライブでどういう風に演奏するかを決めてるんだろ?」

ますき「そうだな、今一番の問題はそれだ。まだどういう方向性のバンドなのかもまだ決まつてない。ロックバンドとかが今の私たちにはぴつたりだろうが・・・」

疾透「それじゃあロックバンドつて方針で今後の練習に取り入れてみるか」

チュチュ「そうね、今日は練習じゃなくて今後の方針の話し合いだから今日はひとま

ず解散かしら。」

疾透「お疲れ様。」

そう言つて俺たちはアパートを後にした

【午後6時：帰り道】

りみ「疾透くん」

疾透「なんだ？りみ」

りみ「疾透くん、RASのみんなの時と一緒にいるときもなんか生き生きとしてない？」

疾透「まあ、楽しいことは事実だし・・・でもポピパのみんなといるときの方が楽しいけどな。」

りみ「本当？」

疾透「楽しくないって嘘を言うメリットなんてどこにもないしな。それに、ポピパの方が楽しいって証拠は今ここにあるからな」

りみ「？何かあったかな・・・？」

疾透「それは、りみのことだ。俺がりみのことが嫌いならポピパのマネージャーの仕事をお願いわずに一人でずっとキーボードを弄ってただろうからな。りみは俺にとつて一番の宝物だよ。宝物だからこそ：俺はりみのことを大事に思ってる。ますきやチュチュには悪いけど・・・今度のライブが俺にとつて最初で最後のライブになるだろう。居場所が増えたのはよかったけど・・・やっぱり俺にとつての一番の居場所はポピパなんだ。RASのみんなは俺に優しくしてくれた。でも・・・」

りみ「疾透くん・・・」

疾透「なんか湿っぽい話になったな：とりあえず、今度のライブが終わってから俺はちやんとチュチュに伝えるつもりだよ。だから安心してくれ、りみ」

りみ「・・・うん、私は疾透くんを信じるよ。じゃあ・・・また今度ね」

疾透「ああ、またなりみ。」

疾透「やっぱり、俺の居場所はポピパなんだ…それを教えてくれたのはりみだ。俺も覚悟を決めないといけないな…今度のライブのことも、ポピパの主催ライブのこと
も……」

20話：思いつきは突然に

あれからRASでもポピパでも何事なく夏休みを過ごし、なんとか香澄の夏休みの宿題を片付けてバンド練習に力を注いで新しい曲もいくつかできた。RASはロックバンドに力を入れるため結構ハードな練習が続いたけどポピパの練習に比べたらそこまで疲れることはなかった。それでも疲れは残るから家に帰ったらすぐに布団に入り寝たりした。そんなこんなで夏休みは終わり、2学期が始まろうとしていた。

9月1日

【午前8時：牛込家前】

疾透「おはようりみ。今日は寝坊しなかったんだな」

りみ「2学期の最初から寝坊なんてしないよ・・・」

疾透「それもそうか。俺たちは夏休み中でも朝早く起きて宿題をしていたんだよな。それにしても香澄は・・・」

りみ「あはは・・・でも間に合ってよかったね。」

疾透「早く終わらせないと主催ライブの話し合いも何もなくなるからな・・・そろそろ行くか」

りみ「うん！今日は他のみんなは別々で学校に行くみたいだから二人きり・・・だね」

疾透「：：だな。といってもクラスは一緒だしそこまで寂しくないだろ」

りみ「それはそうかもしれないけど・・・いつもは沙綾ちゃんや有咲ちゃんが一緒だから久しぶりだなあ：：って」

疾透「それもそうか。：：ん？」

(ピロピロリン)

疾透 「ちよつと携帯を確認するぞ。多分沙綾あたりだろうし・・・」

りみ 「うん、大丈夫だよ」

《GYNE》

沙綾 「おはよう、疾透くん。今日から新学期だね。1学期は私や有咲が一緒だったからりみりと二人で投稿する機会があまりなかったし、今日は私と有咲と一緒に学校に通うから今日は二人きりで大丈夫だよ。疾透くん、頑張つてね」

疾透 「・・・なんか気を遣わせたかな。」

《GYNE終了》

りみ 「なんだったの？」

疾透「沙綾が俺たちに気を遣って二人で登校して大丈夫だって言ってた。沙綾はこういう時はお姉ちゃんモードになるんだな・・・」

りみ「Poppin' Partyでも縁の下の力持ちだし、こういう時も気遣ってくれるんだね沙綾ちゃん・・・」

疾透「まあお言葉に甘えていくか。でもそろそろ急がないと遅刻確定だな・・・少し走るかりみ」

りみ「は、疾透くん!?まだ間に合う・・・」

りみが言いきる前に俺はりみの手を握って学校まで走っていった・・・

【午前8時30分：花咲川学園校舎前】

疾透「ん？何か人だかりができてるな・・・」

りみ「本当だね、何かあったのかな・・・？」

疾透「りみは一人で教室に行つてくれ。たぶん紗夜さんと燐子さんもいるだろうし、こういうのは生徒会の役目だろうしな」

りみ「それじゃあ先に行つてるね。疾透くん、また教室で」

疾透「ああ。また教室でな」

そう言つてりみは校舎内に入つていった

疾透「さて・・・それじゃあこつちの問題を片付けるか。ちよつと通りますよ・・・つと。」
紗夜「あら？疾透さんじゃないですか。まだ時間はあつたから大丈夫だったのですが・・・」

疾透「俺も生徒会の一員なので学園での問題は解決させないですし。それで、この集まりは何なんですか？」

で緊急集会を開き、合同文化祭の日程と決定を伝えると、何割かの生徒は俺と同じように叫び、残りの生徒は嬉しかったのか歓喜の声を上げていたりした。そして俺はというと…

【昼休み：2ーB】

疾透 「はあああああ…」

俺は机に突っ伏していた

りみ 「疾透くん・・・大丈夫？」

疾透 「これが大丈夫に見えるか・・・？新学期早々校舎前で日菜さんが合同文化祭を

思いつくなんて……しかもRASのライブの日と2日目が被ってるし……」

沙綾「あー…確かに今月の23日だっけ？しかもいきなり決まったんだっけ。」

疾透「そうだよ……しかも相手は日菜さんだぞ？日菜さん相手に常識は通じないし……はああああ……」

「……」
「疾透？そんなに落ち込んでたら笑顔になんてなれないわよ？」

疾透「ツツコむ気力がねえ……」

(ガラガラ)

有咲「悪い、疾透いるか？」

疾透「ここにいますぞ有咲……」

俺は机に突っ伏したまま手を上に上げた

有咲「……なあ、疾透のやつ大丈夫なのか？なんかいつもより気力なくねーか？」

りみ「疾透くんにも事情はあるんだよ……」

有咲「あー…深くは聞かないでよくけど、日菜さんが呼んでるからこいつ連れて行くぞ」

疾透「引つ張られるのは勘弁だからとりあえず行くか……って日菜さんが呼んでた？」

有咲「ああ、疾透に話があるってよ。だからとりあえず連れて来てって言うってたから

こうして呼んでんだよ」

疾透「まーた日菜さんかよ・・・今日何回目だ・・・」

そう俺は愚痴を言いながら俺と有咲は生徒会室まで移動した

【生徒会室】

有咲「日菜さん、疾透を連れてきました」

日菜「有咲ちゃん、お疲れさま！もう大丈夫だよ！」

有咲「それじゃあ私はこれで失礼しますね。」

有咲は生徒会室を出て行った・・・

疾透「：それで日菜さん、俺に用って何ですか？」

日菜「疾透くんってバンドとしては演奏やったことないんでしょ？この際、学園祭で

演奏してみたら？」

疾透「(そういえばまだ日菜さんには俺がRASの仮メンバーだって伝えてなかったな・・・日菜さんの前では伏せるか)確かにバンド演奏はまだしたことはないですね。」

日菜「ふーん・・・？疾透くん、学園祭限りのバンドを組んでみない!？」

疾透「・・・はい？俺がバンドを？いやいや何かの冗談ですよ？それに羽丘も花咲川も俺を除いて女の子しかいないじゃないですか。そんな状況でバンドを組んでも違和感しか持たれませんよ」

日菜「疾透くんは羽丘でも人気だし大丈夫大丈夫！みんな応援してくれるよ！」

疾透「はあ・・・まあやってみる分にはいいですけどやるなら22日をお願いします。俺にも事情はあるので」

日菜「ふーん？わかった！」

疾透「それで日菜さん、メンバーは決まってるんですか？」

日菜「ううん？まだ決まってるじゃないよ？」

疾透「・・・どうするんですか。メンバーもいないんじゃないんですよ」

日菜「だから、疾透くんが『この人とやってみたい!』ってメンバーに声をかけてくれればいいよ！ちなみにみんなにはこのことは伝達済みだから大丈夫だよ！あと疾透くん、何の楽器ができるの？」

疾透「使えるのはギターとキーボードですかね。それ以外はまだ経験が浅いので。」
 日菜「それじゃあ後は頑張つてねー！あ、あと疾透くんはボーカルつて決まつてるからそつちも頑張つてね！ちなみにパスパレのメンバーも誘えるから！ばいばい！」

そう言つて日菜さんは生徒会室からスキップしながら出て行つた

疾透「本当に日菜さん、思いついたらとんでもないことになるな・・・さて、俺もメンバーを探しに行かないと・・・さて、誰を誘うか・・・俺がどつちの楽器を使うかで決まるようなものだし、こういう時はスマホに入れてるアプリで・・・」

俺は判断アプリ『Judge』を開いて『キーボードとギター、どつちを演奏するべきか』と入力した。結果は：ギターと出た。

疾透「ギター・・・か。ただボーカル兼ギター担当つていつてもギターを演奏できるわけだから一応俺も候補に入れておくか・・・ただ俺がボーカル担当だからボーカル単担当組の友希那さん、彩さん、こころは候補から除外。残りはギターとキーボード、ベースとドラムか・・・誰にするか・・・」

(ピロピロリン♪)

疾透「日菜さんから？えつと・・・」

日菜『あ、メンバーはできるだけ今日中に決めておいてね！』

疾透「・・・今日中とかこれはまたデカイ目標だな・・・できるだけ別々のメンバー

「がいいだろうし」

「俺は生徒会室を後にした」

【2—B】

疾透「ただいま」

りみ「疾透くん、話って何だったの？」

疾透「文化祭初日に俺がボーカル兼ギターでその日限りのバンドで演奏することになったんだ。だから今日中にベースとキーボード、ドラムとギターを集めないといけないな
くて・・・」

沙綾「へえ、疾透くんがボーカルの文化祭限定バンドかあ：Memberは疾透くんが募集するの？」

疾透「ああ、できるだけパスパレとRoselia、ハロハピとAfterglowから一人ずつ引き抜く感じだな。ポピパが候補にないのは主催ライブの準備で忙しいっていうのが理由だから：まあ何人かは候補がいるから一応声はかけてあるよ。ちなみに当然のようにこつちにも誘う候補はいるからな」

りみ「それって誰？」

疾透「まずはベース担当として千聖さん、ドラム担当であこだな。キーボードに：D Jで美咲、ギターは蘭だな。で、ギターボーカルが俺の5人だ。」

沙綾「なんか珍しい組み合わせだね。何か理由はあるの？」

疾透「どうせだし滅多にない組み合わせってことで誘ってみた。日菜さんがすでに伝達済みって言うてたから後は返事がもらえるかどうかだな。」

こころ「返事が来るといいわね！ちなみに私や彩が候補にないのは何でかしら？」

疾透「今回は俺がメインボーカルを担当するわけだし、バンドのメインボーカル担当組は悪いけど誘えないんだ。そこはすまない」

こころ「いいえ、大丈夫よ！当日を楽しみにしてるわね！」

そんなこんなで昼休みが終わり、午後の授業も全部終わって放課後になった。ちなみ

に他のメンバーには他のメンバーのことは伝えてない。

【放課後】

(ピロピロリン)

疾透「お、いいタイミングで連絡が来たな。で、返事は・・・」

《GYNE》

千聖「いいわ、疾透くんと一度音を合わせてみたいって思ってたのよ。」

蘭「疾透からこんなことに誘ってくるなんて珍しいね。いいよ、やる」

あこ「やりますやります！疾透さんと一緒に演奏できるなんて嬉しいです！」

美咲「あたしを誘うなんて疾透さんも結構物好きですね。いいですよ」

疾透「ありがとう。それじゃあ一度顔合わせつてことで今日この後ファミレスに集合
でどうだ？」

千聖「今日は仕事がないから大丈夫よ」

蘭「あたしも大丈夫」

あこ「あこも大丈夫です！」

美咲「あたしも大丈夫ですよ。」

疾透「了解。それじゃあこの後ファミレスに集合だな。」

《GYNE終了》

【ファミレス：『Emerald』】

【プチ設定紹介：『Emerald』エメラルド。様々な学生がテスト勉強や話し合いでよく集まるファミレス。大きさはごく普通だが、結構人気がある。】

疾透「お、みんなきたな。こっちだこっち」

千聖「こんにちはは疾透くん。」

蘭「疾透、今日はお疲れ様・・・」

あこ「あこを誘ってくれてとても嬉しいです！」

美咲「まああたしはミッシェルとして当日参加ってことですけど・・・」

疾透「いや、美咲は普通にミッシェルじゃなくて美咲として出てもらうぞ？」

美咲「え？いやいや冗談ですよ？」

疾透「いや、普通に冗談抜きだ。」

美咲「ええ・・・」

千聖「それで、今日は顔合わせっていうことで集まったけどこのメンバーでやるのね。珍しいメンバーね、疾透くんはどうしてこのメンバーでやりたいって思ったの？」

疾透「まあ、俺だって他のメンバーの状況把握とかがしてましたし、知った顔でやるよりはこういうのもいいかなって思ってた。他にも組み合わせの候補はあったんですけど

このメンバーがいいかなっても思いました。」

蘭「ちなみにどんな組み合わせか聞いてもいい？」

疾透「ベースがリサさん、ドラムが花音さん、ギターは蘭、キーボードがイヴの組み合わせ。ギターが日菜さん、ドラムがあこ、ベースが千聖さん、キーボードが燐子さんの二組が候補だったな」

あこ「なんでさーやのいるポピパは候補にないの？」

疾透「今度ポピパは主催ライブで忙しいからポピパメンバーは今回除外した。あと、友希那さんと彩さん、こころも候補から外れている。理由は俺がメインボーカル兼ギター担当だからバンドでのメインボーカル担当は今回は誘えなかったんだ」

蘭「そうなんだ。」

疾透「それに、同じバンドメンバーを誘ってもいつもと何ら変わらないだろ？だから別々にバンドメンバーを誘うことにしたんだよ。後、日には初日の22日で決めてある。」

あこ「わかりました！」

疾透「といつても蘭や千聖、美咲は曲作りに慣れてるのは知ってるが今から曲を作るってなると難易度高いけど既存の曲をカバーして歌うの持ったのもな・・・どうするべきか」

千聖「なら、いつそのことみんなで新しい曲を作ってみないかしら？」

蘭「いいですね、文化祭限定のバンドだし曲とか作ってみたいかも」

あこ「歌詞とかはどうするんですか？」

美咲「みんなそれぞれ作ってきて、それをあたしたちに合うように改良するとかどうですか？」

疾透「それが良さそうだな。誰か一人に負担をさせるのはよくないし、学園祭限りの即席バンドだ。」

千聖「それじゃあ、それぞれ歌詞を作って次集合する時にみんなで歌詞にしましょうか」

疾透「それがいいですね。千聖さん、次のオフはいつですか？」

千聖「ちようど来週ね。休憩時間や家での時間を作って必ずいい歌詞を書くわ」

疾透「あまり無理をしないでくださいね。」

千聖「ええ、わかってるわ。」

疾透「それじゃあ今日は解散にしますか。今日は集まってくれてありがとうございませす」

蘭「お疲れさま、早く家に帰って歌詞を考えないと…モカとひまりには秘密にしないと」

あこ「あこも頑張るぞー！りんりんを驚かしたいから秘密裏に作らなきゃ！」

美咲「こころ達3バカに察されないようにしないとですね・・・」

千聖「ところで疾透くん、日菜ちゃんには今日集まったメンバーのことは教えているのかしら？」

疾透「いえ、教えていないですね。千聖さんも日菜さんとイヴには気をつけてください」

千聖「ええ、最低限に気をつけておくわ」

疾透「それじゃあ、今度こそ解散で。文化祭の準備もあるだろうから体調管理に気を付けてくれ」

そう言っつて俺たちは解散した。

疾透「(初めてのバンド活動か・・・改めて思うと初めての試みだし楽しみだな。でもRASのこともあるし、今度の文化祭初日はRASのみんなも誘ってみるか。2日目は俺がRASのライブのこともあるしな・・・後は『文化祭には生徒が招待して外部の間も楽しめないと!』って日菜さんが言ってたしな。さて：歌詞も考えないと。とりあえず1週間後に集合するまでに歌詞の候補も考えないと)」

21話：V a r i o u s c o l o r s

合同文化祭で歌うサプライズバンドを結成してから早1週間が経った。りみや沙綾たちには当日の楽しみをもってことで隠している。今日は放課後にファミレスに集合してそれぞれが考えてきた歌詞を公開して俺たちに合うような歌詞に仕上げる感じだ。一応みんなの進捗はGYNEのグループチャットで連絡しあってるから特に問題はなく感じた。

【昼休み：屋上】

疾透「んー、みんな歌詞はとりあえずできてるみたいだな。今日はみんなが集まれるし連絡回しておくか」

りみ「もしかして、合同文化祭で歌うバンドのこと？」

疾透「ああ。みんな結構頑張ってるからな。俺だってメインボーカルとギターをやるんだし頑張らないと」

沙綾「ねえ、誰を誘ったの？」

疾透「それは当日でのお楽しみってやつだ、今知っても楽しみが減っちゃうだろ？」

沙綾「あはは、確かにそれはそうだね。それじゃあこの話はおしまいにしよつか。それで疾透くん、RASの練習はどう？」

疾透「別に何事もなく練習に励んでるよ。一応RASのメンバーも文化祭に招待しておいたからその時にでも会えるだろ」

りみ「そっかあ、よかったあ…でも大丈夫なの？RASの練習、ポピパのマナージャー、文化祭で歌うバンドの計画…一人三役なんだよね？」

疾透「別に今に始まったことじゃないし、体力もそれなりについてきたしこれくらい大丈夫だよ。」

沙綾「そっか、疾透くんがそう言うなら大丈夫そうだね。でも無理はしないようにね？」

疾透「ああ、最低限気を付けて頑張るよ。それと、今日は文化祭バンドのメンバーで集まるから今日はそっちには来れないから」

沙綾「了解、それじゃあこっちはこっちで主催ライブのセトリとか新しい曲を考えておくからこっちは心配しなくていいよ」

疾透「わかった。そっちの進捗もちよくちよく送ってくれると助かる」

りみ「そっちも頑張つてね。」

疾透「ああ。」

俺たちはそれからポピパの最近の進捗などを話して昼休みを過ごした…

【放課後：2—B】

疾透「さて：と、そろそろ行くか」

香澄「はーやーとーくーん！一緒に帰ろうよー！」

疾透「悪いな、今日はちよつとそつちには行けないんだ。ちよつとこつちの事情があつて」

香澄「なににに!? 私たちに秘密なんてなしだよ!?」

たえ「そうだよ疾透くん。私たちに秘密なんて何か変なこと考えてたりしない?」

疾透「そんなにやましいことじゃない。ちよつと予定があるんだよ。というわけで有咲、こいつらのことは頼んだ」

有咲「わかつてるよ、それじゃあおたえと香澄はこつちなー」

香澄「有咲の意地悪——！」

たえ「あれー」

疾透 「じゃ・・・俺はこれで。また休日明けに学校でな
りみ 「うん、またね。」

そう言つて俺は学校を後にした・・・

【午後4時45分：ファミレス『Emerald』】

疾透 「千聖さんたちは…つと」

千聖 「こつちよ、疾透くん。もうみんな来てるわ。先週とは真逆の展開ね」

疾透 「俺たちの学年には騒がしいのが何人かいるので巻き込まれてたんで…すみませ

ん

蘭「香澄とかこころとかいるからね…そろそろ本題に入ろうよ」

あこ「そうですよー！あこたち、頑張つて歌詞を書いてきたんです！」

美咲「とりあえずこつちに来てください疾透さん。こつちに来ないと話ができないので」

疾透「ああ、悪い悪い。それじゃあみんな、歌詞を見せてくれ。」

俺たちはそれぞれが歌詞を書いてきたノートを鞆から取り出してテーブルに広げた

疾透「ふむふむ…なるほどな。あこはもう少し難解な歌詞になると思ったけどそんなことはなくてよかつた。」

あこ「あこだつていつもカツコいい言葉ばかり言つてるわけじゃないんだよ！」

千聖「でもよかつたわね。あこちゃんにしかわからない言葉を並べられると隣子ちゃんを呼ぶしかないもの…」

美咲「あはは…そうなるとサブライズバンドも何もありませんからね…ところでこのことを知つててここにいないメンバーって日菜さんだけですか？」

疾透「ああ。日菜さんがうっかり言い洩らす可能性もあるだろうけど、大丈夫だろう。

…多分。あと、サブライズってことだから初日のステージが全部終わってから演奏する形らしい。」

蘭「そっか、そうじゃないとサプライズの意味がないしね。」

千聖「それじゃあ、みんなの歌詞を見せ合って歌詞にしましょうか。」

こうして俺たちはそれぞれが歌詞を書いてきたノートを見せ合って何とかその日のうちに曲は完成した。

疾透「ふう：結構時間かったな。あとは音合わせか・・・みんな、明日から2日間時間はあるか？」

千聖「私は午後からなら大丈夫よ」

あこ「あこは両方とも大丈夫です！」

蘭「あたしも千聖さんと同じで午後からなら大丈夫だよ」

美咲「私はあこさんと同じで二日ともフリーですね」

疾透「了解。それじゃあ明日と明後日は『Ruby & Sapphire』に昼の1時に集合でいいか？」

千聖「ええ、それでいいわ。」

蘭「あのさ疾透、サプライズだけどバンドって事は何か名前があったほうがよくない？」

美咲「あ、確かにそうですね。バンド名どうします？」

あこ「あこたちにピッタリな名前をお願いします疾透さん！」

疾透 「結局俺が考えるのかよ・・・まあいいか、こういうのは慣れっこだし。でも今から考えるとみんなが帰る時間が遅くなるし今日は解散ってことにするか。あと、今日できた歌詞は俺のノートにまとめて曲名とバンド名を明日発表する感じでいいか？」

千聖 「ええ、それで構わないわ。私たちを誘ってくれたのは疾透くんだし、このバンドのリーダーは疾透くんが適任ね。」

疾透 「あまりリーダーって言えるほど胸は張れないかもしれないですけど・・・頑張ります」

蘭 「それじゃあ今日は解散だね」

疾透 「今日はお疲れさま、また明日だな」

そう言っただけ今日は解散し、それぞれの帰路についた…

9月9日

今日は午後から『Ruby & Sapphire』に集まって歌詞に合った音を合わせる日だ。このメンバーで音を合わせるのは初めてだから最初は苦戦するかもしれないけど、多分このメンバーならいい音を奏でることができるだろう。俺はあの後家に帰ってから曲名とバンド名を考え、気が付いたら時計の針が10時を回っていたのでそのまま寝た。

【午前10時30分：疾透の部屋】

疾透「あー、久しぶりの平和な一日だ……いつも香澄とかここに振り回されてばかりだからこういう休みはいいよな……まあ昼からみんなで集まって音合わせだけあのメンバーなら振り回されないだろうし」

(ピロピロリン)

疾透「こんな時間からGYNE? って言ってもこの時間にしてくるのってあの人しかいないしな。」

《GYNE》

チュチュ「Good morningハヤブサ。」

疾透「やっぱりチュチュか。こんな時間に連絡を入れるってことはRASの練習ってことだよな?」

チュチュ「Exactly、その通りよ。今日は時間あるかしら?」

疾透「悪い、文化祭まで残り2週間しかないからこっちは結構忙しいんだ。まだこっちで一時的に組んだバンドの音合わせもしてないし、明日と明後日はバンドの音合わせで忙しいからそっちには顔を出せそうにない。」

チュチュ「そう。わかったわ。でも文化祭初日が終わったらリハも兼ねて泊まり込みで練習よ！」

疾透「はいはいっと。でもただ練習に来ないだけじゃ勘も鈍るだろうから家の方で練習はしておくぞ」

チュチュ「そうしなさい！学園祭でのバンド演奏もそうだけどRASでの演奏でやらかしたら怒るわよ！」

《GYNE終了》

疾透「チュチュにも困ったな・・・こりやーバンドに一人は騒がしい人いるぞ・・・まあやることないしちよっと美咲のところに行って時間を潰すか？あこも今日と明日はフリーって言ってたし。あこを拾っていこう」

俺は自分の家を出て一度あこの家に行ってからあこと一緒に美咲の家に向かった

【午前11時：奥沢家前】

(ピンポーン)

美咲 「はいはい、今出ますよー」

(ガチャ)

美咲 「あれ、疾透さんとあこさんじゃないですか。どうしたんですかこんな時間に」

疾透 「どうせあのまま家にいても暇だったし、あこがオンラインゲームをして遅れる可能性があったからあこも拾ってきた」

あこ 「あこは文化祭の準備期間はNFOはやってませんから大丈夫です！」

疾透 「ならいいけどな」

美咲 「ここで立ち話もあれなので入ります？」

疾透 「最近寒くなってきたからな・・・あがるよ」

あこ 「おじやましまーす！」

【美咲の部屋】

美咲「こんなものしかありませんけど・・・」

そう言つて美咲が持つて来たのはお茶と茶菓子だった

疾透「出してくれるだけでも嬉しいぞ、でもそろそろ昼ご飯だけ大丈夫か？」

美咲「わかつてますよ。だから少しだけ持つてきたんです」

あこ「わー！ありがとうみさきん！いったきまーす！」

疾透「おいあこ、俺の分も残しておいてくれ：そんなにホイホイ放り込むと喉につまるぞ」

あこ「大丈夫です疾透さん！こんなことで喉に：ゲホゲホっ！」

疾透「あー、言わんこつちやない：ほらあこ、お茶」

あこ「(ゴクゴク・・・) あーおいしかった！」

疾透「ほとんど残つてないな・・・まああこがおいしそうに食べてたからそれだけでもお腹いっぱいだよ」

美咲「それならいいんですけど・・・お昼どうします？もうすぐ昼なんですけど」

疾透「美咲、何か野菜とかあるか？」

美咲「あ、はいありますよ。もしかして疾透さんが作ってくれるんですか？」

疾透「いつも自分で作って自分で食べるかりみと一緒に食べるかしかしてなかったかな。偶にはこういうのもいいだろうって思ってた」

美咲「それじゃあお言葉に甘えますね」

あこ「疾透さんの料理楽しみー！」

疾透「はいはい、それじゃあ待っててくれ」

それから俺は美咲の家のキッチンを借りて軽く野菜炒めや軽いおかずを作った。思いのほか美咲とあこからは好評だったので今度また時間がある時に作ってあげよう：

【午後12時30分：美咲の部屋】

疾透「ん？千聖さんと蘭から連絡だ。『仕事が終わったから今から集まりましょうか』
『今日のバイト終わったから今から集まって早く練習しようよ』だって。それじゃあ行くか」

あこ「はい！」

美咲「はいはい、それじゃあ行きますか。」

俺たちは『Ruby&Sapphire』に向かった

【午後1時：『Ruby&Sapphire』】

千聖「こんにちは、疾透くん。今日は早かったわね」

疾透「ちよつと朝から暇だったんであこを連れてさつきまで美咲の家に行ったので早く感じるんだと思います。そういう千聖さんだって蘭と一緒に来るなんて珍しいですね」

蘭「こつちに來るときに千聖さんを見かけたから一緒に行こうってことになったんだよ。それより早く入ろうよ」

美咲「そうですね、時間は待つてくれないので早く音を合わせて完成に近づきましょう」

あこ「早くみんなと音を合わせたいよー!」

俺たちはスタジオに入って機材のセッティングをして練習に取り掛かった。

【スタジオ内】

疾透「さて、練習を始める前に一つ言っておかないとな。この曲とバンド名のことだ。」

千聖「どんな曲名とバンド名になったのかしら?」

疾透「曲名は『Connected beat』、バンド名は『Various color』」

l o r s』でどうだ？」

蘭「曲名の訳は『繋がる鼓動』、バンド名の訳は『様々な色彩』……うん、いいじゃん。」

あこ「とつてもかつこいい曲名とバンド名ですね！疾透さん、ありがとうございます！」

疾透「前からいろんなバンドを見てきたし、今回集まったメンバーはみんな違うバンドのメンバーだ。」

美咲「なるほど、観察眼がすごいですね……」

疾透「さて、さっそく音合わせしてみるか。準備はいいか？」

千聖「いつでもいいわ」

蘭「あたしも準備できてるよ」

あこ「あこも大丈夫です！」

美咲「本当に素の自分でDJやれるんですね……ありがとうございます」
疾透「それじゃあ行くぞ、1・2・3・GO！」



2時間後

疾透「なかなかいい感じだな。初めて音を合わせたにしてはリズムがいいし、各パートのバランスもとれてる。たった2時間でこれだけ合わせることができるなんて」

蘭「そうだね、しかもこのメンバーは一緒に話してることが多いわけでもないし」

あこ「はい！あこはいつもおねーちゃんや日菜ちゃんと話すことが多いですし」

千聖「私も花音や薫とよく話すから新鮮でいいわ。」

美咲「あたしも最近は大和さんと話すようになりましけどそこまで人脈が広いつてわけじゃないのでこの機会に人脈を増やした方がいいかもしれないですね」

疾透「まだ2時間あるし少し休憩するか、千聖さんと蘭はバイトと仕事が終わった直後だし、あまり無茶してもいけないし」

千聖「そうね。文化祭まであまり時間がないけれど焦りすぎてもだめだからいったん休憩を挟みましょうか。」

俺たちは一度休憩を挟み、1時間後に音合わせを再開したが千聖さんのベースの調子

が悪いと聞いてから軽めにメンテナンスをしたが今度は蘭のギターの弦が切れたりとかハプニングが起きてその日は解散となった。

千聖「ごめんなさいね、みんな。みんなに隠れて一人で練習をしていたのだけど、ベースの調子が悪くなっていたことに気が付いていなかったわ・・・」

蘭「それを言うならあたしもですよ。あたしも千聖さんと同じで一人で練習してたんだけど弦が切れかけていたなんて・・・」

あこ「あこは練習したかったですけどおねーちゃんや日菜ちゃんと一緒に出掛けることが多かったし、家でもおねーちゃんが出てなかなか叩けなかったんです・・・」

美咲「あたしはそもそもDJセットなんて持ち歩けませんでしたが・・・あまり使わなかったのもメンテも何もなかったんですけどこれはしょうがないですね・・・続きは明日にしましょうか。」

疾透「ああ、明日も午後から同じ時間にここに集合でいいか？ただ今日の昼前みたいに一度美咲の家にあこを連れて行くのは時間がかかるだろうし今日は美咲とあこはうちに泊まっていかないか？俺は一人暮らしだし、2人くらい増える分には問題ない」

あこ「いいんですか？やったー！さっそくおねーちゃんに連絡しよう！」

美咲「あたしもいいんですか？でもあたしも一人暮らしたのであたしの家でもいいんですけど」

疾透「うちは去年まで水夏姉さんがいたし、そう遠慮することはないぞ。」
美咲「ならお言葉に甘えちやっついていいですか？」

疾透「ああ、大丈夫だ。それじゃあ千聖さん、蘭。また明日」

蘭「うん、また明日。」

そう言つて俺たちは別れ、美咲とあこは俺と一緒に俺の家に、千聖さんと蘭は途中ま

で一緒に帰ったのだから。

22話：今はこの時を楽しんで

あれから俺は週に1度だけ学園祭で演奏するバンドメンバーと練習を重ねたりポピパのメンバーと主催ライブの計画を立てたり、RASのメンバーと23日のライブに向けて練習したりと演奏三昧な日々を送った。なんとか学園祭で演奏する曲の音合わせは終わり、音楽は完成した。だがポピパの主催ライブのセトリは決まったが、パスパレだけ参加スケジュールが合わず未だに日程は不明なままとなっている。RASはすでに音を合わせ終わって後は本番に向けて体調を整えるだけだ。そして今日は・・・

9月22日

【午前8時：羽丘学園への通学路】

疾透 「なんだかんだでもう文化祭かあ：早かったような遅かったような・・・」

りみ 「そうだね：疾透くんは3組のバンドを行き来してたから早く感じるのかも：」

疾透 「にしても、ポピパも2日目に花咲川でライブするなんてなあ：しかも提案したのはりみなんだろう？」

りみ 「うん、いつもは香澄ちゃんや有咲ちゃんに任せっぱなしだから私も何かやってみたくて：」

疾透 「なるほどな、確かにそれはいい案だ。ただ：」

りみ 「うん、わかってるよ疾透くん。疾透くんはRASのライブを控えてるから私たちのライブは見れないんだよね？大丈夫だよ疾透くん。私は一人じゃない、ポピパのみんが一緒にいるからどんなことだって乗り越えられるよ。それに：今日は文化祭でデート：だからね」

そう、今日は羽丘で文化祭の日だ。日菜さんが気を遣ってくれたのか、俺の明日の予

定を把握しているのかは知らないが、初日は羽丘で、2日目は花咲川での文化祭となっている。去年の文化祭はまだ俺たちが付き合っただけでなかったし、偶々別々の時間でクラス露店を担当していたので今年の文化祭と一緒に回ることができる。それも兼ねて、今日は文化祭デートということになっている。

疾透「ただ俺は午後から抜けて俺のバンドのメンバーと集合してステージで演奏する形になるからそれまでは一緒に楽しめるからな。」

りみ「うん！」

そう言っただけ俺たちは足早に羽丘学園への道を歩いていった

【羽丘学園：校舎前】

疾透「おはよう、巴。今日はこっちで仕事なのか。」

巴「まあ、な。蘭は校舎の見回りだし、モカは蘭の付き添い。つぐとひまりは教室で店の店員だしアタシはこうして来る人来る人の確認だよ。今日は一人か？」

りみ「おはよう巴ちゃん。」

巴「お、りみも一緒か！珍しいな、疾透がりみと一緒に来るなんて。」

疾透「まあこれには色々事情があつてな。それより、確認頼む」

巴「ああ…よし、これで二人とも大丈夫だ！羽丘での文化祭、存分に楽しんでこいよ！」

疾透「ああ。それじゃあ行くかりみ」

りみ「うん！巴ちゃん、またね」

俺たちは巴に一礼して校舎内に入っていった

【羽丘学園：玄関】

疾透「さて…と、巴からもらったパンフレットによると友希那さんたちがいる3-A

では喫茶店、日菜さんのいる3ーBではプラネタリウム。つぐみとひまりがいる2ーAでは露店、薫さんがいる3ーCではカフェ。あこたちがいる1ーAは休憩所らしいな… どうする？」

りみ「薫さんがいる3ーCに行こう！」

疾透「(だよなあ…) それじゃあまずは薫さんのいる3ーCからだな」

りみ&疾透移動中…

【3ーC】

薫「おや、りみちゃんと疾透じゃないか。私のところに来るとはなかなかいい目を持っていくじゃないか」

疾透「はいはい、とりあえずコーヒーとクッキーをお願いします薫さん。りみはどうする？」

りみ「私は・・・この、薫さんスマイルで！」

疾透「(なんでそんなものあるん?!)」

薫「おや、私のスマイルか・・・儂いスマイルと満面のスマイル、どっちを(ご)所望かい?」

りみ「それじゃあ・・・儂いスマイルでお願いします！」

疾透「(さっきから何を言ってるんだ・・・俺にはわからん、誰か解説プリーズ)」

薫「では行こう・・・(ニコツ)」

りみ「!!(・・・キュウ)」

疾透「(やっぱりこうなるのか...) コーヒーとクッキー、ごちそうさまでした。それじゃあお代はここに置いておきますね」

薫「また来るといい、子猫ちゃんと子犬くん」

疾透「はいはい...」

そう言つて俺はりみをおんぶして3-Cを後にした。

疾透「りみ、そろそろ目を覚ましてくれ」

りみ「・・・あれ？疾透くん？薫さんはどこ？」

疾透「さつき薫さんの教室を後にしたから話すなら今度に頼む…また気を失われると俺が困る・・・」

りみ「・・・ごめんね疾透くん。次はどこに行く？」

疾透「今いるところは3年生のフロアだから次は友希那さんのところに行くか」

【3—A】

友希那「あら、疾透とりみじやない。」

疾透「友希那さんとリサさん、おはようございます。」

りみ「お、おはようございます！」

リサ「あはは、そんなにかしこまらなくていいのに。今日は花咲川の生徒はお客さん側だけどかしこまれるとくすぐつたいからね」

疾透「そう言われてもリサさんたちは年上ですしかしこまるなって言われる方が無理ですかね……」

友希那「リサはみんなに優しすぎるのよ。疾透の言うことはもつともだわ」

疾透「友希那さんの言うことはもつともですが、みんなに優しいのがリサさんのいいところなのでそういうのは普通にいいと思いますよ」

りみ「私も、私たちポピパや蘭ちゃんたちに優しいリサさんのこと、尊敬していますから……私もいつかりサさんみたいな人になりたいです。」

リサ「あはは、ありがとね2人とも。はい、これがメニユーだよ。決まったら呼んでね♪」

疾透 「喫茶店ってだけあってすごいメニューの数だな．．．パフェからタルトまでスイーツが多めの喫茶店か。りみはどうする？」

りみ 「わ、私はこのフルーツ多乗せタルトで．．．」

疾透 「じゃあ俺はこの旬のフルーツ多めのパフェにするか。リサさん。」

リサ 「フルーツ多乗せタルトと旬のフルーツ多めパフェだね。友希那——！」

友希那 「もうできてるわ。」

疾透 「(早っ!?)」

リサ 「はい。二人ともゆっくりして行ってねー♪」

りみ 「想像してたよりすごくフルーツが盛られてるね．．．」

疾透 「だな．．．こっちも結構フルーツが入ってるし．．．というかりみ、他のテーブルを見てみる」

りみ 「え？」

りみと俺は他のテーブルを見た。他の人は気が付いてないようだが、俺たちは気づいていた。どうやら、俺たちの分だけフルーツを多めに入れてくれてたみたいだ．．．しかもリサさんはこっちを見て笑顔だし。もしかしなくても俺たちのこと、日菜さんに聞いた

なりサさん…

疾透「…」

りみ「は、疾透くん？」

疾透「(日菜さん、あとでお話しましょうか)」

そんなこんなで俺たちはりサさんのサービスでフルーツが多めに乗っていたスイーツを食べてりサさんたちの露店を後にした

一方その頃…

【3—B】

日菜「!？」

麻弥「どうしたんですか日菜さん？」

日菜「ううん、なんでもないよ麻弥ちゃん！（なんだろう、すごい悪意を感じる……）」

【3年生フロア：廊下】

疾透「さて……ちよつと3ーBに寄ってもいいか？」

りみ「麻弥さんたちがいるプラネタリウムだよね？もう行つちやうの？」

疾透「まあ、甘いもの食べたからちよつと休憩に……な。」

りみ「そっかあ、いいよ。行こうよ疾透くん」

【3—B】

麻弥「あ、疾透くんとりみさん！今日は来てくれてありがとうございます！」

疾透「どうも麻弥さん。ところで日菜さんは？」

麻弥「日菜さんならここにいますよ」

麻弥さんがそう言うのと机の下に隠れていたであろう日菜さんが出てきた。

日菜「あ！疾透くんとりみちゃんだ！」

りみ「日菜さん、こんにちは」

疾透「どうも、日菜さん。」

日菜「それで疾透くん、あたしに何か用なの？」

疾透「ちよつと聞きますけど、リサさんに俺とりみの事話しましたか？」

日菜「うん、話したよ？」

疾透「やつぱりですか。日菜さん、ちよつと俺とお話しませんか？大丈夫ですよ、すぐに終わりますから（ニッコリ）」

日菜「え、え？疾透くん、目が笑ってないよ…？」

疾透「麻弥さん、少しだけ日菜さんを借りますね。すぐに終わるからりみもそこで

待っててくれ」

麻弥・りみ 「「え？わかりました（え？わかったよ、すぐに戻ってきてね？）」

俺は日菜さんの制服の首根っこを掴んで隣の空き教室に入って日菜さんを少しお話をした。日菜さんは顔が青ざめて反省はしたみたいだ。これに懲りたら軽く誰かに喋ることを控えてほしいものだな・・・

疾透 「ただいま戻りました。日菜さんをお返ししますね。あとプラネタリウムを二人分で」

麻弥 「何を話してたんですか？」

疾透 「ちよつと軽く注意をですね。まあ今日のステージ発表があるまではこの調子なので」

りみ 「あはは・・・疾透くんも大変だね・・・」

麻弥「何か日菜さんが迷惑をかけたみたいですね・・お二人の料金はジブンからの謝礼つてことでタダにしておきますよ」

りみ「え、いいんですか？」

麻弥「いいんですよ。先輩からの奢りつてことにしておいてください」

疾透「はあ：ならお言葉に甘えておきます。」

麻弥「それでは楽しんでください！」

俺たちはプラネタリウムを鑑賞し、プラネタリウムが終わった後は二人で感想を言いあつてとても楽しめた。それからひまりたちがいる2ーAやあこたちがいる1ーAに足を運んで色んなことをしゃべったりした。

【午後3時：廊下】

(ピロピロリン)

疾透「ん？携帯に連絡？りみ、ちよつと待つててくれ」

りみ「うん、わかったよ。ロックちゃんのところまで待つてるね」

《GYNE》

千聖「みんな、そろそろ時間よ。体育倉庫に集まりましょうか。私はイヴちゃんをたえちちゃんと合流させてから向かうわ」

蘭「もうそんな時間なんですね。適当に理由をつけてモカと別れて合流します」

美咲「あたしも花音さんを市ヶ谷さんと合流させてからそっちに向かいます」

あこ「あこも明日香とロックにカツコいい理由をつけて向かいます！」

疾透「わかりました。俺はりみを香澄たちと合流させてからそっちに向かいます」

《GYNE終了》

疾透「りみ、悪いけど俺は行かなきゃならないから香澄たちを隣に教室に呼んでるか

ら香澄たちと体育館まで一緒に来てくれ」

りみ「うん。疾透くんも頑張つてね！」

疾透「それじゃあ行つてくる。」

俺はりみと別れ、他のバンドメンバーに見つからないように注意を払って体育倉庫に向かった

【体育倉庫】

疾透「いよいよ本番か・・・練習期間は短かつたけど精一杯のことはやれた。あとは俺たちにできることをやるだけだ」

千聖「そうね。私たちは即席のバンドだったけどみんなとは仲良く練習に励めたし」

蘭「それに、このメンバーじゃなきや奏でられなかつた音を作ることができた」

あこ「あこもです！こんなにカッコいい音を奏でたことはありませんでした！」
美咲「ですね。美竹さん風に言うなら『あたし達のいつも通り』なのかもしれませ
ね。」

疾透「そうだな。あ、日菜さんがステージに上がったぞ」

【体育館：ステージ】

日菜「みんなー！羽丘学園のステージでの披露、楽しめたかなー？」

香澄たち「「「はーい!!」」」

日菜「それじゃあ、ここまで楽しんでくれたみんなに一つビッグサプライズだよ！麻
弥ちゃん！照明オフ！」

(バチン！)

【体育館：観客席】

香澄「うわっ!? なになに!?」

たえ「うわあー、真っ暗だー」

有咲「一体何が起きるんだよ!? まさかまたこの間のように誰かさられるのか!?!」
リサ「ヒナのことだから何か企んでるとは思ってたけど今度は何なんだろうね?」

花音「ふえええ…何が起ころんだろう…」

モカ「ひーちゃん、つぐー。二人は知ってるー?」

つぐみ「ううん、知らないよ。ひまりちゃんは?」

ひまり「私も知らないよー…」

(パッ!)

こころ「明かりがついたわ! あら? あそこにいるのって…」

【体育館：ステージ】

疾透「羽丘学園と花咲川学園のみなさん、そして招待を受けてきてくれたお客様、こんにちは。花咲川学園高等部2年、ギター兼メインボーカルの森睦疾透です」

千聖「花咲川学園高等部3年、ベース担当の白鷺千聖です」

あこ「羽丘学園高等部1年、ドラム担当の宇田川あこです！」

美咲「花咲川学園高等部2年、DJ担当の奥沢美咲です」

蘭「羽丘学園高等部2年、ギター担当の美竹蘭です」

疾透「俺たちは」

全員「『『Various colors』です！』」

疾透「驚いている方もいらっしやると思いますが、俺たちは羽丘学園生徒会長の氷川日菜さんに頼まれ、今日はサプライズライブをすることになりました。」

千聖「私たちは疾透くんから声をかけられ、今日のためにバンドを組むことになったんです。」

あこ「最初はみんな驚きましたが、すぐに意気投合して今日のためにひたすら努力を重ねました！」

美咲「今日限りのバンド演奏ですけど、楽しんでくれたら嬉しいですよ」

蘭「それじゃあ・・・聞いてください。」

疾透「『Connected beat』！」



香澄「えーっ!? 疾透くんこんなことしてたの!? ずるいずるい!」

有咲「りみと沙綾はこのこと知ってたのか?」

沙綾「うん。疾透くんに言われてこのことは黙ってたんだ。きつとみんなが知ったら心配するだろうからって」

つぐみ「疾透くんがメインボーカルなんだね。でもいくつかのパートに分かれてるみたいだから各パートでみんなが歌うんだね。なんだか私たちみたい」

巴「だな。というかこの曲、誰か知ってるか?」

友希那「いいえ、私は知らないわ。初めて聞く曲よ」

リサ「友希那でも聞いたことないんだ。それじゃあこれって…」

花音「多分、疾透くん達で作った曲だよ。」

こころ「いいわね! みんなとーってもいい笑顔よ!」

【演奏終了後】

疾透 「今日は俺たちの演奏を聴いていただき、ありがとうございました」

千聖 「急なことで驚いた方も多いと思いますが、いかがだったでしょうか？」

あこ 「みなさーん！あこたちの演奏、どうでしたかー!？」

(パチパチパチ・・・)

蘭 「皆さん、ありがとうございます。」

美咲 「これであたし達、『Various colors』の演奏は終わりです。今日はサプライズバンド演奏を聞いていただき・・・」

全員 「ありがとうございます！」

【体育倉庫】

疾透 「終わったな・・・みんな楽しんでくれてよかったよ」

千聖 「ええ、私たちが出てきたときに驚いたみんなの顔が見れてよかったわ」

あこ 「はい！あこもおねーちゃんにカッコいいところを見せることができてよかったです！」

美咲 「あたしもミッシェルとしてのあたしじゃなくて奥沢美咲として演奏できてよかったです」

蘭 「偶にはこういうのも悪くはないね、今日はありがとう。」

(ピロリン)

疾透 「あ、悪い。俺のだ。急で悪いけど行かなきゃいけなくなったところがあるから俺は行くぞ」

蘭 「・・・そう。お疲れさま、疾透。香澄たちには言つてあるの？」

疾透 「いや、伝えているのはりみと沙綾だけだ。とりあえず俺は行くぞ」

あこ 「お疲れ様です疾透さん！」

俺は体育倉庫を後にしてR A Sのみんなが待つアパートへと向かった。

それから俺たち R A I S E A S U I L E N のメンバーは夜通し『R・I・O・T』を練習して、完璧と言えるくらいに音を合わせてみんなでアパートに泊まった。明日は文化祭を途中で抜けて R A S のデビューライブだ。そしてチュチュに俺の数か月間に考えた答えを出す日でもある。俺がチュチュに出す答えは・・・

23話：出した答え

9月23日

今日は花咲川での文化祭、そしてRASとしての俺のデビューライブの日だ。俺たち21Bはお好み焼きを作ることになっている。りみとこころは客引きで、沙綾は接客、俺はお好み焼きを作る役だ。一応りみと沙綾には今日の俺の予定を伝えてあるし、その時になったら沙綾が俺と役目を交代し、こころは接客に移る形になる。りみ一人で客引きができるのかと最初は不安だったが、自分から『客引きをやりたい』なんて言ったりみは初めてだった。引っ込み思案だった性格を変えたのか、俺たちの負担を減らしたかったのか…その言葉の真意をりみは教えてくれなかった。香澄たちのことは有咲たちが何とかしてくれるから大丈夫…だろう

【2—B】

りみ「おはよう、疾透くん。今日は頑張ろうね」

疾透「ああ、今日は俺たちが接客側だ。羽丘の生徒や招待客を楽しませないと」

沙綾「ごめんね疾透くん。今日は疾透くんに任せる形になっちゃって…今日は後でRSのライブの準備もあるのに」

疾透「別に大丈夫だよ。一人暮らしになってからいろんな料理に手を出し始めたし、沙綾たちに作ってあげたこともあっただろ？」

沙綾「あの時はごめんね…香澄たちがお好み焼きを好きだなんて知らなかったから8人分のお好み焼きの材料がなくなってる…」

疾透「あの時は本当にな…香澄たちが帰った後はまたお好み焼きの材料を買いに

行つたよ・・・しかも10人分の」

りみ「でも、疾透くんの作つてくれたお好み焼き、とてもおいしかったよ？」

疾透「そう言つてくれると作つた側としても嬉しいよ。」

こころ「さあ疾透！疾透のお好み焼きでお客さんたちを笑顔にしましょう！」

疾透「ある問題児が数人分を買つていかなきゃな・・・材料だつて無限じゃないんだし」

沙綾「あはは・・・モカには厳しく言つておくから」

疾透「ああ、頼む。」

りみ「そろそろだね、私は客引きに行つてくるよ」

こころ「ええ！りみ、行きましょう！」

沙綾「私はここで接客だからしばらくは教室から出れないからまた後だね」

疾透「こころ、あまりりみを振り回すんじゃないぞ」

俺たちは別れ、それぞれの役割についた。ちなみに露店ついでいっても店員さんと話す

ことはできるので暇を持て余すことはない：だろう。

【午前8時：2ーB】

麻弥「おはようございます疾透くん！」

疾透「おはようございます麻弥さん。今日は明日香と一緒になんです」

明日香「大和先輩が私と一緒に回りたいって誘いに来たので断るのもあれなので一緒に回ることにしました」

疾透「これを機に明日香の人脈を広げるのもいいかもな。いつもはポピパのメンバーとかあこぼかりとしか話さないだろ？」

明日香「確かに考えてみればそうですね。大和先輩たちは今年で卒業しちゃうので今のうちに先輩たちとお話しておきたいですね」

麻弥「ジブンなら空いてる時間はいつでも歓迎ですよ。機材の話から猫の話などたくさん話すことはありますから！」

疾透「明日香・・・麻弥さんがヒートアップするのって機材の話だけじゃないのか？今知ったんだけど」

明日香「そうみたいですわね．．．あ、お好み焼きニパツクお願いします」

疾透「はい、もうできてるから持つて行つてくれ。他のみんなにもよろしくな。」

麻弥「はい！それではまた！」

明日香「あこたちにもこの店のこと教えてきますね」

そう言つて明日香たちは教室を後にした

【数分後】

モカ「おはよーはやくーん」

蘭「おはよう、疾透。」

沙綾「あ、モカたちじゃん。おはよう」

疾透「Afterglowメンバー勢ぞろいでお出ましか。こりや作るのが苦勞しそ
うだな・・・」

つぐみ「そんなに張り切らなくても大丈夫だよ？一回り大きいのを2つくらいで大丈
夫だから・・・」

疾透「あー、みんなで分けて食べるのか。それならそれでいいか」

ひまり「あ、あとカロリーは控えめで・・・」

沙綾「あ、もしかしてひまり・・・太って」

ひまり「言わないで！」

疾透「なるほど、コンビニスイーツを食べすぎt」

ひまり「だーかーらー！言わないでー！私が一番わかってるから！」

巴「とまあ：こんな感じなんだよな：疾透、できるか？」

疾透「出来なくはないかもしれないけど・・・難易度高めだなこりや：やれるだけやつ
てみるよ」

蘭「ありがと、疾透。」

俺はできるだけカロリーを控えめにしたお好み焼きを作るとパックに入れて蘭たち
に渡した。

【午後12時：2ーB】

沙綾 「疾透くん、お疲れさま。昼休憩だから私たちも一度休憩しよつか。」

疾透 「そうするか…あー、あと3時間か…」

沙綾 「あと2時間30分くらいしたら準備を始めて大丈夫だよ。」

疾透 「悪いな。一応確認だけドライブが始まる時間は・・・」

沙綾 「午後6時から、だったよね？疾透くん達は7時からだったっけ？」

疾透 「ちゃんと覚えててくれたんだな」

沙綾 「私は物事のスケジュールは何度も確認するタイプだからね。」

疾透 「まあ俺も結構注意深いからな。」

沙綾 「疾透くん・・・頑張ってるね」

疾透 「あ、ああ…」

ん？なんだ、今の沙綾の区切ったような間は…もしかして沙綾、不安なのか？俺が遠くに行ってしまうそうだって…そんな感じなのか？そういえば去年バンドを組む前には沙綾のお母さんが倒れたらしい…あんな思いはしたくないって感じだな…

【午後2時30分：21B】

疾透 「さて…とそろそろ時間か…」

沙綾 「そうだね、あとのことは私たちに任せて行ってらっしゃい。香澄たちにはうまく誤魔化しておくから」

疾透 「悪いな…それじゃあ行ってくる。」

沙綾 「私たちも学園祭が終わったらすぐにそっちに行くからね」

疾透 「楽しみにしてくれ」

そう言って俺は教室を後にした。学園長にはすでに説明済みなので香澄たちに見つからなければ大丈夫…なはずだ。そんな心配はなく、無事に誰にも見つかることなく俺

は花咲川学園から出ることができた。まずはアパートに向かって今日演奏する『R・I・O・T』の最終調整だ。

【午後5時：アパート】

疾透「さて：もうそろそろ向かわないと集合時間に間に合わないな」

チュチュ「そうね。デビューライブ当日に遅刻するなんてありえないわ。」

ますき「まあ、私たちなら大丈夫だろう。ここまでの道のりは長かったが」

パレオ「私たちにとってはこれが初めてのライブです！昨日のハヤトさんの学園祭で見せてくれたライブに負けなくらいに音を届けますよ！」

レイ「ああ、それにこのライブが終わってから疾透の答えを聞くことになるんだ。」
チュチュ「そうね：ハヤブサの答えが何であれ、私たちはそれを受け入れるのよ」
疾透「それじゃあ・・・行くか」

そう言つて俺たちはライブハウス『Ruby & Sapphire』へと足を進める。
その道中で俺はある人に連絡を取り、ライブが終わった後に来てもらう形になった。

【午後6時30分：Ruby & Sapphireステージ裏】

疾透「いよいよ本番か・・・このバンドが終わったら俺たちだ」

チュチュ「そうね・・・」

疾透「なんだチュチュ、緊張してるのか？」

チュチュ「してるわけないでしょ!!それは藪からステイクよ!」

疾透「それを言うなら『藪から棒』だが・・・それくらい言えるなら緊張も何もないか」

チュチュ「ふん！このチュチュ様をからかうなんて1億年早いのよ！」

疾透「・・・っと、終わつたみたいだな。」

パレオ「それでは参りましょうチュチュ様！」

俺たちはステージへと足を進める。これが終わつたら：

【午後6時50分：Ruby&Sapphireステージ前】

香澄「りみりん、沙綾？この後何があるの？」

沙綾「それは見てからのお楽しみだよ香澄」

友希那「それにしても、私たちまで呼ぶなんてよほど次のバンドがうまいという事な

のかしら…」

紗夜「山吹さんの話によると、『みんな聞いてほしいバンドがある』とのことなので・・・」

蘭「ひまりたちは何か聞いてない？」

ひまり「えつと、『RAISE A SUILEN』ってバンド名くらいかな。」

美咲「花音さんは疾透さんから何か聞いてないんですか？」

花音「私も何も聞いてないんだ…ごめんね美咲ちゃん」

千聖「私も疾透くんからは何も聞かされていないのよね」

イヴ「はい、これから何が起こるのでしょうか？」

(バチン！)

有咲「うわ、またかよ!?!今年で何回照明が消えるのを目にすればいいん・・・だ・・・？」

照明が付いた直後、香澄たちが目にしたのは・・・

「ステージ」

疾透「どうも初めまして、RAISE A SILENです。」

チュチュ「私たちはまだ結成されてすぐのバンドだけど、本格的な練習をして今ここに
いるわ！私はDJ担当のチュチュよ！」

ますき「私はドラム担当、佐藤ますきだ。このバンドではマスクングなんて呼ばれて
いる」

パレオ「私はパレオといいます！担当パートはキーボードで、ここにいるメンバーで
は一番の若輩者です！」

レイ「私は和奏レイだ。RASではベースとメインボーカルを担当している。バンド
ではレイヤと呼ばれている」

疾透「そして俺がRASのリードギター、森睦疾透です。このバンドではハヤブサと言われています。だけど俺はまだ正確には仮メンバーで、今日のライブで答えを出します。それでは聞いてください・・・」

RASメンバー「[[[[R・I・O・T]]]]」

有咲「おいまさか…疾透が言っていた用事って…」

りみ「みんなに当日まで隠しておいてほしいって疾透くんが・・・」

有咲「私たちに黙ってこんなことしてたのかよ・・・」

香澄「でも・・・いい音出てるよ有咲。疾透くんのこれまでに積んできた努力の結晶がキラキラドキドキしてる」

りみ「(疾透くん…)」

疾透「ありがとうございます」

チユチユ「もつとたくさんの音を奏でたいところだけど、私たちには今これしかないわ。私たちが本格的に動く時：私たちの全力の音楽を見せてあげるわ！それじゃあ行くわよ！」

【午後7時30分：Ruby & Sapphire外】

RASの演奏が終わり、Poppin, PartyとRAISE A SUILENメンバー全員が外に集まっていて、もちろん呼んだのは俺だ。Roseliaやパレのみんなは先に帰っていた

有咲「で、大事な話って何だ？」

疾透「大事な話っていうのは他でもない、今後の俺の方針についてだ。俺はポピパのマネージャーとRAISE A SUILENのリードギターをやりながら答えをずっと探していたんだ。」

香澄「答えって？」

疾透『どっちのバンドに俺がいるのか』だ。両方のバンドにいるなんて俺にはできない。だから俺は二つのバンドの活動をしながらずっと考えていた」

チユチユ「ハヤト、聞かせなさいあなたの答えを」

疾透「俺の居場所は・・・やっぱPoppin, Partyなんだ。短い間だったけど、チユチユたちと演奏できたことは本当にうれしかった。でも・・・」

チユチユ「そう：ハヤトがたどりついたのはそれなのね。ハヤトがいてくれたからこ

そ R A I S E A S U I L E N はここまでたどり着いた。私たち R A I S E A S U I L E N は解 s . . .」

疾透「でも俺は、チュチュたちの居場所を失くさせたくないんだ。だから俺はここに
ある人を呼んでいる」

りみ「ある人：？」

疾透「出てきてくれ」

??「は、はい！」

外に出てきたのは . . .

香澄「ロック!」

そう、俺が連絡を取ったのは朝日六花だった。俺は R A I S E A S U I L E N の練習とポピパのマネージャーをやりながらみんなに秘密で六花にギターを教えていたんだ。体への負担は大きかったが、六花は技術のみこみが早く、気が付けば俺よりもギターの技術は上になっていった。そんな六花を見込んで、俺は六花に『俺はポピパのマネージャーになる。だから俺の代わりに R A S に入ってチュチュたちのことを支えてあげてほしい』と頼んでいたのだ。

六花「わ、私は朝日六花といいます！疾透さんにギターを教えてもらって、疾透さんから詳しい事情を聴きました！」

チュチュ「もしかして・・・ハヤト、あなた」

疾透「正確はあまりしつかりしてないけど、六花は俺が認めた後輩だ。ギターの技術は俺よりもしつかりしてるし、俺がいなくても六花ならRASに空いた穴を埋めることができるだろうと思ってるな。」

チュチュ「私たちの音楽はとても厳しいわよ?」

六花「承知の上です!」

チュチュ「そう、ならついてきなさい六花。あなたは今日からRAISE ASU
ILENのリードギターよ!」

六花「は、はい!頑張ります!」

チュチュ「そうと決まればこれから練習よ!新しい曲が浮かびそうだから今度のライブは六花に出てもらおうわ!」

六花「ええっ!?これからいきなり練習ですか!」

六花がそういうとチュチュは六花の手を引つ張ってRASの練習場であるアパートに走っていった

疾透「・・・行つたな。というわけだみんな、今まで隠していてすまなかつた」
有咲「ちよっ!? 頭を軽々しく下げるんじゃないよー! まるでこつちが悪いみたいじゃ
ねーか!」

香澄「そうだよ疾透くん! 頭を上げてよ!」

たえ「疾透くん、私たちに隠し事をした罰を受けてもらおつかな。」

りみ「お、おたえちゃん!? 疾透くんに罰なんて!」

たえ「大丈夫だよりみりん。疾透くんにとっては軽いものだから」

沙綾「おたえ、どんな罰なの?」

たえ「うーん: 私たちの目の前で疾透くんとりみりんがキス・・・とかかな」

有咲・疾透「「ぶっ!」」

有咲「はあああ!?! いきなり何言ってるんだよおたえ!! いやりみと疾透が付き合ってる

のは知ってるけどな・・・何も今私たちの目の前でキ、キスなんて・・・」

りみ「そ、そうだよおたえちゃん！みんなの前でキスなんてめっちゃ恥ずかしい・・・！」

たえ「できないの？」

疾透「お前ら・・・そんなこと、俺らがいるときに言えないようにした方がいいか？」

香澄「え？どういう意味？」

疾透「こういう意味だよ」

俺はそういうと、りみを抱き寄せてキスをした。もちろん、他のポピパメンバーの目の前で。

香澄「わ、わわわ・・・！」

たえ「おおー、大胆」

有咲「わ、私たちの目の前で本当にするかよ・・・!!もう少し場所を考えろ！」

沙綾「見せつけてくれるね、疾透くんとりみ」

疾透「・・・これでもまだそんなこと言えるか？」

たえ「さすがにこれだけ見せつけられたら何も言うことはないかな。それより疾透くん、りみりんは大丈夫？」

疾透「え？」

俺はりみの顔を見ると、りみは目をまわして顔を真っ赤にしていた。

疾透「：やりすぎたか。いきなりだったからな・・・よ・・・つと」

俺はりみをおんぶした

疾透「さすがにこんな状態では家まで帰るのは至難だろうしな・・・今日は俺の家に泊めるよ」

沙綾「うん、そうした方がいいかもね・・・それじゃあまた今度ね疾透くん」

疾透「ああ、またな。」

俺たちはそれぞれの帰路についた：

あれから俺は家にりみをおんぶして帰った。少し時間が経った後俺の家でりみは目を覚まし、事の経緯をりみに説明した後、りみは恥ずかしがりながらも俺に抱き着き、先ほどのお返しするようにキスをしてきた。そしてりみは俺に言う。『おかえり』って。俺は『ただいま』と返す。俺に居場所を与えてくれた恋人は今俺の隣で優しく微笑む。この恩を返すために俺は決意をする。そのためにも……

24話：未来への誓い

RASのデビューライブが終わり、日にちがさらに経った。あれからRAISE A SUILENもうまくいつてるようで、六花の笑顔の写真がチュチュを通じてGYNEで送られてくることもあった。新曲も何曲かできたらしく、今度のライブで歌ってくれるという。それからというものは、ポピパを始め、AfterglowやRoseliaも新曲が出来上がったらしいので主催ライブで一番に歌うという。俺はというと、ポピパのマネージャーを続けている。偶に時間がある時は週1のペースで別のバンドに顔を出すようにしている。その時はポピパのメンバーに前もって連絡を入れておくようにしたのでその時は香澄たちも気兼ねなく練習に集中できるので少しは成長できる：だろう。そして冬休みに入ろうとした時、一つの連絡が来た。連絡をくれたのは彩さんで、クリスマスイヴの日はパスパレのみんなはオフらしいのでその時くらい

かみんなでおフの時がないらしいので他のバンドにその日の予定を聞いてみたところ・・・

A f t e r g l o w 『うん、大丈夫だよ。その日は予定空けておくから』

R o s e l i a 『ええ、特に予定はないわ。』

ハロハピ 『大丈夫よ！問題ないわ！』

R A S 『F i n e、その日は空いてるわ』

という感じに、ものの見事に全バンドがOKを取れたので、クリスマスイヴにポピパの主催ライブを行う形になった。(ちなみに、RASのことはポピパのみんなには伝えてない)

12月23日

【午後2時：流星堂】

疾透 「明日は主催ライブの日か：セトリリストも新曲ばかりだけど俺も一生懸命サポートするからみんなはお客さんを楽しませることに専念してくれ」

香澄 「うん！お客さんにも明日香にもキラキラドキドキしてもらおう！」

たえ 「オツちゃんも連れてきてもいいかな？」

りみ 「お姉ちゃん、今年家は家に戻ってくるって言ってたし明日のライブは見に来てくれるって」

沙綾 「うちもお母さんとお父さん、弟と妹も来てくれるって」

有咲 「私の所も婆ちゃんが来るって。無理しなくてもいいんだけどな・・・」

疾透 「うちの姉さんは向こうで勉強するとかでこっちは帰ってこれないらしいから主催ライブまでは俺一人で家にいることになるな」

香澄 「それじゃあ今から疾透くんの家に泊まろう！」

有咲 「おい!?なんで今の流れでそうなるんだよ!!いくら疾透が家に一人だからって
：」

疾透 「どうせ帰っても『Ruby & Sapphire』に連絡とるだけだから大丈夫だぞ。」

沙綾「え、いいの？他にやることがあったりしないの？」

疾透「宿題も結構終わってるし、宿題は空いた時間にでも終わらせるから大丈夫だ。」
有咲「だから宿題を済ませるのが速すぎんだろ！去年もクリスマス前には大体終わってたよな!!」

疾透「まあ、な。それよりみんなは何時くらいに来るんだ？」

ポピパメンバー「「「午後6時くらい」「」」」

疾透「了解、それじゃ俺は帰ってお泊りの準備をしておくから着いたら連絡を入れてくれ」

りみ「うん。」

それから俺は流星堂を後にして、家に戻り布団を姉さんの部屋に3つ、俺の部屋に2つ敷いた。それからほどなくして香澄たちが来て、主催ライブ前日のお泊り会が始まった。枕投げ、思い出話、人○ゲーム、ツイ○ターゲームなどで盛り上がった。一番最後のやつだけはたえと沙綾を除く全員が声にならない悲鳴を上げていたのでさすがに途中でやめた。

12月24日

今日はポピパの主催ライブの日だ。参加バンドはPoppin' Party、Afterglow、Pastel*Palettes、Roselia、ハローハッピーワールド、RAISE A SUILENの6組だ。俺は準備で午前中から『Ruby&Sapphire』で準備のため早くから向かわなければならなかったため、ポピパのメンバーの最終調整は聞くことができなけれどライブで聞くこともできるしそこは心配はしなくていいだろうから俺は俺のやるべきことをするだけだ。

【午前10時：『Ruby & Sapphire』スタジオ内】

疾透「悪いな琳禰（りんね）、クリスマスで他の所のバイトで忙しいっていうのにライブの準備に付き合ってもらって」

琳禰「大丈夫だって。私だってここでバイトしてるんだし、私だってバンドやってるんだからお手伝いするのは当たり前だよ」

【オリキヤラ紹介：桐碕琳禰（きりさきりんね）。1学期の半ばに花咲川学園の高等部2年へ転入してきた転校生。りみや沙綾と同じクラスで、誰とでもすぐ打ち解けられる底なしの明るさの持ち主。こっちに来てからは羽丘と花咲川にいる学生とバンドを組んでいる。バンド名は『Eagle wind』（イーグルウインド）で、始まりは俺がギターを演奏できることを教えたら『ギターを教えてほしい』と頼まれたので教えたら持ち前のセンスの良さですぐに技術を身に着けた。バンドではギター兼メインボーカル。他のメンバーも『Ruby & Sapphire』でバイトしている。メンバー構成は羽

丘から2人、花咲川から3人だ」

疾透「今日は他のメンバーもこっちでバイトなのか？」

琳禰「うん、もうすぐステージのセッティングが終わってこっちに戻ってくるころだと思うけど：あ、来たね。結佳（ゆうか）、玲南（れな）、宥（ゆう）、遙（はるか）」

結佳「おはよう、疾透くん。今日はよろしくね」

玲南「おつはよーございます！疾透先輩！」

宥「うちの玲南が朝早くからうるさくてすみません：」

遙「まあ楽しければ万事オツケーってことでー」

〔まとめてオリキャラ紹介：風見結佳（かざみゆうか）。羽丘学園の高等部2年に通っている同い年で蘭たちと同じクラス。『Eagle Wind』のベース担当。落ち着いた性格で何事にも冷静沈着に対応する。〕

結佳の左隣にいるのは羽崎玲南（はぎきれな）。花咲川学園高等部1年生で、『明るさが取り柄ですから！』と言うだけのことはある元気いっぱいな後輩。バンドではドラム担当。元気がよすぎて前に走りすぎてはバンドメンバーにストップをかけられている。

玲南の右隣で呆れてるのは羽崎宥（はぎきゆう）。玲南の姉で花咲川学園の高等部2年で、クラスは琳禰とは違い美咲と同じクラス。バンドではキーボード担当でリーダー。元気がいい玲南とは対照的で落ち着いた性格。バンドの歌詞を書くことが多い、

結成して半年で2曲も作ることができたのは宥のおかげだとか。

最後に、結佳の後ろで玲南の頭を撫でているのは白兔奈遙（しらとなはるか）さん。羽丘学園の高等部3年生で、バンドではリードギター担当。おっとりした性格で樂觀的な先輩。最初は『一番年上だからリーダーに』とか言われたらしいが、結佳が『夕の方がしつかりしてるから宥がリーダーがいい』と言ったらしく、遙さんも『いーんじやない？』と言ったらしいから流れでそうなったのだとか。

疾透「しつかし、よくみんなでこの時間に合わせられたな。」

玲南「疾透先輩がいるバンドのマネージャーの初めての主催ライブだと聞いたので無理矢理スケジュールを合わせました！」

疾透「…玲南？」

玲南「はい？」

疾透「今度からはちゃんと話し合おうな？」

宥「とまあ、玲南がオーナーに持ち掛けてこうなってるんです……」
遙「でも、みんなでこうして集まれるからいいかなーって」

疾透「やっぱり遙さんの考えることはわからないです……」

（ガチャ）

香澄「おっはよー！疾透くん！あ、玲南ちゃんと宥さん！」

蘭「それに、白兔奈先輩と結佳じゃん。今日はこっちでバイトなんだね」

結佳「まあ、玲南がオーナーに掛け合って今日はこっちでバイトすることになったんです…」

彩「疾透くん、今日はよろしくね！」

疾透「今日は主催ライブに参加してくれてありがとうございます、彩さん。」

友希那「今年最後のライブになるだろうから私たちの全力で今年を締めくくるわよ」
遙「がんばってねー」

こころ「今日はみんなでお客さんを笑顔にするわよ！」

玲南「弦巻先輩、全力ガッツで全力ファイトです！」

ちなみにチュチュたちは少し遅れてやってくるという。

疾透「それじゃあ、順番を決めるか。Poppin, Partyは最初に1曲してから他のバンドが終わってからもう1曲やる感じで、他のバンドは…」

順番はポピパー→ハロハピー→パスパレ→Afterglow→Roselia→RA
S↓ポピパという順番になった。

疾透「じゃあ、他のみんなは楽屋でゆっくりしてくれ。こっちでまだ話し合うことがあるからそれが終わったら合流するよ。」

香澄「オツケー！それじゃあまた後でねー！」

香澄たち5組のバンドは楽屋に足を進めた

疾透「じゃあ、照明とかの順番はここにあるから、あとは…」

結佳「後はここをこうする感じでいいんじゃないかな？ここもこんな感じで…」

玲南「ここはこうでここをこうでババァンって感じでどうでしょう？」

疾透「他のバンドに合うように照明を照らさないと…ここは…」

そんなこんなで、『Eagle wind』のメンバーと照明のリストを更新したりしているうちに…

チュチュ「おはよう、疾透」

疾透「チュチュ、おはよう。もうみんな楽屋に入ってるぞ」

チュチュ「わかったわ」

琳禰「疾透くんも楽屋に入っていて大丈夫だよ。こっちは私たちで何とかするから」

疾透「いいのか？なら言葉に甘えるけど」

チュチュ「疾透、楽屋まで案内しなさい！私たちはここでライブをしたことがないからわからないのよ！」

疾透「そこまで大きな声を出さなくても案内するからちゃんとしてきてくれ」

そうやって俺はロビーを後にしてチュチュたちRAISE A SUILENを楽屋に案内した

【楽屋】

疾透 「おまたせ、みんな。」

りみ 「疾透くん、話し合いは終わったの？」

疾透 「話し合いは終わったけど、後のことは琳禰たちがやってくれるからってこっちに来た。あとここではライブをしたことがないってバンドがいたから案内も兼ねて」

有咲 「誰だ？蘭ちゃん、どこか知ってるか？」

蘭 「ううん、あたしたちはここはあまり使わないからそういうのは知らないんだけど・・・疾透、どんなバンドなの？」

疾透「百聞は一見にしかずってな。それじゃあ入ってきてくれ」

チュチュ「Hello everyone。」

六花「こ、こんにちは皆さん！」

香澄「ロツクー!?!」

疾透「とまあ、今日の特別ゲストのRAISE A SILENだ。」

有咲「だからこういうことは先に言えよ!!」

六花「あ、それは私が言ったんです。『ポピパの皆さんを驚かせたい』って…」

たえ「ロツクがそう言うなら仕方ないよ有咲」

有咲「仕方なくねー!!」

とまあ、有咲が俺やら六花やらに説教に近いことを言ってきたが六花の詳しい説明で納得したのか静まった。

【午後3時】

疾透 「そろそろポピパの順番だな、準備はいいか？」

香澄 「うん！ 私たちはオツケーだよ！」

疾透 「じゃあステージに向かってくれ、後の段取りは有咲に説明してあるから有咲の言葉に従って行動してくれ」

沙綾 「了解。それじゃあ有咲、お願いね」

有咲 「お、おう・・・」

俺はポピパをステージの裏まで案内した後、楽屋に戻った。RASのメンバーは口ビーに行っていて楽屋にはいなかった

モカ「ねーはやくん。有咲から聞いたんだけどRASのメンバーにならなかつたんだってー?」

疾透「有咲：俺には隠し事どうの言ってるのに人には軽く話すのかよ…まあそうだな、俺はRASのメンバー加入を断つたのは事実だよ。」

友希那「なぜ断つたの? 学園祭であんなにすごい演奏ができたのに」

疾透「まあ、色々あつてですね。深くは聞かないでくれると助かります」

日菜「ふーん? 色々…ね?」

疾透「日菜さんが考えてることとは9割9分違いますから」

などと話しているとポピパの演奏が終わり、順番に演奏が終わってクリスマスイヴらしい主催ライブは終わった。最後なんて海外から姉さんが送ってきたサンタコスチュームをポピパメンバーが着て『Dreamers Go!』を演奏した。姉さん、どれだけサンタコスチュームが見たいんだよ…そんなに見たいなら自分で着ればいいのに…

【楽屋】

疾透「みんな、お疲れ様。ポピパのメンバーに関しては初めての主催ライブもお疲れさまだな」

香澄「疲れたー！早く帰ってあつちゃんに今日のライブの感想を聞いてもらおうつと！」

たえ「私もおつちゃんたちに聞いてみようつと」

沙綾「私も今日は家族で感想とかを聞き明かしたいなー」

有咲「私も婆ちゃんに聞いてみるか・・・」

りみ「私もあとでお姉ちゃんに感想を聞こうかな。」

蘭「あたしもお父さんに感想聞こうかな・・・」

そんなこんなで、今日は他のメンバーは家族やら友人に感想を聞こうなどと話して、今日は解散となった。

りみ「疾透くん、話したいことって何？」

疾透「まあ、ちよつと待ってくれ。一人呼んでる人がいるから．．．つと。そんなことを言ったら来たな。入ってきて丈夫ですよ」

(ガチャ．．．)

ゆり「こんばんは。りみ、疾透くん」

りみ「お姉ちゃん？疾透くん、呼んだ人ってお姉ちゃんなの？」

疾透「まあな。ゆり先輩にも聞いてほしくて」

ゆり「私に聞いてほしいってことは大事な話なの？」

疾透「そうですね、それでは本題に入ります。」

ゆり先輩とりみは息をのんで俺の話に耳を傾けた。俺が二人に聞いてほしかったのは．．．

疾透 「ゆり先輩、りみを・・・俺の嫁にください」

ゆり 「疾透くん、それって：りみと結婚したい、ってこと？」

疾透 「：はい。俺はりみの隣でずっと支えてきました。時にはRASの練習に顔を出したりして練習風景に立ち会ってくれたり、学園祭で一緒に回ってくれたりもしました。りみは俺にとつて、俺に居場所を与えてくれた恩人なんです。そんなりみだからこそ：俺はりみの隣でこれからの人生を歩んでいきたいんです。まだ俺たちは高校生なので学生結婚なんて俺たちにはできないかもしれないけど・・・俺に居場所を与えてくれたりみへの俺なりの恩返しなんです。」

ゆり 「：そう、それが疾透くんが言いたかったことなのね。それじゃあ今度は・・・りみに聞こうかな」

りみ 「わ、私に？」

ゆり 「りみは疾透くんの今の言葉、どう思ってるの？」

りみ 「わ、私は：疾透くんと同じ気持ちだよ。引つ込み思案だった私を変えてくれたのは疾透くん、私とお姉ちゃんやんが喧嘩した時も疾透くんは誰よりも私たちのことを心配してくれた。私が変われたのはお姉ちゃんやんと疾透くんのおかげ：だから：わ、私も疾

透くんとずっと一緒にいたい！」

ゆり「：そっか、それがりみの答えなんだね。疾透くん。」

疾透「はい」

ゆり「りみのこと、お願いね。まだりみは引つ込み思案な性格は変わってないけど、これから何度も壁にぶつかっていくかもしれない。でも疾透くんならりみのことを任せられるから」

疾透「はい。ゆり先輩の言葉、肝に銘じておきます。」

ゆり「りみ。」

りみ「お姉ちゃん・・・」

ゆり「疾透くんとこのこれからの人生、楽しんでね。つらい時でも笑顔を忘れなければ大丈夫だから」

りみ「：うん！お姉ちゃん！」

ゆり「それじゃあ私からの話はこれでおしまい。それじゃあ二人とも、幸せにね」

そういつてゆり先輩は楽屋を後にして、少し時間が経った後俺たちも『R u b y & S a p p h i r e』を後にした・・・

【森睦家：リビング】

あの後、ゆり先輩たちGlitter*Greenは家で感想会をすると連絡が入ったので俺とりみは俺の家で話をしてからりみを一旦家に帰すことにした。

疾透「…今年は色んなことがあったよな。初日の出を見に行ったり、ハロハピに巻き込まれたり…」

りみ「疾透くんがRASの練習に行くようになってなかなかスケジュールが合わなかったときとか文化祭を一緒に回ったりしたよね。」

疾透「そういえばりみ、去年のこと覚えてるか？」

りみ「うん、去年のクリスマスイヴのことだよ？覚えてるよ。疾透くんから告白さ

れて・・・」

疾透「それから俺たちは恋人になって、今日までずっと一緒に同じ時間を過ごした。りみと一緒にいた時間はとても幸せな時間だよ。りみ…」

りみ「疾透くん？」

疾透「改めて言わせてほしい。りみ…俺と…結婚してくれないか？」

りみ「うん…うん…！私も疾透くんとこれからの人生を一緒にいたい！」

疾透「りみ…」

りみ「疾透くん…」

俺たちは見つめ合って、誓いのキスをする。そう遠くない未来に俺たちは結婚して二人で同じ人生を歩むために。りみと恋人になってからずっと考えていた、俺がりみに出

したかった答えがこれだ。りみが俺に居場所を与えてくれたように、今度は俺がりみの新しい居場所を作る番だ。りみと一緒にどんなことも乗りこえていける・・・そんな思いを胸に秘めて俺は誓う。

『俺はりみとずっと一緒にいる。これから先、俺たちにくくつもの困難や試練が待っているかもしれない。でも俺たちは諦めず目の前のことに立ち向かって乗り越える』

最終話：小さな森に花は咲く

クリスマスイヴに行ったポピパの主催ライブが終わって2年経った。あの日の約束を果たし、高校を卒業してすぐに俺とりみは結婚して夫婦となった。水夏姉さんたちは短期大学に通っていたため、卒業と同時に東京に帰ってきて俺とりみの結婚式に参列してくれた。主催ライブに来てくれたバンドメンバーやゆり先輩、たくさんの人たちが来てくれた。香澄は大きさに涙を流し、ゆり先輩は嬉し涙を流して俺たちのことを祝福してくれた。ひまりはあいかわらず感動ものに弱く、香澄と同じで大きさに涙を流したりした。姉さんは海外の大学で一緒の寮に住んでいた彼氏と結婚していたと聞いた時は驚いたけど、『姉さんのことだから割り切ろう』と思ったため素直に祝福した。水夏姉さんたちは結婚したといっても彼氏は親元を離れて水夏姉さんの家・・・つまり森睦

家に住むとも言っていたので俺とりみはゆりさんの家の方で一緒に住むことになった。ちなみにゆりさんの家は名義がゆりさんの名前なのだが、りみは俺と結婚して『森睦りみ』と名前を変えているため多少だがややこしくなっている（ゆりさんは未婚なため名前はそのまま）

それから数か月が経ち、俺はある場所にいる。

6月7日

【午後2時：江戸川病院】

疾透「…」

ゆり「疾透くん、そんなに焦ってちや私も心配になるから一旦落ち着こう?」

疾透「そうは言っても・・・りみは今精いっぱい頑張っているのに俺はここでじっとしていることしかできないなんて…」

ゆり「でも疾透くん達が今まで頑張ってたおかげで今私は新しい命の誕生をこの目にすることができんだよ。」

ゆりさんが言ったこと・・・それは、今ゆりみ在必死に俺たちの子供を産もうと頑張っているところだ。時は昨日まで遡って…

6月6日

【午後3時：牛込家リビング】

疾透「ゆりみ、大丈夫か？そんなに無理しないで家事は俺に任せて・・・」

ゆりみ「ううん、大丈夫だよ疾透くん。」

疾透「でも、ただでさえゆりみはいつもより家事を頑張ってるし、何よりゆりみのお腹に新しい命が宿ってからもうすぐ1年になるだろ？」

ゆりみ「だからこそだよ。私たちの子供が産まれたら私はしばらく家事ができないし、今できることを・・・っ！」

疾透「ゆりみ!? ゆりさん! ゆりみ! が・・・!」

ゆり「りみ、しっかりして！疾透くん、救急車を呼んで！」

疾透「はい！りみ、しっかりしてくれ！俺が近くにいるから・・・」

りみ「は、疾透・・・くん・・・私は大丈夫：だから・・・っ！」

疾透「無理に喋らなくていい！今救急車を呼んでるから今は耐えてくれ・・・！」

そして今に戻る・・・

6月7日

【午後2時30分：病院ロビー】

疾透「あの時、俺がりみのかわりに家事をしていればりみは倒れずにこんなにつらい痛みを背負わずに済んだのに・・・」

ゆり「りみは昔も今もやりたいことがあったら全力で取り組む性格だからね……今この時もりみは全力で頑張ってる。」

疾透「……そうですね。今の俺にできることはりみに顔を合わせた時に笑顔で迎えることなので」

ゆり「そうそう。りみは私の妹で疾透くんは弟のようなものだから心配になるのは当たり前だからね」

疾透「……そうですね。ゆりさんは俺にとつては二人目のお姉さんみたいなものなので心配されるのは嬉しいですね。」

ゆり「こういう時はお姉さんに甘えてもいいんだよ？」

疾透「今はやめておきます。りみが今頑張ってるのに俺だけゆりさんに甘えるつてのはなんかりに悪いですし」

ゆり「そっか。そういうところ、疾透くんは変わらないよね」

疾透「ゆりさんこそ。」

(ガラガラ……)

疾透「あ、ドクター……りみは」

ドクター「百聞は一見にしかずです。あなたたちの目で確認してください」

ゆり「はい。疾透くん、りみのところに行こうか」

疾透 「はい」

俺とゆりさんはりみがいる病室に向かった

【午後3時：りみの病室】

疾透 「りみ、入るぞ。」

りみ 「疾透くん？大丈夫だよ」

（ガラガラ・・・）

ゆり 「りみ、大丈夫？」

りみ 「うん、大丈夫だよお姉ちゃん。その証拠に・・・ほら」

りみの隣には、産まれたばかりの子供がスヤスヤ眠っていた。それも、二人。

疾透 「よかった…本当に…」

そう言つて俺は肩の荷が下りたのか、無意識に力が抜けて床に座り込んでいた

ゆり 「疾透くん、大丈夫？」

疾透 「ちよつと力が抜けただけです。ゆりさんもこれからはお姉さんです。ゆりさん、大丈夫です。」

ゆり 「そうだね、この年で妹を持てるなんて幸せだよ」

疾透 「…ゆりさん、俺と2つしか違いませんよ」

ゆり 「細かいことは気にしたら負けだよ、疾透くん？」

りみ 「疾透くん、この子たちの名前、どうしよつか？」

疾透 「そうだな…少し考えさせてくれ」

【数分後】

疾透 「よし、決まった。こつちの子は…でどうだ？」

りみ「うん、それじゃあこの子の名前は…でどうかな？」

ゆり「うん、いいんじゃないかな。」

疾透「それじゃあ二人の名前はこれで決まりだ。りみは疲れてるだろうから退院するまでゆっくり寝ててくれ。時間がある時にこっちに来るからそんなに寂しくはないだろうけど…」

りみ「私は大丈夫だよ。疾透くんとお姉ちゃんが会いに来てくれるだけでも私は嬉しい…から…」

疾透「りみ？」

りみ「(スウ…スウ…)」

ゆり「寝ちやったね、りみ。これまでで一番疲れたみたいだからね…」

疾透「寝ちやいましたね。さて…これからどうしますか？」

ゆり「りみと疾透くんたちの子供を起こしちや悪いから一旦帰ろっか。」

疾透「そうしますか。りみ、また今度な。」

そう言っただけで俺はりみの額にキスをして病室を後にした。それからは仕事の休みを使っただけで俺たちの子供に会いにいったりした。ゆりさんもモデルの仕事が忙しくてあまり時間は作れなかったみたいだけど、それでも休みの日はりみのお見舞いに一緒に行ったりした。それから数年後…

6月10日

【午前10時：牛込家リビング】

疾透 「今日の仕事は終わり…っと」

(クイッククイック)

疾透 「ん？」

?? 「パパ…だっこ…お願いなのです」

疾透 「おお、稚夏(ちなつ)か。だっこか？よしよし…。(ヒョイツ)」

稚夏 「(パアア) えへへ…」

【オリキャラ紹介：この子は森睦稚夏(もりちかちなつ)。俺とりみの間に産まれた双子

の妹だ。髪の色は黒で、瞳の色は赤色。りみに似て引つ込み思案だが、俺にも似て物事には興味津々。口癖は『くなのです』（りみと一緒にT U O A Y Aで借りてきた某艦隊アニメのDVDのキャラのセリフに影響された）好きな色は黄色。」

疾透「稚夏、お姉ちゃんはどうしたんだ？」

稚夏「お姉ちゃんならママのところ…なのです」

（ガチャ・・・）

りみ「疾透くん、おはよう。」

稚夏「ママ…嬰奈（えな）おはようなのです」

嬰奈「パパ…稚夏…おはよう…」

「オリキヤラ紹介…」の子は森睦嬰奈（もりちかえな）。俺とりみの間に産まれた双子の姉だ。髪の色は稚夏と同じで黒で、瞳は青色。恥ずかしがり屋と思われがちだが、実際はコミュニケーションをとるのがうまく、有咲たちポピパのメンバーと顔を合わせた時、もすぐに仲良くなった。口癖とかは特にない。好きな色は水色」

りみ「稚夏ちゃん、起きていなくなったらと思ったら疾透くんのところに行ってたんだね」

疾透「ああ。俺の方は仕事っていつても昨日の残りを片付けただけだったから特に苦も無く今日は休みだしゆっくりしようかなって思ってたから」

嬰奈「パパ：今日はお出かけしないの：？」

疾透「別に特別何かをするってこともないしな：きてどうするか」

稚夏「それなら・・・お出かけしたい：なのです」

りみ「2人もこう言ってるし今日はどこかにお出かけしない？お姉ちゃんは今日も仕事だけど・・・」

疾透「んー：確かにこうして家でのんびりしてもいつものことだしな：どこか行くか」

俺たちは車を出して出かけることにした。話す時間も計算して水夏姉さんが働いているパスパレの事務所と流星堂の2か所に行くことにした。ちなみに稚夏と嬰奈のことを知ってるのは水夏姉さんとゆりさん、りみと俺だけだ。

【午後12時：アイドル事務所】

(ピンポン)

彩「あ、疾透くんとりみちゃん！こんにちは！今日はどうしたの？」

疾透「昨日の分の仕事が終わったから今日はどこかに出かけようってことになって、久しぶりにここに来たくなったんだ」

りみ「こんにちは、彩さん。今日はパスパレの皆さんはオフなんですわね」

彩「うん、今日はみんなオフなだけどもんなで集まろうってことになって今日はみんなで休憩室にいるよ。私は水夏さんから連絡をもらってりみちゃんたちのお迎えなんだけど・・・」

(クイクイツ)

彩「疾透くんかりみちゃん、私の袖を引っ張ったりしてないよね？」

疾透「この年になって年が近い人の袖は引っ張らないですよ・・・嬰奈じゃないですか？」

彩「嬰奈ちゃんって誰？」

りみ「私と疾透くんの子供ですよ」

彩「ええっ!? そんなこと水夏さんから聞いてないよ!」

疾透「まあ、水夏姉さんは滅多に家族のことはしゃべりませんからね。」

嬰奈「彩お姉ちゃん…だっこ」

疾透「嬰奈もこう言ってますし、だっこしてあげたらどうですか?」

彩「え、いいの?」

りみ「嬰奈ちゃんは誰とでもすぐに仲良くなれるので大丈夫ですよ」

彩「そうなんだ? それじゃあ…(ヒョイツ)」

嬰奈「えへへ…」

疾透「嬰奈も喜んでるし、休憩室まで案内をお願いできますか?」

彩「うん! みんなには今日来ることは言っているの?」

りみ「いえ、言っていないですね。だからサプライズ訪問ってことになっちゃいました」

彩「みんなの驚く顔が楽しみだなあ…それじゃあ行こう!」

彩さんは嬰奈をだっこしてややスキップ気味に休憩室に俺たちを案内した。

【休憩室】

彩「みんな、ただいま！」

千聖「あら彩ちゃん、ご機嫌ね。どうしたの？」

日菜「あー！彩ちゃんが子供をだっこしてるー！つてあれ？彩ちゃんって子供はいなかったはずだよ？誰の子供なの？」

彩「えへへ、それはねー…」

疾透「こんにちは。日菜さん、千聖さん、イヴ、麻弥さん」

日菜「あーっ！疾透くんだ！りみちゃんも一緒なんだね！」

りみ「日菜さん、水夏義姉さんがお世話になってます・・・」

イヴ「リミさん、お久しぶりです！」

りみ「イヴちゃん、久しぶりだね。元気にした？」

イヴ「はい！みなさんでアイドル活動を続けています！」

麻弥「ところで、彩さんが抱っこしている子とりみさんがおんぶしている子つて疾透くん達のお子さんですか？」

疾透「はい。ここ2年の間は嬰奈と稚夏のお世話で家から出られなかったのが今日。稚夏と嬰奈の紹介も兼ねて来たんです」

千聖「ふふ、可愛いわね。お持ち帰りしたいくらいよ」

疾透「それはさすがに勘弁してください、嬰奈だったら1週間くらい千聖さんと一緒にいかなないんで」

千聖「冗談よ」

稚夏「パパ：お姉ちゃんたちと遊んで：いい？」

疾透「ああ、行つておいで。」

そういつて稚夏は日菜さんたちのところにトコトコ歩いていった。日菜さんたちは稚夏と嬰奈が可愛くて日菜さんたちが子供の時を着ていたらしい服をどこからか持つてきて稚夏と嬰奈にプレゼントしてくれた。あと、嬰奈はパスパレの大ファンで彩さんたちと集合写真を撮ったときは満面の笑みだった。稚夏は千聖さんが持つてきた子供用のパスパレのライブ衣装を着たところ、とても喜んでいた。千聖さんは喜んでいる顔を見れて満足したのか、これもまたプレゼントしてくれた（プレゼントしてもらったのは千聖さんがライブの時に着ている衣装の子供用）。衣装は水夏姉さんが作ってくれてるらしく、2日あれば作れるのだとか。ちなみに嬰奈も日菜さんが着ているライブ衣装の子供用をプレゼントしてもらった。それから俺たちはここ2年の間のパスパレの活動内容や俺たちの生活等を話した後は事務所を後にして流星堂へ向かった。

【流星堂】

(ピンポーン)

有咲 「こんな時間に誰だ？」

疾透 「よ、有咲。」

りみ 「有咲ちゃん、こんにちは」

有咲 「なんだ、りみと疾透か・・・ってああああ!? 何でうちに来てんだよ!」

疾透 「話すと長くなるからとりあえず中に入れてくれ、もうみんな来てるんだろ？」

有咲 「私はそんなこと送ってないんだけど」

疾透 「律儀にも沙綾が今日の予定を送ってくれてな、さつき事務所に行ってきてその

寄り道つてところだ」

有咲「沙綾―!?…まあ上がれよ。」

りみ「ごめんね有咲ちゃん、連絡もなしに来ちゃって…」

有咲「別にりみが謝ることじゃねーだろ？いつものことだしな…で、りみと疾透の後ろにいる子は誰だ？」

疾透「それについては後で説明するからとりあえず入れてくれ…暑くてたまらない」

俺たちは流星堂に入った

有咲「疾透たちを連れてきたぞー」

疾透「香澄、沙綾、たえ。こんにちはだな」

香澄「疾透くん！久しぶりー！2年も会えなかったから寂しかったよー！」

沙綾「りみりんも久しぶりだね。2年ぶりだっけ？りみりんがないポピパは寂しかったよ」

りみ「ごめんね香澄ちゃん、おたえちゃん、沙綾ちゃん。こつちにも事情があつて…たえ「それって、りみりんと疾透くんの後ろにいる子のこと？」

疾透「まあな。」

有咲「で、その子たちは誰だ？まさか疾透たちの子供だなんて言わねーよな？」

疾透「するどいな。その通りだ」

有咲「そうか、疾透とりみの子供か…つてはああああ!？」

稚夏「(ビクビク)」

疾透「有咲、あまり声を出さずから稚夏がびつくりしてるだろ。もう少し声を抑えられないのか？」

有咲「はあ…そういうことは早く言えつて…ツッコむのも苦労するんだよ…」

嬰奈「パパ、ママ…お姉ちゃんたちと遊んできてもいい…？」

稚夏「私も…お姉ちゃんたちと遊びたい…なのです」

りみ「行つてらっしゃい。このお姉ちゃんたちは私たちの高校生時代からの親友だか

ら安心していいよ」

嬰奈・稚夏 「行つてきます・・・」

それから嬰奈と稚夏はポピパメンバーと遊んだ。トランプやU〇〇などの簡単なゲームばかりだったが、稚夏も嬰奈も勝ち負けよりは俺やりみ、ゆりさんといった家族でしかやらなかったのを他の人と遊べたことが何よりもうれしかったのだろうか終始笑顔で遊んでいた。

疾透 「はは、嬰奈も稚夏も楽しそうだな。ここに連れてきてよかったよ」

りみ 「そうだね。嬰奈ちゃんも稚夏ちゃんも薫さんたちのところに連れて行ったことがあったけど前よりは人見知りしなくなっただしよかったあ・・・」

疾透「だな。人見知り人は人それぞれだから稚夏と嬰奈もりみの人脈もあつて人見知りじゃなくなつたしこれはりみに感謝しないと。俺だつたら多分どうしようもなかつたかもだし」

りみ「でも、私の引つ込み思案がなくなつたのも疾透くんのおかげだから…ありがとう、疾透くん。」

疾透「俺は特に何もしてないけどな」

りみ「ううん、してたよ。私が嬰奈ちゃんと千夏ちゃんを身ごもつたときも、疾透くんは私の手を握つてずっと励ましてくれたし、二人を産むときになつても疾透くんは部屋の外でずっと私のことを心配してくれてたのがとても嬉しかったんだ。」

疾透「あの時はりみが痛がつてるのが見てられなかつたんだ。俺がずっと近くにいてわけにもいかなかつたしな…俺はりみの夫だけど、偶に弱気になることだつてあるんだよ」

りみ「でも、弱気になることが全部ダメじゃないよ。私は疾透くんと出会つた時は弱気なままだつたし…」

疾透「そうだな。りみとこうして結婚してこんなに可愛い双子も産まれたんだ。今以上に幸せだつて感じたことはないくらいに」

りみ「私も、疾透くんと結婚して本当に幸せだと感じてるよ。こんなにかつこいい旦那

那さんがいて……」

疾透「りみにそう言ってもらえるなんて俺も嬉しいよ。りみだって以前は引つ込み思案だったけど今はそんなことはなくて俺にとっては最高の妻だよ。」

りみ「ふふっ、ありがとう疾透くん。」

疾透「(りみ、久しぶりにみんなに見せつけるか?)」

りみ「(ええっ!?そ、それは恥ずかしいよ……!)」

疾透「(はは、やっぱりこういう時は恥ずかしいんだな)」

りみ「(うう……疾透くんもみんながいる前では意地悪だよ……)」

香澄「2人して何をこそこそ話してるのー?」

疾透「まあ、思い出話をちよつとな。……りみ?」

りみ「疾透くん……えいっ!」

そう言つてりみは俺にキスをしてきた。それも、嬰奈や稚夏、他のポピパメンバーが見ている前で。

香澄「わ、わわわ……!りみりん大胆!」

たえ「RASのライブが終わった時とは逆の立場だねー」

沙綾「ふふ、見せつけてくれるよね2人とも。」

有咲「な、なななな……!私たちの目の前で何やつてるんだよ!」

嬰奈・稚夏 「ラブラブ・・・」

疾透 「…ったく、りみは不意打ちがうまくなつたよな。本当に変わったなりみは」
りみ 「ふふつ、そういう疾透くんだって変わったよ？でも、疾透くんはどれだけ変わったも疾透くんだから・・・ありがとう、疾透くん」

疾透 「俺の方こそ、ありがとうなりみ。」

俺たちの出会いは最初は小さなことだと思ってた。出会った時は引っ込み思案で

少し頼りないところとかがあつたりとか思つたりもした。俺はそんなりみに惹かれ、今はこうして同じ人生を歩んでいる。

俺は小さな森にすむ小人のような存在だった。それを覚えてくれたのは今俺の隣で笑顔を見せてくれるりみ。りみは俺にとっては小さな森に咲き誇る花畑のような存在だ。りみにとっての居場所は俺の居場所も同じだ。だから俺もこの笑顔に答えるように誓う。

『俺に居場所をくれた人の居場所を守り続ける』と。

「小さな森に花は咲く」
f i n

番外編：日常での甘い香りはイベント要素満載

3月22日

【森睦家リビング】

疾透「えつと…みんな集まったかな。いきなり呼んでごめん」

香澄「だいじょうぶだよ疾透くん！卒業式も終わったんだしみんなに会いたかったんだもん！」

たえ「えつと…なんで呼ばれたんだっけ？」

有咲「ちよ！おま！なんで忘れてんだよ！明日はりみの誕生日だろ！」

沙綾「でもよかったよね…ゆり先輩が今月中ただけど帰ってきてくれて…そうじゃなきゃこうしてりみりん抜きで集まらないから・・・」

疾透「だな。それにみんな高校を卒業して18歳にもなったんだしお酒も飲めるようになったから誕生日会も兼ねて飲み会にしようと思うんだけどみんなはどう思う？」

有咲「ま、まあいいんじゃないか？でも私たちだけでは買いにいけねーんじゃないか？」

疾透「まあそうなんだけど、水夏姉さんがこの間の俺の誕生日に大量のお酒を贈ってきたんだよ…何も今じゃなくていいんだけどな…」

沙綾「あー…水夏さんならやりそうだよね…というかよく贈ってきたね…」

疾透「手紙に『疾透、誕生日おめでとう！今日から疾透もお酒が飲めるようになったからといってもあまり高すぎるのもダメだからそこそこ控えめなやつを送ったからしみちゃんたちと飲んじゃえば？あ、私のことは心配しないでいいよ！P・S もし誕生日会をすることがあれば誕生日会の様子を撮ってほしいかな♪』って書いてたんだよ…というか俺の誕生日の日はまだりみが18歳の誕生日を迎えてないから飲み会も何もないのにな…」

香澄「さすが水夏さん！まるでエスパードだね！」

たえ「おー、水夏さんはエスパードだったのかな？スプーン曲げとか物を浮かしたりとできたりしないかな？」

疾透「いや無理だから」

沙綾「それじゃあこれから材料とかを買わないとだね。今から行く？」

疾透「早いに越したことはないし行った方がいいかもな。それじゃあ行くか」

有咲「ちよまま！お前から早すぎんだろ！置いていくんじゃねー！」

俺たちは買い物をしにショッピングモールに向かった

【午後3時：ショッピングモール】

疾透「こんなもの…かな。重くないか？有咲、香澄」

有咲「お、重いに決まってるだろ…！誰だじゃんけんで荷物持ちを決めようって言つたの…！」

たえ「あ、私だった。」

有咲「何で言い出しつぺのおたえが負けないんだよ…！しかも一抜けしてたし…！お

前らもなんとか言えって……!」

たえ・疾透 「「なんとか」」

有咲 「そういうのじゃねー……!か、香澄は重たくねーのか……?」

香澄 「ううん?重くないよ?」

有咲 「なんでそんなに平気なんだよ……!」

香澄 「私だって買い物をするときいつも荷物を持つてたから自然と力がついちやつた
!」

有咲 「なんでそうなたんだよ……!だ、誰かいい加減変わってくれ……!腕がつる……!」

疾透 「しょうがないな、俺が持つよ。よっ……と、意外と重いなこれ」

有咲 「はあ!?!めっちゃくちや重たいんだぞそれ!?!何でそんな平気そうな顔してるんだよ
!」

疾透 「いやだって俺は一人暮らしだしな。買いだめしておかないといざという時のために対応できないし。」

有咲 「……」

沙綾 「有咲?」

有咲 「だ——!早く帰るぞお前ら!明日の用意するぞ!」

香澄 「有咲——!待ってよ——!」

有咲はそう言うのと足早にシヨツピングモールを後にした。俺たちも有咲についていくようにシヨツピングモールを後にした…

俺の家に戻った後はりみを除いたポピパメンバーと俺で明日の誕生日パーティーのための準備を始めた。有咲とたえでリビングの飾り付けを、香澄と沙綾と俺で料理を担当した。

3月23日

今日はりみの誕生日だ。昨日作った料理は新しく買った大きい冷蔵庫に入れておいたので温めが必要なものはレンジで温めておいて、刺身などはポピパメンバーが来た時に出すようにするだけだからそっちは楽だ。俺の家には今沙綾がいて色々と手伝ってくれている。

【午後12時40分：森睦家リビング】

沙綾「疾透くん、これはここでいいかな？」

疾透「うん、なかなかいいんじゃないか？そろそろりみたちも来る頃だろうし準備しておくか」

沙綾「了解。りみの驚く顔が楽しみだね」

疾透 「だな。去年は色々あつて誕生日パーティーができなかつたし」

(ピンポーン)

疾透 「噂をすればなんとやら、だな。行くか」

【森睦家玄関】

りみ 「お、お邪魔します…」

(パァーン！)

りみ 「きやあ！」

香澄 「りみりん、誕生日おめでとうー！」

たえ 「おめでとうー」

沙綾 「おめでとう、りみりん！」

有咲 「お、おめでとう…」

疾透 「おめでとう、りみ。」

りみ 「み、みんな・・・ありがとう・・・」

疾透 「まだ泣くには早いだろ？ほら、今日の主役はりみなんだからもつとしつかりしない」と

りみ 「う、うん・・・ありがとう、みんな！」

そう言つてりみは俺の手を握つてリビングまで一緒に行った。

【リビング】

疾透 「それじゃあみんな、グラスは持ったか？」

香澄 「大丈夫！」

たえ 「私も準備オツケーだよ」

沙綾 「ふふ、有咲緊張してる？」

有咲「べ、別にそんなんじや・・・あーもう！早くやるぞ！」

疾透「はいはい。それじゃあ今日はPoppin' Partyのベース担当、牛込りみの誕生日を祝って・・・」

全員「「「「「カンパニー！」「」」」」」

こうして、りみの誕生日パーティーが始まった。

りみ「このチョココロネ、めーっちゃおいひいー！もしかして手作り？」

疾透「あー…うん。手作りだよ。沙綾に手伝ってもらったけどな…」

沙綾「それでも十分うまかったよ？これなら疾透くんもパン屋さんになれるんじゃないかな？」

香澄 「疾透くん、パン屋さんになるの!？」

疾透 「いやならないよ。」

たえ 「なんで？」

疾透 「いやなんでも何もまだじつくり考えられるんだしな」

有咲 「疾透ならなれるんじゃないかね？」

りみ 「この刺身は誰がおろしたの？」

香澄 「それは私だよりみりんー」

りみ 「香澄ちゃんがおろしたの!？」

沙綾 「でも香澄がやったのっておろしたただけじゃないんだよね。市場で買ってきた魚

をそのままおろしたんだから」

香澄 「えへへー、私頑張ったよー」

たえ 「かしゆみー、よく頑張ったねー(ナデナデ)」

香澄 「えへへー、もつと褒めておたえー」

疾透 「・・・なあ、この二人もう酔ってないか？」

たえ 「しよんなことないよー？次のお酒まだー？」

有咲 「しよれならここにあるぞー？おたえ、飲み比べしないかー？」

たえ 「いいよー、勝負ー」

疾透「有咲も酔ってないか!？」

沙綾「そうだねー、ありしやも酔ってるねー」

りみ「沙綾ちゃんまで!?!み、みんな落ち着いてー!」

沙綾「りみりーん、疾透くーん」

りみ「さ、沙綾ちゃん?」

沙綾「2人はいつ結婚するの?」

りみ「さ、沙綾ちゃん!?!何言ってるの!?!(た、確かに去年の主催ライブの日にプロポー

ズされたけど……!)」

沙綾「りみりーん?いつ?」

りみ「(は、疾透くん……助けて……!)」

香澄「疾透くーん、私と飲み比べしようよー!」

疾透「香澄、お前はもうちよつと落ち着け!もうチューハイ5缶目だろ!?!」

たえ「それ、私も混ぜてー?私はまだまだいけるよー。」

疾透「つてたえもかよ!?!有咲はどうしたんだ!?!」

たえ「有咲ならあそこで伸びてるよー?」

たえが指をさした先には、ソファアの上で寝転がっている有咲がいた

有咲「も、もう飲めねえー……ヒック」

疾透「ま、まずいな…この中でまじめな方の有咲もダウンしてるしあつちではりみも沙綾に巻き込まれてるし…これはまずいな…）…ごめん！香澄、たえ、沙綾！」

ゴンツ、ゴンツ、ゴンツ！

香澄「あうー…（バタリ）」

たえ「ううーん…（バタリ）」

沙綾「うーん…（バタリ）」

疾透「はあ…はあ…ちよつと荒つぽかったけど…こうするしか止める方法がないんだ…すまない」

りみ「あ、ありがとう疾透くん…私じゃどうしようもなく…」

疾透「さすがに俺でもあの二人を相手にするのは無理だったからな…大丈夫か、りみ？」

りみ「う、うん…でもさっきの拳骨は痛そうだね…」

疾透「まあ全力だったしな…りみはお酒は飲んだのか？」

りみ「ち、ちよこつとだけ…チューハイ一缶だけだけ…」

疾透「それくらいがちようどいいだろうし控えめにした方がいいかもな。っと、そろそろあいつらが起きるころだろうし水道水をかけて起こしてあげるか。りみも手伝ってくれ」

りみ「う、うん…（大丈夫かな、有咲ちゃんたち・・・）」

（バシヤア！）

香澄「冷たーい！」

たえ「お冷だー」

沙綾「あ、あれ…？私何してたんだろう…？」

有咲「あ、頭がいてー…疾透、私たちは何してたんだ？」

疾透「お前たち4人は酒を飲みすぎて倒れてたんだよ（たえと香澄と沙綾は俺が無理

やり止めたんだけど……」

沙綾「そつか……ごめんね。りみりん、疾透くん」

りみ「だ、大丈夫だよ沙綾ちゃん……もう落ち着いたから……」

有咲「……その割にはさつきからチューハイを飲んでねーか？それ何缶目だりみ？」

りみ「え？3缶目だよ？」

有咲「なんともねー……よな……？」

りみ「うん、大丈夫だよ？」

有咲「よ、よかった……りみが倒れたら誕生日パーティーも何もなくなるから……でもあんまり無理すんじゃないぞ？」

りみ「心配してくれてありがとう有咲ちゃん。」

有咲「べ、別にそんなんじゃない……」

香澄「有咲、照れてるー？」

有咲「照れてねー！」

それから有咲が弄られ続けパーティーは盛り上がった（？）、有咲たちは帰っていった。りみはお腹がいっぱいじゃなかったのか家に残った。

疾透「ふう…とりあえず騒がしいのは帰ったな…りみ、大丈夫か？」

りみ「らいじょうぶだよ疾透くん。」

疾透「…え？」

りみの顔は赤かった。恥ずかしい思いをしたというわけでもなく、ただただ赤かった。何かの違和感を抱えながら周りを見るとそこには…片づけた後の机の上に転がっている何缶ものチューハイの缶だった

疾透「1、2、3…りみ、何缶飲んだ？」

りみ「何缶ってー、全部だよー？（ヒック）」

疾透「全部…？（待て、思い出せ俺…香澄たちが帰る前に空き缶は全部処理して机の上に残っていたのは9缶だったはずだ…もしかして）9缶全部飲んだのか…？」

りみ「うんー、全部飲んじゃったー…ねー疾透くーん…」

疾透「な、何かなりみ…?」

りみ「私たちつてもう大人でしょー?もうそろそろ結婚について考えてもいいんひやないかにやー?」

疾透「た、確かに去年のクリスマススイヴにプロポーズしたけど…!もうちよつと待つても…」

りみ「だーめー。ここで断るのなら…こうしちゃうよー?」

え、ちよつと待つてりみさん高校は卒業したけどそういうのは早いっていかどうしてそんなこと知ってるんですか誰に教わったんですかお願いしますそれだけは勘弁してくださいお願いします有咲さんたち戻ってきてくださいこのままj…

疾透「ああああああ…!」

この後何が起きたかは読者の想像にお任せしますby作者

この日、森睦家から一人の男性の悲鳴が上がった：